
ONE PIECE ~紛れ込んだ双子~

ペニシリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE ～紛れ込んだ双子～

【Zコード】

Z1864P

【作者名】

ペニシリン

【あらすじ】

別世界から気付いたらワンピースの世界へやって来てしまった超の付く美女美男の双子の兄妹。しかし、2人ともワンピースは名前しか知らず、話の中身は全く分からないので、この世界の人物、出来事、悪魔の実もちろんふんかんふん……そんな2人はワンピースの世界でどんな生活を送るのか。

いざれ出て来る悪魔の実の中には、原作のルールを壊して仕舞うものがある予定です（数は極々少なくはしますが）

1話 始まり（前書き）

一回時の連載（^-^;）

怖くて手を出せずにはいましたが、怯えていては何も出来ないと…
…取り合えずは頑張ります！

主人公の設定が在り来りなのが、馬鹿らしく見えるけどそれが書いてて、想像してて楽しいんだからしょうがない（笑）

1話 始まり

++ある無人島++

「……おはよウ……アト」

アト「おはよウ……ティア……」

ティア「……分かる?」

アト「……分からぬいわ……」

前方には透明な海、後方には動物の鳴き声、豊富なジャングル、そして、自分達の今いるこの場所は口差しすらも反射する程に白い海岸が広がっている。

そつ、彼等は皿のベッドの中で寝たの、いざ皿覚めれば海岸にパジャマで寝ていたのだ。勿論ベッドも無くなつており、少し肌寒い。

アト「フカフカのベッドに包まつてね……」

ティア「…………僕達は家で寝たよね…………？」

2人がこれほどまでに驚いているのは説がある。

アト「…………」

ティア「…………」

ティア「まあ、寝ても仕方ないよね、適当に歩いて見ようか」

立ち上がり、適当にパジャマに纏わり付いた砂や砂利を軽く払って、アトに手を差し出す。

アト「そうね、まず海岸周りを見てみましょっ。」

ティアの手に自分の手を重ね立ち上がる。やはりパジャマにくついた物が気になるのだろう、背中等手の届かない所はティアに頼んだりして適当に払っている。

アト「ありがと、ティア。さ、そろそろ行きましょう?」

ティア「どういたしまして。それじゃ、行こうか

アト「ええ」

（～）

どれほど歩いたのだろうか、残念ながら彼等の細い腕には時計何て便利な物など付いておらず、時間を把握することは出来ない状態である。しかし、2人の脚にはかなりの疲れが溜まっているのだろう、既に痛みが走り出して経過した時間は短くない、それ相応に時間が過ぎている事を考えると3～5時間と言つた所か。

ティア「こいつて僕達が寝てた場所だよね……」

アト「ええ……。この程度の時間で回れるなら、ホントに小さい島みたいね」

ティア「入つてみる?」

後方のジャングルを指差し尋ねる。アトもほんの少し考へるそぶりを見せるが、直ぐに結論を出し、『行きましょう』と答へる。

（）

あれから、もう少し時間が経過した。彼等はジャングルの中を適当に探索し、分かつた事がある。この島の動物達は余りにもでかく狂暴、自分達がいたはずの所の大きな動物など所詮は象、キリンで精一杯だが、ここのは虎はそれを凌駕するサイズを誇り、更にまがまがしい。目は血走り、牙は口を閉じていっても簡単に確認出来るほど大きい。何とか身を隠しやり過ごしてきたが、見つかるだけで自分達は終わりだろうと覚悟しながらも探索を続けた結果は非常に、満足出来る物だった。

ティア「アト、湖だ！」

アト「良かつた……水分は何とか確保出来そうね……」

そう、湖を見つけたのだ。海水でも火を使えれば普通に飲むことが出来る様になるが、火を出す手段が無いので、没としたのだ。

ティア「底が見える……凄く透き通ってるね」

アト「ええ、飲めそうで良かつた……」

2人は手で水を掬い、喉を潤す。一気に身体の疲れが吹き飛んだ心地になるが、すぐに足りない物に気付いてしまった。

ティア「何も食べてないね……」

2人ともどちらかと言つと少食の部類に入るが、起きてから約7～8時間歩き続け、何も食べていないのだ、お腹がすくのは当然の事。

アト「そうね、流石に何か食べたいわ……」

探索の途中で2人は所々木の実や、植物がある場所を確認し、既に把握している。

ティア「じゃあ、食べ物集めよつか

アト「そうね、行きましょっ

（）

あれからも、もう更に時間は経過し、2人の手元には木の実やら植物が大量に集まっていた。運よく湖から5分程歩いた所に洞穴の様な場所があり、そこで一息ついていた。当然この洞穴には主がいる可能性は多大にある訳だが、開けた地形じゃないだけに、短時間ならここの方がよっぽど安全だろうと判断しての事だ。

ティア「ふう、……余りおいしいとは思えないね……」

アト「そうね、ただ、少しだけおいしいのも合つたけどね」

ティア「そうだね、お腹もとりあえず膨れたし良かった。そろそろ出ようか」

アト「その方が良いわね、主人が帰つて来ちゃうわ……」

その後2人は再びジャングルの探索を始めた。身を隠す事にはすっかり馴れてしまい、野獣達に見つかる事は全くなく、大方ジャングルを探索し終えた頃にはすっかり辺りは闇に包まれてしまっていた。

2人にはある問題が合つた。お互い気付いていたが、結局解決策を見出だせず、困り果てていた所だったのだ。

ティア「どうやつて寝よう……」

アト「あの洞穴で寝る訳にもいかないしね……」

そう、彼等が生きていられたのも、野獣達から身を隠し続けていたからであり、睡眠によつて意識を手放す訳にはいかないのだ。

しかし

グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！

そんな事を2人で話しあっていたと、遠くからシンザク様な野獸の鳴き声が聞こえてきた。

ティア「……何だ？」

アト「……穢やかじゃないわね……」

冷静を保つてはいるが、しばらくは動けずに鳴き声のした方を見つめていた。が、その後に見えた物には驚きは隠せなかつた。

ティア「……！？ あれは！？」

アト「光！？」

そう、微かに赤く光っているのだ。しかも、その直前に野獣の断末魔と思われる物を聞いているので、肉にありつける可能性も高い。期待しない方が可笑しいという物だ。しかし、辺りは闇。昼の明るい状態とは訳が違う、小さな物音一つも命取りになる。

ティア「行こう、アト」

アト「ええ、その方が良いわ」

例え今行かないとするなら、とりあえずは生き長らえるだらうが、夜も眠られず、長く生きる事が出来るとは到底思えない。

（）

あれから、光の方向へ進み続けて来たが、1つ問題が出来た。未だ確実な物では無いが、恐らく何かに見付かってしまった。何かが違うのである。ただの感覚としか言いようが無いが、2人の意見はガツチリと合つてしまつた、何かに見続けられている。光はもうすぐそこに見えているのだ、後少し頑張れば人に会える可能性がある以上希望はを持ち続けるが冷静を保つ事は決して忘れない、闇雲に走り出す何て馬鹿げた事はない。

しかし、暗闇のジャングルで足元に注意しているとは言え、人間には限界がある。

アト「……キヤツ！」

木の根っこに脚を取られ、転ぶ瞬間に声を出してしまった。即座にティアがアトを立たせるが、疑問が核心に変わった、背後から何かはいする様な音が凄い速さで追いかけて来る。

ティア「（蛇！？ うつ……もつすぐそこなのに……）」

アト「（ダメ……追いつかれる！）」

2人が完全に諦めかけた瞬間、何かが2人の横を走り抜け、前に出た。

ティア「……えつ？」

アト「……人？」

2人が驚くのもつかの間、一瞬だけピカリと小光りした瞬間目の
前の蛇は真つ二つになってしまった。

ティア「（……剣？）」

？？？「……」

大蛇を斬った張本人は、2人が安全なのを確認し、剣を鞘に納め
ると、何も言わずに振り向き去ろうとした。……が

ティア「待つて下さい！」

？？？「……」

剣士は首だけを「チラ」に向け、2人のなりを見て、いつ言った。

？？？「……来い」

いつも言いたくなるのはしじうが無いだろう。2人の格好は酷い物だった。いくら野獣に遭遇する事はなくとも、一日中馴れないジヤングルの中を歩き回り、どこかに引っ掛ける事もあつたろう。着ていたパジャマはボロボロになり、草の汁や泥で汚れに汚れていた。オマケに裸足で足からは所々流血し、武器も持たない様な子供がこんな所で生きて行ける筈が無い。

ティア「えつ？……」

アト「……」

2人とも普段は如何に冷静沈着と言えども、命の危機に触れてすぐには静を取り戻せないのは仕方の無いこと、そんな2人にもう一度剣士は声をかけた。

？？？「聞こえなかつたのか？　来いと言つている」

ティア「あつ……はい」

アト「……ええ」

（）

ティア「さつきは助けてくれて、ありがとうございます」

今現在は、先程光が見えた場所に来ており、恩人の剣士がここで温かい食事を与えてくれた。

やはり見えた光は焚火であり、近くには食用サイズに切り刻まれた肉が置いてあった。その肉を軽く炙り、パンに挟んだ物はホントに美味しく、ここに来て初めて全てが満たされた様な気持ちになる。

????「気にするな、それより……お前達は何故ここにいる」

もつともな疑問、17～18程の子供がこんな場所でボロボロになっていたのだ。

アト「それが、分からんんです……昨日私達は普通にベッドに入つて寝ただけなのに、今日の朝起きたら海岸にいたんですね……」

バカバカしい話である。こんな話をしても信じて貰える筈が無いと頭に入れながらも、説明をした。……が、この男は違つた。

？？？」ふむ。聞いたことも無い事だ」

ティア「信じて貰えるんですか?」

信じて貰えた事が逆に驚きだつた。

？？？「嘘をついてる者とやつでない者の区別くらいは出来る。お前達も混乱しているのだな？」

ティア「お見通しですね……これからどうすれば良いのかも分からなくて困っていた時にちょうど焚火が見えた物ですから……とにかく人に会いたくて、ここまで来ようとしたのですが……」

？？？「ふむ。まあ良い、お前達今日はここに寝て行け。寝床にも困っていたのだろう」

アト「助かります、一番困っていた事なんで……」

話し方自体は軽く威圧的な物があるが、人自体は思つていたよりも優しく面倒見の良い男で2人は安心し、完全に気を許して接している。

だが、今まで聞いていない大事な事を忘れていたのをパツと思い出し、質問してみる。

ティア「あの、そういうえば、名前は何と言つのですか？」

？？？「俺の名前はジュラキュー・ミホーク、ミホークで良い」

1話 始まり（後書き）

ミホークって事はばれてる事前提で書いてます（笑）

ミホークは面倒見が良くていつも見えるんですね……皆さんばど
うなんじょ

2話 稽古（前書き）

テスト近いのに何やつてんだる……（^—^；）

ティア「うへん…… 良く寝た」

現在ティアとアトはミホークに出会い、軽く話した後、気持ち良く眠っていた所だつた。

ティア「（アト…… はまだ眠ってるか、無理もないね……）」

アトはティアのすぐ傍らで眠つており、未だ目覚める様子は無い。アトを起こさない様に体を起こし、少し伸びをすると、体中に血が巡るのが分かる。スッキリとした頭に浮かぶ事はやはり、全体もスッキリさせたい、そう、お風呂に入つてないのだ。昨日はジヤングルを一日中歩き回つた。そりや汗もかくし、泥んこも体中に、特に足元にこびり付いている。余裕が出来たのだろう、昨日は考えもしなかつたが、湖で汚れを落とそつかと歩き出した瞬間に、向かおうとした方向から声がかかった。

ミホーク「どこへ行く？」

両手にタップリと水を汲んだミホークが立っていた。そういえば、周りにいなかつたなと思いながらも、質問に答える。

ティア「おはよ〜」やれこます、ミホークさん。体が汚れているので、湖で流れればって思いまして」

ミホーク「そうちか、今なら大丈夫だらう、行つてこい」

ティア「はい、行つてきます」

~~~~~

ティア「ふう～、冷たくて気持ちいな……」

体を流し終え、湖に足だけ浸かって、一休みしている所である。そこへ、人が来る気配がした……。気配というか核心していた、人物も特定出来る。何故か少し前からに気配の様な物を過敏に感じるが、「生き残る為に勘が良くなつたのかな?」何て軽く考え、また水に意識を集中させる。

アト「おはよ～、ティア」

そう、後ろからやつて来たのはアトである。目が覚めてすぐミホークにティアの居場所を聞き、ここにやつて来た。

ティア「おはよう、良く眠れた?」

アト「ええ、あんなに熟睡したのは久しぶりだわ」

アトは湖に膝下まで浸かり、体の汚れを落としていく。その様子を何となく見ていたが、どうやら終わつたらしく、「戻りましょうか」と掛かる声に「うん」と答え、2人並んでミホークのもとへ歩いて行つた。

（――）

ミホーク「戻つたか、ちょうど朝食が出来た所だ」

さすがにここまでしてもらってノウノウとしていられる程2人の神経は太く無い、その旨を伝えたが、一蹴され、結局は恩恵を受ける事になる。

しかし、朝食を食べ終えた後に2人で話し合つた事がある。いつまでもミホークの恩恵を受けていては、自分達は自力で生きる力をつけられない、ミホーク自信も縛つて仕舞う。このままではお互い良い事では無い。2人の話の結論をミホークに伝える事にした。

ティア「ミホークさん、僕達に稽古を付けて下さい」

せめてこの島で自立出来るくらいに、後もつ少しだけミホークに助けて貰いたいと、誠意を込めて話した。ミホークも何も言わずに黙つて聞いてくれていた。この島から連れ出してくれという話しも出たが、この世界はどこへ行つてもこの島の様に危険な可能性がある。そこを考えると、一時的な凌ぎではいけない、ならば自分達で生きていける様になる方が良い。ミホークに手間をかけさせて仕舞うのが大分心苦しいが。

ミホークも10秒程考えるそぶりを見せるが、比較的早く決断し、口を開いた。

ミホーク「ふむ……良いだろ？ ちょうど暇な所だった、ミッチリ稽古を付けてやる」

ティア・アト「ありがとうございますー！」

（）

稽古の願いを出したその日からミホークは相手をしてくれた。ちょうど近くに大きな鎌ににた形で折れた木があったので、アトはそれを振り回してミホークと戦つて見た。案外しつくりきたので、これからもそれを愛用する予定。ティアもアトと一緒に良い何て言って、鎌の様な木を探したかいがあり、同じ様な木を見つけられたので、それで戦つていた。だが、所詮「木」耐久性も殆ど無いに等しいが、それでも折れないで戦い続けていられるのはミホークが上手くいなしてくれていたからだろう。

ミホークは普段こそ優しく接していたが、稽古となると一気に厳しくなった。平気で2人に辛辣な言葉を投げ付ける事も少なく無かつたが、稽古が終わるといつも通り優しいミホークに戻る。優しい

と言つても、他人から見ればそつは見えないだろうが、近くにいる人しか分からぬ物も沢山ある。

（）

ミホークに稽古を付けて貰つてから、3日が経つた。この日の稽古が終わつてから、ミホークにある事を言われた。

ミホーク「ティア、アト、後ろを向いて皿をつむれ」

最初は何を言つてゐるか分からなかつたが、取り合えず従つ事にした。準備が終わると、ミホークにこんな事を言われた。

ミホーク「おれは今何本指を立ててゐるか答へ」

普通だつたら分かるはずが無いだろ?と思つが、2人は違つた。

ティア・アト「3本」

ミホーク「(……やはりな) もひいぞ」

ティア「やっぱり、アトも見えたんだ」

アト「ええ……」

2人は後方にあるものをピタリと当てて見せた。あてずっぽうではなく、核心を持つて。

ミホークには疑問に思つていた事があつた。全への素人が、ここ

に潜む野獣達に見付からぬで島全体を探索出来るものが、結論は何も考えずともNOだ。この島は面積に見合はない程の野獣達が潜んでいる訳ではないが、十分に多いと言えるレベルだ、偶然にしても出来過ぎてている。

ミホーク「（見聞色の霸氣、一級品と言つても良いな……）」

そう、2人はただの勘で済ましてしまつたが、実は見えていた、聞こえていた。偶然遭遇しなかつたのではない、本能がサイレンを鳴らしていたのである。

ミホークも対峙して確信した。自分が剣を振る前に切つ先を見切られる事が多々あつたのだ、未来が見えていなければ、説明がつかない程に早く。

この後ミホークは2人に見聞色の霸氣について適当に説明したが、敢えて2人の霸氣はまだまだと言つておいた。

2人も納得していたようだが、自分達にそんな力があったのだと、驚いていた。

（）

あれから、一月程経過して、気付いた事がある。ミホークから前程に辛い言葉を聞かなくなつたのと、周りの野獣達が自分達を避ける様に動く様になつたのと、それが分かる程に見聞色の霸気が強化された事、そして思いつ切り木の大鎌を振っているのに折れていな事。

ミホーク「（本来霸氣は年単位でやつと身につく物……こいつ等の才能の成せる事、天賦の才か……武装色の霸氣も身につけつつある……面白い）」

ミホークも本来ならこの島で自立出来る様になつてすぐに稽古を終えるつもりだったが、2人の成長の速さにミホーク自身が楽しんでいる事を自覚してしまつていてる。

～～～

あれから更にもう一月経過したころ、ティアとアトも武装色の覇氣をほぼ身につけていた。

ミホークの心境にもある変化が現れた。ティアとアトの才能に確たる未来を期待仕出す様になつたのだ。将来世界に多大な影響を与える器になると、将来は自分の好敵手になり得ると。

～～～

そしてある日ミホークがこんな事を口に出した。

ミホーク「ティア、アト、」の島を出る

ティア「え？ どうして行きなり……」

そう、何の前触れもなく唐突に言い出したのだから当然疑問に思  
う。

ミホーク「この世界は力が全て、」の島ではそういう役不足だ

鍛える気満々のミホークに2人とも軽い喜びを覚えながらも、行  
き先を尋ねる。

アト「じゃあ、どこへ行くんですか？」

ミホーク「エニエス・ロビーだ



2話 稽古（後書き）

少し淡々とし過ぎてますかね～（ -  
” -  
- :  
- ）

## 39 マコソフターード（漫畫セ）

「ねえなセ、前回のハストドリホークは『ヒニヒス・ロビー』と言つてしまつたが、『マコソフターード』の間違いです。もひとひやんと確認していれば良かったのですが、不足していた様です。

＝（――）＝

ティア「所で、マリンフォードってどんな所なんですか？」

そう、原作を全く知らないので、島の名前を出してもパツとしないのである。

ミホーク「マリンフォードは海軍本部が置かれた政府の島だ」

アト「何でいきなりそんな所へ？」

ミホーク「海軍には六式という特有の戦闘技術がある。おれも良く知っているが、便利な物だ。覚えておけば何かと役立つだろう」

これまでミホークに稽古を付けてもらい、自分達でも分かる事がある。自分達はこの島で自立出来る程度に強くして欲しいと頼んだのだが、既にこの島に敵になる野獣はない程の強さは手に入っている。それでも未だ稽古を付けてくれるミホークにその旨を聞いてみたら、こんな事を言つてきた。

ミホーク「確かに、この島ではお前達に敵はいないだろ？が、やつて来る海賊達はここに野獸達程優しく無いぞ。それに、お前達はここで一生を過ごすつもりでは無いのだろう？良い機会だ」

その後は、これからも宜しくお願ひしますと伝え、すぐにマリンフォードへ出られると思つていたが、一つ問題点があった。

ティア「ミホークさんの乗つてきた船つて……これですか？」

そう、サイズが小さいのだ。普段は一匹狼のミホークの事だから、これで十分なのだが、今は3人いる。

ミホーク「そうだ」

アト「……乗れるかしら?」

ミホーク「試しに乗つて見るか」

乗つた。確かに狭い。常に誰かと接触しているが、乗れはした。

どう乗り込んだかと言つと、真ん中にミホーク、右側にティア、左側にアトの並びで収まつてゐる。

アト「……一応は大丈夫ね」

ティア「そうだね……」

行き当たりばったりで、これから航海が心配になるが、流石にこれからイカダを作ると言つのも面倒臭さ過ぎるし、辿り着けないという事も無いだろうと、航海を決行してしまつミホークだつた。

（）

あれから、半月が経過した。嵐やら海賊（身の程知らずが大半を占める）やらで、何だかんだ大変な航海になつたが、水平線にマリンフォードが見えた頃、こんな会話を交わす事になるとは思わなかつた。

アト「そりいえば、この格好で人前に出るのかしら……」

そう、2人は未だパジャマのままなのだ。ミホークが代えの服を持つてきていたが、ミホークは自分達よりも背が高く、サイズが全

く合わなかつた。

ミホーク自身も2人の格好はあんまりだなと思っていたので、普段より積極的に海賊船を潰して代わりの服を探して来たが、サイズが合わなかつたり、文物は無かつたりで結局はパジャマのままここまで来てしまつた。

最悪、このまま服を買って、その後すぐに宿で一泊するのも無しでは無いが、こんな格好で街中を歩く事は、ミホークにとつても、2人にとっても、避けたい事であつた。……が、そこで都合良く、目に入ったものがある。

「ミホーク」「……ちよつと良い、少し邪魔するところ

海軍の軍艦が港から出港したのが見えたのだ。向こう側に山丘に気付いているようだ、軍艦が少しづついいいる。

海兵「モモンガ中将！ ミホーク様の船が2時の方向に見えました！ ミホーク様はコチラにコンタクトを求めている様子です！ どうなされますか！」

ビシッと敬礼と起立を決め、報告をする海兵にモモンガ中将は視線を向け、少し考えるそぶりを見せ、答えて見せる。

モモンガ「ふむ……良いだろ？、方向転換しろ」

（――）

現在、ミホークの船と軍艦を隣接し終え、軍艦に乗り込んでいる最中だ。ミホークが乗り込む瞬間に海兵達がざわつくのが見えたし、先程からミホーク様ミホーク様と周りから聞こえて来る事から察す

るに、かなりの地位を確立しているのかなとティアとアトが考えながら、軍艦に一步足を踏み入れると、先程よりも更にざわつきが大きくなるのを感じた。

自分達の見なりに驚いてるのかと思ったが、ビリやヒリ違つ様だ。

モモンガ「お前が連れを持つとは……珍しい事もあるものだな」

ミホーク「ある島で拾つて以来共に行動している。ティアとアトだ」

ふむ、と顎に手を添えながらモモンガ中将がティアとアトを見ている。やはり見なりが気になる様だが、ミホークに用件を尋ね始めた。

モモンガ「それで、わざわざ呼び出した用件は何だ？」

ミホーク「2人にシャワーと服を提供して貰いたい」

分かったと相槌をうつモモンガにミホークは軽い礼を告げ、船に戻つて行つてしまつた。

モモンガ「誰か！　2人をシャワー室に案内してやれ！」

海兵「はっ！」

あれよあれよと言う間に事は進み、2人はついていけていながら、先程の海兵がやって来て、「コチラです」と案内してくれるので、そのまま従つ事にした。

（）

海兵「『モチラ』にお着替えを置いておきますので」

アト「分かりました」

海兵「ビーチでくわづ」

やう行つて海兵はもとの職場に戻つて行つた。2人ははと並んで野  
にシャワーを浴びていて、話をしている。

アト「気持ち良い……」

今までずっと水浴びだけだつただけに、久しぶりの温かいモノで  
体を流せる事がここまで幸せに感じるのが新鮮だった。

ティア「やつぱり泡があるって良いね」「

アト「ええ、凄く汚れが落ちてのを感じるわ……」

その後15分程度で体を洗い終え、現在着替えも終えた所である。

アト「海兵さんが着てた制服ね」

ティア「うそ、何か変な感じするや」

アト「でも、マコンフォードって海軍本部の島だって言つてたから、違和感はなさそうね」

」の後、モモンガ中将に礼をして、ミホークのもとへ向かい、マリンフォードへ再び船を進めるのだった。

~~~~~

ティア「ここがマリンフォードかあ……」

アト「面白い形の島ね……」

ティア「すぐそこにある城が海軍本部ですか?」

ミホーク「そうだ、行くぞ」

歩き出したミホークの一歩後ろについて物珍しげにキョロキョロ

しながら海軍本部へ向かう。10分程度だつたが、歩いていると海軍本部の入口にたどり着き、見張り番はミホークを見るやいなや即座に敬礼しだし、扉を開けた。中はと言つと、外見通りの和な造りで、海兵が世話しなく働いているのが目立つ。「何でこんな所にミホークが？」と言つ視線が惜しみ無く注がれるが、華麗にスルーしそそくさと歩き出す。どんどん上の階に上がって行き、ある扉を開くと、奥には海軍本部中将のガープと海軍本部元帥のセンゴクがいた。

突然の来訪者に心底驚くセンゴクにガープ、思いつ切り目を見開いている。

センゴク「ミ、ミホーク！？ 何故ここにあるのだ…？」

ガープ「おお！ 久しぶりじゃ のお、ミホーク！」

ガープは相変わらずだが、センゴクの反応が普通だらつ。

ミホーク「今日は一つだけ願いがあつてな」

センゴク「ほう、お前に願いとは珍しいな……」

ミホーク「この2人に専属の師を付けて訓練をしてやつて欲しい」

センゴクはかなり驚いている。そりやそうだ。王下七武海、しかもよりによつてミホークからこんな事を頼まれる何て天地がひつくり返る事の次辺りに考えられない事だつたのだ。まあ、それを実現させてしまつほど、ティアとアトの成長を楽しんでいるという事が。

センゴクは頭を抱える様に悩んでいる。ミホークはシャンクス同様世界をどうこつしようという奴では無い事は分かつてゐるが、ここまで予想外の事があつたのだ、簡単に決断を下す事が出来る筈がない。

ガープ「ええぞ！ わしが直々に鍛えてやるー。」

一瞬空気が固まった。悪氣は無いが、センゴクが必死になつて考
えているのに、脳天気な一言がそれを踏みにじつたのだから唖然と
してしまうのも頷ける話し。しかし、センゴクも黙つてはいない。

センゴク「ガープ！ お前何を言つてるのか分かつてるのかー！」

ガープ「分かつとる、大丈夫じゃ！ わしに任しとけ！」

こうなつたガープはもう止められない。センゴクもそれを重々承
知している為、もう何も言わない事にしたが、代わりに頭痛がやつ
て来る。

ティアとアトが話について行けず、黙つていると、目の前にガー
プがやってきた。さつきまではまだ大きいと思つていたが、いざ目
の前に立たれると、後ずさりしそうになるほどの体つきに目を丸く

する。

ガーブ「ガーブじゃ！ これからお前達をみっちり鍛えてやる！ 覚悟しとけー！」

そう言って差し出して来た手を握り、それぞれ名前を教える。ガーブは握手が終わると大笑いして2人をがっしりと掴み、こんな事を言つてきた。

ガーブ「ちゅうど良い、わしあ今暇だった所じゃ！ すぐに始めるぞ！」

ティア「……えつー？」

アト「……えつー？」

言うが早いか、2人を引きずつてそそくさと行ってしまった。ガープが出て行つてしまつたのを見て、啞然として突つ立つているだけだった2人だが、センゴクがあることに気付き、怒鳴り散らした。

センゴク「……はっ！？ ガ～～ブ～～！！ 未だ報告書が山程残つとるだろ～～～～～～！」

叫び声も虚しく本人の耳を通り抜け、脳内に留まる事は無かつた。

3話 マコンフォード（後書き）

やつぱり、文章が淡泊で淡々としていて展開速くてイケませんね……
直したいんだけどなあ……どなたか、文章に「こうした方が良いよ
？」や「こんなのは止めた方が良い」なんてのがあつたらコメント
でアドバイスして下さると嬉しいです。

4話 ガープ（前書き）

文章力をつけたい、お金が欲しい、テストを切り抜ける頭が欲しい
(ノ＼・。)

4話 ガープ

海軍本部訓練所

ティア「……痛い」

アト「頭がズキズキするわ……」

ガープ「ぶわっはっはっはっはー！ 2人共まだまだじゃ！」

ミホーク「……」

一体どういう状況かを説明しなくても分かると思うのですが、少し遡つて説明します。

前回のラストでガープに引きずられてやつて来たのは、とにかくだだつ広く、周囲を囲む壁がやけに高い場所で、引きずれている事を忘れてしまう程に何か物々しい雰囲気を放つ所だった。

2人は未だ訓練所の方に気を取られているが、急に自分達を引っ張っていた力が急激に強くなり、2人は立たされた。不意に立たされた為、膝に力が入つておらず、転んでしまいそうになるが、何とか力を入れ、立て直す。そんな2人を見て再び大笑いし軽く謝つているガープだが、背中をバンバン叩きながらなので、ティアとアトはその痛みに顔を引き攣らしていた。

アト「（加減つて言葉を知らないのかしら）」

ガープ「よーし、遠慮はいらん！ 本気で来い！」

正直最初は躊躇つたが、しづが無いと諦めアトを見ると、丁度目が合つた。どちらともなく笑みを見せ、ガープを見据える。引き

ずられて来たので、愛用だつた枝の大鎌は無いが、ミホークとの稽古によつて、武器が手元に無いときの戦闘法も身につけており、問題は無い。

ティア「……行くよ」

アト「ええ」

走り出した。

流石に双子、合わせてはいないが、同時に地面を蹴つた。

仁王立ちで構えたガープに、ティアは正面から顎に向けて掌底を放つが、アツサリと避けられてしまう。だが、見聞色の霸気は伊達では無かつた。当然避ける方向が分かつてゐる為に、アトが先に追撃の準備をしていた。

ガープ「（ほう、見聞色の霸気が、かなり先が見えとるな……）」

アトが膝でガープの顔面を狙う。しかし、ガープも伊達に中将はやつていい、難無くそれを避けてしまうが、それも先に見えている。ティアが更に溝口に拳を突き出しが、手で払いのけられてしまい、バランスを崩すが、すぐに体制を立て直し、更なる追撃に備え始めた。

ガープ「（キリが無いの……面倒臭くなってきたわい）」

この後も同じ様なやり取りを繰り返すが、単純作業に耐え切れる程に忍耐強いガープではない、だんだんとイライラが顔に出始めた。

ティアとアトもガープの表情が明らかに険しく成っていくのが、分かっている。何故かは全く分からぬが、当然の様に良い感じは微塵もしない。しかし、2人が何となくの悪い予感を感じ始めた時、ある物が見えた。

ティア「（まづい！　すぐ避けなきやー。）」

アト「（……実現させたく無いわね）」

2人の頭に見えた物は、ガーブの拳で吹き飛ばされる自身の未来。ただ、ガーブのパンチの速度は非常に速く、回避しようと、後退した2人を軽々とぶつ飛ばしてしまったのだ。

2人は、見えた未来を実現させたく無いので、見えた物とは違う方向に避けた。ティアは真右に、アトは真左へ、正反対の方向へ回避する。これならやられるのは最低1人で済むかも知れないと思つた矢先、2人の首筋を掴む大きな拳が合つた。

ティア「グッ！？　首、呼吸が……」

アト「きやつ！？」

ガープ「捕まえたぞ……そりゃあああ！」

ティア「うわああああ」

アト「キャアアア！」

2人は、首を捕まれたまま、ガープに思いつ切り投げられて壁にたたき付けられてしまった。まるで小石を投げるかの如く簡単に人を投げ飛ばす怪力に驚くが、正直今は痛みでそんな所に神経をやつてる余裕は無い。

そして冒頭のシーン

ティア「……痛い」

アト「頭がズキズキするわ……」

ガープ「ぶわつはつはつはつは！　2人共まだまだじゃ！」

ミホーク「……」

いつからいたのか、ミホークはガープと2人の戦闘を見ていた。順当な結果に納得してはいるが「まあ、良くやつたか方か……」何て意外と悪い評価ではなく、阿保だが、実力は折り紙つきのガープを師として迎える事に成った事は喜ぶべき事だと、内心素直に喜んでいた。

ティアとアトが疼くまつていると、ガープがやって来て、2人を掴んで立たせた。未だ、痛みは抜けていないので、自然とふらつてしまっているが、ガープはお構い無しに話しだす。

ガーブ「2人共まだまだじやが、スジは悪くない！ 確実に強くな
れる！ とりあえず、今日はここまでじやが、明日からみつちり鍛
えてやる！ 覚悟しておけ！」

そう言つて後ろ背に手を振り去つて行くが、ミホークとすれ違つ
時に短い言葉を掛ける。

ガーブ「ええ人材を見つけたな……」

ミホーク「……」

そのまま、訓練所から出て行つた。

ティア「凄く豪快な人だつたね……」

アト「ええ、ただ、全く歯が立たなかつたわね……」

そんな事を話していると、2人のもとへミホークがやつて來た。

ミホーク「これからは海軍の宿舎に寝泊まりする事になる。お前達で1室、おれで1室使うから、後で、場所案内をする。が、その前に、このままおれとの稽古だ」

ティアとアト愛用の枝大鎌を2人に渡し、首からぶら下げた短剣を抜き、2人に向ける。正直今日は勘弁して欲しい気持ちでいつぱいだが、枝大鎌を取り、ミホークえ向かつて行つた。

ティア「今日が今までで一番辛かつたかも……」

アト「私もだわ、体中筋肉痛になっちゃうわね……」

あの後、いつも通りの稽古を終えた後、ミホークに海軍本部内部を案内して貰い、現在は自室のベッドの上で2人並んで寝転びながら、話をしていた。

ティア「久しぶりのベッド、フカフカだ……」

アト「今まで満足に寝る事も出来なかつたからね、凄く気持ち良いわ

そりゃそうだ。島で地べたに寝れば、腰が痛い。狭い船で寝れば、体伸ばす事が出来ない。まともな睡眠環境など、この世界に来てから初めてなのだ、2人がこんな事を話題に出すのも自然の事だった。

しかも、2人の部屋は海兵達の使う部屋では無く、客室を使っている。海軍本部の客室なのだから、かなり豪華で広く、風呂もついており、ベッドもフカフカ、ミホークの力が伺える。

このまま、2人は話を続けるが、そのまま眠りに落ちてしまい、気付けば翌日の朝になつており、思つていた以上の疲れの大きさに驚かされる事になる。

4話 ガープ（後書き）

ガープ少し阿保過ぎるでしょうか、足りない気もあるし、過ぎてる
気もあるし……（ - ” - ; ）

5話 影輝赤（前書き）

今回少し短いかな？

ガープとの稽古を開始して、2週間が経過した。あれから、海軍の人にもある程度顔を覚えてもらい、会話をすることも増えた。下心丸見えの者も少なくは無いが、やはりそれでも嬉しいものだった。2人もやっとガープとの稽古を終えた後に、ミホークとのダブル稽古に馴れてきた所で、最初の頃の様に筋肉痛と怪我でまともに動けないという事も無くなつた。そんなある日の事

ティア「ミホークさんが僕達を呼ぶつて、何なんだろうね？」

アト「ええ、ほとんど無い事よね……」

そう、毎日稽古で合つてゐるし、何かと一緒にいるので、わざわざ呼び出す必要が無いのだが、さつき1人の海兵を通じて、2人にある伝言が届いた。

海兵「先程、ミホーク様から伝言を承り、参りました。本日の夕食後、街の武器屋に来い。との事です」

ティア「えっ？ ……はい、分かりました。ありがとうございます！」

海兵「それでは！」

ビシッと敬礼を決め、部屋から去つて行つた。その後、アトと相談したもののは、思い当たる事は見つからず、とうとう何も分からな
いまま武器屋の前まで来てしまつたのだ。

アト「案外私達の武器を買つてくれるのかもね

ティア「そうだと嬉しいな」

適当に[冗談を一言]と言ふわし、武器屋の扉を開いた。

ミホーク「来たか」

ティア「どうしたんですか？ わざわざこんな所まで呼んで」

ミホーク「ああ、お前達に渡したい物が合つてな。おい、持つてくれ」

店主「あいよ！ ちと待つてな！」

ミホークに頼まれ、景気よく返事した後、店の奥へ走つて行つた。ティアとアトはと黙りつゝ、正直な所、もう予想はついている様で、落ち着いた物である。

店の奥の方からドタドタという足音が聞こえてきたすぐ直後に、2つの大鎌を抱えた店主が出て来た。1つの大鎌は真っ黒で、シリットだけを見ているかと錯覚してしまう程、形を言つなら、刃の部分が広げた蝙蝠の羽の様な形をしており、先端が槍の様になつていて、突き刺しても使える形状になつてている。もう片方は真っ白で、少し光を反射しており、ほんの少しだけ眩しいとさえ思える程、形は刃の部分が薔薇の花びらを縦に少し細長くした様な形をしており、それが左右に1つづつ付いていて、更に、先程と同じ様に先端が槍の様になつていて突き刺しても使える。

ティア「うわあ、凄い……」

アト「凄い……」

ミホーク「……」

彼等が今まで使っていた物（たまたま大鎌の形をした枝）が余りに酷かつたが為に、余計感動しているのかもしれないが、そんな事を差し引いても2人は凄く感動しているのだろう。余り言葉は話さずに、ただ2つの大鎌を見つめていた。

ミホーク「ティア、アト、こっちに来い」

ティア「はい」

アト「ええ」

2人はミホークの前に並び、次の言葉を待つてはいる。ミホークはティアとアトを軽く見据えた後、2つの大鎌を手に取り、黒の大鎌をティアに、白の大鎌をアトにそれぞれに渡した。2人が実際手に取り、感触を確かめてる間に、ミホークが話し始めた。

ミホーク「ティア、お前の大鎌の名は、漆鉱大鎌の『影』。漆鉱石という、光をほぼ反射せず、ただ吸収し続ける鉱石を使用した大鎌だ。特異な性質だけでなく強度もかなりの物だ」

次にアトの白い大鎌を見て、名前を告げる。

ミホーク「アト、お前の大鎌の名は、発光大鎌の『輝赤』きせき 漆鉱石と対を成す様に存在する発光石を使用した大鎌だ。光をほとんど吸収せずに、反射し続ける事が大きな特徴だ。こちらも強度はかなりの物だ。破損を気にしないで使えるだろ?」

ティア「ミホークさん、これ本当に貰つても良いんですか?」

ミホーク「受けとつて貰わねば困る。それとも、ずっと枝を使い続けるのか?」

この言葉を聞き、2人は大人しく大鎌を受け取る事にした。ミホークに感謝の言葉を伝えると、いつも通り「気にするな」と言つてくれた。この言葉を聞き、改めてこの大鎌は自分の物なんだと、実感した時、2人とも同じ事を考えていた。

ティア・アト「（試してみたい……）」

アトがティアに目をやると、ティアもちよづら見ていた。
2人してニヤリと笑うと、ティアがミホークにこんな事を言った。

ティア「ミホークさん、今すぐに、この影を試したいです」

アト「相手して貰えませんか？」

ミホークは予想していたのだろう。言われた時も、反応は全く無かつたが、少しだけ間を開けて、一瞬だけ笑みを見せると、2人に返事をした。

ミホーク「いいだう、今すぐ訓練所へ向かうぞ」

ティア・アト「ありがとうございます！」

（）

目の前には十時の短剣を構えたミホークがいる。こちらも先程貰つた大鎌の「影」「輝赤」を構え、間を詰めていくが、相変わらず隙が見つからない。短剣をこちらに向けているだけなのに、その十数倍もある大鎌を持っているこちらの方が小さく感じてしまう程の威圧感。ただ、睨めっこしてしてもしようがない。2人同時に飛び出し、まずは普通に縦方向へ振り下ろしてみた。

ティア「（……重たい）」

2人の使っている大鎌は特別重たい訳ではないが、今までが今まで

でなだけに普通の重さに対応出来ていないのである。その後も、しばらく大振りを続けるが、ある程度様子を見たミホークはもう確認する必要は無いと判断し、隙について2人の手元から大鎌を短剣ではじいてしまった。

ティアもアトも余りに不甲斐無い結果に、再度大鎌を持ち、ミホークに立ち向かう。ミホークも2人の感じている事が分かるので、あえて一喝する事はせずに、黙つて2人の相手をしていた。

5話 影輝赤（後書き）

大鎌の名前が思い浮かばなくて苦しかった

6話 旅立ち（前書き）

少し急いだ感が滲み出てる気がするな～（ - ” - : - ）

あと、大鎌の表示をサイズに変更しました。どうしても語呂に絞まりを感じなくて……

2人が『影』と『輝赤』をミホークから貰つてから3ヶ月が経過した。あれからも沢山の事があつた。ミホークが現海賊であつて何故ここを自由に動けるのか、という事も知つた。ガーブに連れられ3大将、センゴクと酒も飲み交わした（2人はオレンジジュースだつたが）。今ではすっかり仲良くなつてしまい、暇な時は良く一緒に居る間柄だ。青雉に至つてはクザンと呼び捨てる程である。黄猿と赤犬に関しても、ティアとアトが海軍の人間では無い事と3大将を知らなかつた事が良かつたのだろう。常人ならば、3大将という事を知つている時点で普通に友人として接する事が出来るはずがない、どこか壁を感じる事がほとんどだつたのだ。ここまで普通の付き合いをしたのが久しぶりらしく仕切に2人に会いに来るし、稽古にも付き合つてくれる様になつた。初めて黄猿の悪魔の実の力を目にした時は阿呆みみたいに驚き、普段は冷静沈着な2人もこんなあからさまに驚くんだと面白がられもしたが、こんな力があるのならいつかは自分達も食べたいものだと2人で話したりもした。

影と輝赤の重さにもなれ、普通に扱う事も出来る様にもなつたし、2人に自覚は無いが、見聞色の霸気と、武装色の霸氣にもより一層磨きがかかつた。更に、海を航海する可能性も考え、航海術とグランドラインの気候についても勉強を重ねた。前の世界での成績もかなり良かった2人は、それらを理解し、自分の物にするのにたいした時間は掛からなかつた。そんな時期に2人へある話しが持ち掛け

られた。

センゴク「ティアニアト、海軍に入らないか?」

ティア「えつ?」

そう、センゴク元帥直々に話しが来たのだ。2人とも、強くなつて何をしようという事を考えてはいたが答えを出せないまま、今日に至る。そんな時にこんな話しが来たのだから、このまま海軍になつてしまつても良いなど、思いもしたが、答えはNOだった。センゴクは驚く様子を見せずに、訳を問う。

センゴク「何故だ?」

アト「私達はこの世界の海をまだ何も知らないんです」

ティア「海賊達の怖さも、世界の現状も。自分達の目で少しでも見てから、改めて考え、答えを出します」

これを聞いたセンゴクは少し笑みを見せ、軽く頷いた。

センゴク「そうか。ならば、いつかまた君達に声をかけさせて貰おう」

ティア「はい。その頃にはお望みの答えを出せると想います」

センゴクに海軍入りを誘われ、改めて2人は考えさせられた。いつまでも、人に養われ、迷惑をかけていてもいい筈が無い。ならばどうするか、考えても2人が知っているのは、ティアとアトがいた無人島と、このマリンフォードだけである。無人島は平和とまではいかないが、海賊達の恐怖とはほとんど無縁。マリンフォードに至つては、海軍本部の拠点である、そんな場所を襲う馬鹿等いるはずが無く、平和そのものだ。そんな恐怖を知らない2人が正義を掲げる事は問題こそ無いが、どこか後ろめたい気持ちがある。ならばどうするか、考えられるだけの情報が無いのだ。文字や声ではある程

度の情報が入ってきているが、視覚にいれなければ、信用するに値しない。そんな2人がある答えを出した。

ミホーク「何だ？」

ティア「僕達、2人で旅に出てみようと思つたです」

自分達はまだこの世界をほとんど知らず、海軍に誘われたが、断つた事、自分達の力がどこまで通用するかを知りたい、等の事を説明して、ミホークの返事を待つた。

ミホーク「ふむ、ならば双子岬に行くと良いだろ？」

ティア「双子岬？」

ミホーク「グランドラインで一番始めに留まる事になるだろ？」

双子岬でグランドラインの航路が決まる事、クロッカスという、海賊王の元船医がいる事、ログポースやエターナルポースの事を説明してくれた後に、「お前達はもう十分にグランドラインを渡れる力を持つている」と、かなりに自信を持てる言葉をくれた。更には、船の手配等もしてくれる事になり、稽古の仕上げ等、諸々の事を考慮し、出港は1月後に決定した。

ティア「ミホークさんは本当に~~お世話になつた~~な」

アト「ええ、いくら感謝しても足りないわ……」

後1月しかこの島にいられないと思うと、これから期待も強いが、やはり寂しさの方が強い事を急に実感する。ミホークは言うまでもなく、1番に迷惑を掛け、1番に感謝している人物。ガープも我が儘だが、海軍に入つてわしの下で働くとよく誘つてくれていた。3大将は、知り合つてからは1番一緒に時間を過ごしだらう人達で、気兼ねも無しに話す事が出来た限られた人達で。振り返ると、本当に自分達は愛されていたのだと思う。

～～～

あれから、代わり映えした生活を送る事は無かつたが、やはり1日1日を大事に過ごした。今までとは、全ての景色や人や在り来りな出来事が少し違う顔を見せるがやっぱりいつも通りだ何て考えて過ごすうちに、とうとう出港前日になってしまった。

現在は街の酒場にいるが、田の前には酒を飲んで暴れるガーブや、相変わらず酔うと2人に絡む癖が出来てしまった黄猿と青雉、…にそれを止める赤犬、黙つて酒を飲むミホークや、海兵の一団（全員は入らないので、ある程度仲良くなつた者限定）。明日出港という事で、皆が集まつて宴を開いてくれたのだ。

やはり、嬉しかった。自分達の為にこんなに人が集まつてくれるんだと感動さえしていた。

ガーブが箸を鼻と口にツツ ハミ、ドジョウ踊りをしたり、集まつ

た者皆で歌つたり、青雉と黄猿に絡まれたり、激励の言葉を貰つたりと、楽しく賑やかな時間を過ごしたが、そんな時間はあつという間に過ぎ去つてしまい、皆が酔い潰れ、眠つてしまい、気付けば起きているのは2人だけになつていた。

ティア「今日は楽しかつたね……」

アト「ええ、最後に皆がこんな事を企画してくれて嬉しかつたわ……」

ティア「半端は出来なくなつちやつたや……」

アト「あら、半端する予定だつたの？」

アトが意地悪な顔で聞いてくる。ティアは少し微笑み、「そんな訳無いよ」と答える。その後は特に話す事はせずに、黙つて周りの皆の顔を見たり、無意味にアトと視線を交えたりと何気ない事をしている内に2人も寝てしまつていて、気付けば鳥が轟る爽やかな朝

だつた。

／＼＼

ティア「……おはよい」

アト「おはよーい……」

周りの皆はまだ寝ている。2人は体を伸ばし、体に血を巡らせる
と、外に出て、眩しい日差しを浴びに行つた。まだ、眩しい物に目
が馴れておらず、手で光を遮るが、それでも十分な程に強い光が顔
を温める。何となくそのまま太陽を見ていると、中からガープが出
て来て2人に話し掛けてきた。

ガープ「出港日和の朝じや。ティア、アト、わし等はお前達を待つ
ておる。ゆつくつとじつくつとこの世界を見てこい、そしていつか

は一緒に戦つぞ！」

ガーブが両手を2人に出して来る。ガーブは、2人がその手を取り、力強く、はいと答えたのを確認すると、酒場でまだ寝ている海兵等得意の大聲とげんこつで叩きお越しに酒場へ戻つて行つた。2人もそれを見て軽く笑うと、残つた出港の準備をしに、部屋へ戻つて行つた。

（）

ミホーク「これが、ログポース、こちらがマリンフォードと双子岬のエターナルポースだ、戻つて来たければ、いつでもこれで戻れるだろう、そして、コイツが電伝虫と、お前達が親しくなつた者達と連絡をとる為のメモだ」

現在は出港直前の船の上でミホークに最後の贈り物を貰つている所。他にも酒場で共に騒いだ面々が大集合しているが、内心では「この人達仕事大丈夫か」とも思った事は秘密だ。

その後も、改めて3大将、ガーブ、ミホークと軽く言葉を交わした後、帆を張り、出港の準備を完了させた。

ティア「それじゃ、行つてくるよ！ また、いつか！」

集団からは、「頑張れよ」だの「元気でな！」だと聞こえて来るが、いつまでも聞いている訳にもいかず、碇を上げ船を進めた。

アト「必ず帰つて来るわ！ それまでね！ 貴方達も元氣で！」

2人が大きく手を振り、皆に答える。

ミホーク「…………」

ガーブ「氣をつかるんじやぞー? 必ず帰つて来るんじやぞー?」

赤犬「たまには連絡を寄越すんじやぞ?」

青雉「まあ、適当にやんな。帰つて来たらまた飲もうや」

一同の最後の言葉を聞き、少し出港をしたく無くなる気持しが出て来るが、それを振り切り、本当に最後の言葉を投げかける。

ティア「嘘~! 今までありがとう~! また、会おう~!」

アト「…………」

アトはと言つと、何も言えなかつた。やはり、感慨深かつたのだろう、ティアがアトの方を見ると、涙ぐんで声を出せる状態では無かつたらしい、右薬指で涙を拭い、

俯いているのが見えた。あえて何も触れる事はせずに、船の帆に描かれた双子の人間と2つサイズのシルエットを見て、声を上げた。

ティア「出港へ！ ジーニオス・ジムニードルー」

6話 旅立ち（後書き）

ジーニオス・ジョンソン

適当に考えました。

名前の意味を調べれば、「この作者アホだ」と思っていただけるでしょう（笑）

7話 ジョシト（前書き）

初戦闘！

私の文章力があらわにされた回で、『アレル』『アレル』すー。

赤犬「行つたの……」

黄猿「また、しばらくは暇つぶしに困るね～」

青雉「ん～、ま、あいつらなら大丈夫でしょ、気長に待ちましき
や」

ティアとアトの船が見えなくなるまでは言わないが、かなりの
時間見届けていた

一方ミホークはと言つと、2人が出港した後すぐに棺桶船でマリ
ンフォードを出た。ミホークがマリンフォードに留まっていた訳は
ティアとアトの訓練だったのだから、いなくなる時点でマリンフォ
ードに留まる理由がないのだ。とにかく今は、不本意に出来てしま

つた大きな暇をどう潰すかに脳みそはフル稼働中で、行き先は決めず流されるままに海を渡つてみる事にしたので、舵などは全く取らずに海を見つめていた。

（～）

ティア「ねえ、あれ何に見える？」

アト「海賊船」

ティア「やつと、出会えたね」

アト「ええ」

現在、2人はマリントンフォードから、双子岬を目指して航海中であ

る。2人はとりあえず、培つた自慢の戦闘スキルを賞金稼ぎで活かして、生計を立てる事は、出港した時点で決めていたが、何も情報の無い様な海賊船を襲う短絡脳では無い。目の前に見える海賊船の帆を確認し、手元の資料と参照させた。この資料とは、海軍から特別に送られる物と、一般に配達される新聞や雑誌の事である。

アト「海軍にコネがあると、これだから便利ね」

ティア「やっぱ、一般誌よりは細かく書いてるね」

アト「『ジョット海賊団』船長のジョットを中心に構成された芸術家肌の多い海賊団。ジョットは元カリスマ画家と呼ばれていて、彼の魅力に惹かれた者が集まり、海賊団として活動している」

ティア「懸賞金がついているのは『彩色ジョット』の2800万ベリード、『碎骨ボンドーネ』の1700万ベリーの2人だね」

アト「パツと見た感じ、大きくないから人数も知れた物ね」

ティア「行つちゃうか」

アト「ええ」

2人はジョット海賊団の船に向かつて帆を進めた。向こうに気付かれないと進む事は正直不可能なので、真っ正面から向かつて行くが、全くの無策ではなく、大樽いっぱいに海水を入れていく。

ティア「さ、入ったね」

アト「ええ、後は戦うだけね」

今回があえてごり押しで行く。実は、2人にとっての初めての海賊との戦闘なので、下手な策など取らずに実力のみで戦うと決めた。

～～～

下端「ジヨット船長ー 前方から何やら怪しい船が来ていますー。」

ジヨット「……分かった。今行くから少し待て、この絵を完成させてから……」

「これはジヨット海賊団の船長室兼アトリエである。現在ジヨットは田の前に積まつた宝を描いており、進行は3割と言つた所で、とても完成させられるとは思えないので、下端も反論せざるを得ない。」

下端「し、しかし、絵を描いてる時間等ありませんー もう、田の前まで近付いて来ておりますー。」

ジョット「分かった分かった……分かったからデカイ声を出すな。
つたく、落ち着いて絵も描けないのか……。おい、ボンドーネも起
こして連れて来い」

下つ端「分かりました」

（～）

鉄砲や大砲を撃つ音が聞こえて来る。面倒臭い等と口にしながら、
甲板に出でみると、船員が勇ましく叫んでいた。

船員1「撃て～！」

船員2「玉持つて～～～！」

船員3「何してやがる、早く沈めひまえー。」

「元気な船員の肩を掴んで一言質問をした。

ジヨウト「おー、問題の船つて言ひのせあの船か?」

船員4「はー」

田の前には少し小ぶりの船が海賊でも海軍でも無い帆を掲げ、悠悠と近付いて来ているのが見えた。

ジヨウト「ん~、見たこと無い帆だな、賞金稼ぎか? ま、海賊に近付いて来る船にろくなもんは無いか……戦うしか無い。にしても、コイツ等の射撃センスはどうなってんだ、一発も掠りすらし

てないじゃないか……」

ジョットが一人黙つて考えていると、後方から筋肉質で体のデカイ男が話し掛けてきた。

「どうなつてんだ、ジョシテ?」

ジヨット「ん？」起きたかボンドーネ、あれだ」「

ジョットがジーニオス・ジエミーリ号を指差して見せる。

ボンドーネ「戦闘か？」

ジョシト「おお

戦闘と聞いたボンドーネは「ヤリと笑い、ジーニオス・ジHIII
号を見据えた。

（）

ティア「どうしたら、あんな所に弾が飛ぶんだろう……」

アト「射撃センスは壊滅的ね……あの船」

大樽に海水を汲み終わり、ジョット海賊団ともほぼ隣接させた所
で、相変わらずな射撃について2人で呑気に話していた。

ପାଦମୁଖ କରିବାକୁ ଆମେ ଆମେ ଆମେ ...

ジーニオス・ジエミー号に海賊下つ端達がなだれ込んできた。人は冷静に影と輝赤を構え、群れに突っ込んだ。

ティア「やつぱり、訓練とは違うな～」

アト「皆本当に殺す氣で来てるものね」

初めての実戦でどこかシミジミと感想を漏らすティアにアトだが、周りには斬られて動けなくなつて苦しんでいる海賊達が倒れている。ざつと見て45～55人程度

アト「……来なくなつたわね」

ティア「僕達から乗り込んで見るか

アト「そうね

（～）

船員5「船長！ 全く歯が立ちませんー！」

ボンドーネ「ふん、情けない……」

ジョシット「全くだ、だが、わざわざ無駄に船員を浪費したくはない
……止まれ～～！！ 僕達が行く～～！」

船員は黙つて言つことを聞き、甲板に戻つた。

ボンドーネ「わあ、早く来い！」

ジョット「つたぐ、戦闘のどじが楽しこんだか……」

船で2人が来るのを待つジョットとボンドーネは、周りを囲む様に集まつた船員達。かなり強い事は容易に想像出来る為、ジョットにボンドーネも集中している。

～～～

ティア「うわ～、凄いね」

アト「ええ……。あいつ等ね、ジョットとボンドーネって

中央に立っている2人の男を見つけ、いよいよ賞金稼ぎらしくなつてきた何て考えていた。

ティア「本当だ。それじゃ、僕がジョットとやらねー」

アト「分かったわ」

「こんな状態でも香氣な2人に呆れている者もいる。

ジョット「ん~、どんな巨漢かと思つたら餓鬼2人じゃないか……
ま、見た目に反する事なんてこの海じゃ日常茶飯事だな」

ボンバー「ジョット、俺はもう行くぜー」

ジョット「ああ」

ジョットが言い終わる前に飛び出したボンドーネが、どこから持ち出したのか、大きな木槌を2人に振り下ろす。だが、2人とも軽く避けて、ティアは最後に『またね』と言ってジョットのもとへ歩いて言った。それを逃がさないと木槌を振り回そうとしたが、木槌を踏んで阻止された。その方向を見ると、木槌に足をかけたアトが立っていた。

ボンドーネ「ちつ、弱そうな方が来たな……」

やはり女ではなく男とやり合いたかったらしいボンドーネは少し残念そうな顔をする。

アト「あら、差別は良くないわよ?」

言つて『クス』っと笑つたアトに、ボンドーネが腹を立て、木槌を無理矢理肩に構え、アトに向け、横に払つた。が……

ボンドーネ「なつ！？」

ざわざわ

周りがざわつく。無理も無い、ボンドーネの体の2分の1あるかと疑う程に細身の女の子が木槌を片手で軽く止めていたのだ。そりや、ガープに鍛えられたのだ、女の子と言えど、馬鹿見たいな力はついてしまつた。

アト「こんな物かしり？」「

ボンドーネ「くわー、つおおおおおおーーー！」

逆上したボンドーネが木槌を更に払おうとしたが、それが叶う事は無かつた。

ズシン

アト「うふふ、ただの棒になっちゃったわね」

輝赤でボンドーネの木槌を切つてしまつたのだ。ボンドーネは変わり果てた木槌を見て「勝てない」と頭を一瞬よぎるが、それを振り切り、棒を投げ捨てるど、叫んでアトに向け巨大な拳で殴り掛けた。

「諦めなさい」ボンドーネが最後に見た物はこう言つて微笑んだ
アトだつた。

じれり

ボンドーネが倒れた。アトが拳を軽く避け、ボンドーネの後方に回ると、手刀で首を叩き、気絶させたのだ。周りの船員は唖然として固まっている。かなり強いと思っていたボンドーネが軽くあやされ倒されたのだ、衝撃は半端な物では無いだろう。

アト「や、繩持つこなき」

「うづつアトは船へ戻つて行つた。

~~~~~

ジヨット「（ボンドーネが餓鬼にあんなにも簡単にやられるのか！？　まづい、俺に向かって来るつて事はあの女よりもこの男の方が強い可能性が高い……）」

ティア「アト～！　こっちの分もお願い！」

アト「分かつたわ～！」

すでに自分達の船へ移動していたアトだったが、すぐ隣だった為に簡単に声は届いており、返事はすぐに聞こえて来た。

田の前で自分を縛る縄の話しされ、逆上しそうになりながらも、冷静を保っているジヨットだが、それを実現させているのは、アトとボンドーネの戦闘を見て、自分に本当の危機が迫っている事を察したからだ。

ジョット「（まよい、俺はこの餓鬼共に勝てるのか？　いや、勝たなきや終わりだ……）」

腹を決めた様で、先程の迷いきつた目ではなく、キッチリ据わった目でティアを睨む。ジョットは着ているローブの中から武器であるキャンバスと筆を取り出し、構えた。

ジョットは何も言わず、ティアに向け、キャンバスに沢山蓄えられた色の内の紫色を筆につけ、飛ばしてきた。ティアは何でも無いと、簡単に避けてジョットに突っ込んだが、後ろから凄い音が聞こえてきた。

ジユワアア

ティア「…………！？　毒か！？」

ジョット「そう。俺が『彩色ジョット』何て呼ばれている由縁は、このキャンバスに蓄えた色とりどりの猛毒を使い、相手を毒殺した頃には、鮮やかに彩られている事からだ」

ティア「へへ、危ないかつた……」

ジョット「簡単に避けたやつが嘘をつくな

ティア「ばれた?」

「のふぞけたティアにジョットは更に、鮮やかな毒を次々と投げ込むが、ことごとく避け続けられる。

ジョット「（ダメだ、当たらない……なら…）」

ジョットは筆をただ振り回し、猛毒の水滴をティアに飛び散らした。周りの船員数名にもこの猛毒が当たり、苦しんでいるが、ジョットは海賊団自体の危機に数名の犠牲も止む無しと諦めて、筆を振り回し続ける。

これを見たティアは、簡単に避ける事は出来るが、目的は2人のみ、余計な犠牲は出すことは無いという考え方であるから、すぐにジョットの後ろに回り込み、手刀で氣絶させた。

「これまでか。せめて、絵を完成させたかった……」

（――）

カツ カツ

アトが縄を持つて海賊船に戻つて来た足音だ。アトが来る少し前

にジョットは氣絶しており、ティアはその傍らで座つてアトを待っていた。

アト「……お疲れ様」

ティア「ありがとつ

アトがティアに繩を渡して言った。ティアは即座にジョットをきつく縛り、ボンドーネと一緒に自分達の船へ運び込む時、残りの海賊達に言つた。

ティア「それじゃ、バイバイ」

残された者達は、何が起つたのか分からぬ様な顔でたた立ち尽くしていた。だが、1つだけ確信した事がある。ジョット海賊団はもう壊滅したのだという事だ

～～～

その後は、ジョットの手首についていたログポースの指し示す方へ帆を進め、3日かけて到着した島の街で2人を差し出し、賞金を手にした。いざ、目の前に詰まれると、4500万は凄い量なんだと思う。重いのだ、こんなに重いお金を持つのは2人とも初めてだつたし、持つこともあると思わなかつた。

ティア「指名手配で簡単に2800万ベリーとか書いてるけど、凄い量だね……」

アト「ええ、これでしばらくはお金を気にしないで航海出来るわ。この街で少し買物したらすぐこまた双子岬を田舎しましょ」

ティア「そうだね」

2人はこの街で、使い道に困るほどの大金で服や食糧を買い、夜中にはホテルで一泊し、翌日の昼には双子岬を目指し出港していた

## 7話 ジョット(後書き)

どうしても納得出来る文章が書けない（ - ” - ; ）

なんか変（ - ” - ; ）

（ - ” - ; ）  
（ - ” - ; ）  
（ - ” - ; ）  
（ - ” - ; ）

8話 双子署（前書き）

今回は普段と書き方を少しだけ変えました。  
気付かない程度かもしれませんがね

アト「何かしらあれ……」

ティア「……鯨？」

アト「頭に海賊のマークが描いてあるけど、凄く下手ね……」

ティア「麦藁帽子を被つてゐるのかな……？」

田の前には超がつく程巨大な鯨が海面から頭を出していた。

アト「30……35mくらいかしら?」

ティア「あんな大きい鯨いるんだね……」

アト「食用にしたらどのくらいの期間持つのかしら?……」

ティア「年単位かかるね……あれは」

軽くブラックなヨーモアが出たが、気を取り直して説明をば!  
たった今双子岬に到着した2人の目の前にはレッドラインの高い壁  
があつたのだが、いきなり黒い物が海から立ち上るし、それには海  
賊のマークが入ってるしで頭のなかは「?????????????????」  
こんな状態である。

ティア「とりあえず、ここにはクロッカスさんって人がいるはず何  
だけど……あの家かな?」

アト「行つてみましょ」

コンコン

ティア「すいませ～ん！ クロツカスさ～ん！ 居ますか～！」

アト「いない見たいね……」

■ ■ ■ ■ ■

ティア「しょうがないね、とつあえずログがたまぬまではいいだな  
っくらしてこいつよ」

アト「そうね」

（）

ティア「たまつちやつた……どうする？」

アト「クロッカスさんって人にあつてみたかったけど、仕方ないわ  
ね……行きましょうか」

ティア「まず、生きてるのかな……？」

アト「今頃はあの鯨の中とかね」

又しても飛び出た軽いブラックなユーモアだが、あながち間違つ  
ちゃいない所が恐ろしい物だ。

ティア「う～ん、しょうがないね、出発しようつか……」

アト「ええ、久しぶりに陸でゆつぐり出来たからよしとするわ……」

ティア「…………ん！？」

2人が船へ戻ろうと後ろに振り向くと、頭に何やら花びらの様な物を数枚つけた老人が立っていた。

ティア「…………」

アト「…………」

「.....」

パサツ

何と、目が合い数秒間見続けていたのに、近くにあつた椅子に腰掛け新聞を開いてしまつたのだ。

ティア「（.....何だつたんだ?）」

アト「.....あの、灯台守のクロツカスさんって方を知りませんか?」

「.....人に質問する時はまず自分から名乗るのが礼儀つてもんじやないのか?」

アト「え、ええ……やつな。『めぐら』」

「私の名はクロッカス、双子岬の灯台守をやつている、歳は二一才、  
双子座のA型だ」

ティア「……」

アト「（眞ひでる事とやつてこる事がめづやけやね……）」

クロッカス「それで、私に何の様だ？」

アト「いえ、大した用は無くて、ただ海賊王の船医だつたといつ貴  
方につて見たかつただけなんです」

クロッカス「！？ その話しきど！」

ティア「僕達の戦いの師はガーブさんとミホークさんです。僕達が船出したいとミホークさんに言った時に、出発点は双子岬が良いと、そしてそこにはクロッカスさんが居るって教えてくれたんです」

クロッカス「……ふむ。 そうか、ガーブが師匠か、ふんつ、懐かしいものだ。 とにかくせ、お前達もグランドラインを航海するのか？」

アト「ええ。 ただ、もうかなり航海してますけどね、マリンフォードからここまでやって来ましたんです」

クロッカス「マリンフォードからだと…？ たった2人でか！？」

ティア「そうです。 やっぱりきつかつたけど、何とか到着出来ました」

クロッカス「（めぢやくぢやだ…）普通はきついで済まされるはずがない、2人での海を渡るなんて。 途中で特殊な気候にやられるか海賊にやられるかのどちらかだ…。 ミホークとガーブの弟子か、

随分な才能だ)」

アト「セリュエボ、あの鯨はいつでも元気に遊ぶんですか?」

まだ少し驚きが抜けていなかつたが、アトの質問で我に帰り、返答する

クロッカス「ああ、あのクジラは『アイランドクジラ』ウエストブルーにのみ生息する世界一デカイ種のクジラだ、名前はラブーン」

ティア「へえ、ラブーンって書つんだ。あの、頭に描いてある麦藁帽子を被つた海賊のマークは一体何なんですか?」

クロッカス「ああ、少し前にやつて来た海賊達が描いていったのだ。ラブーンの命の恩人達だ」

アト「ラブーンに何があつたんですか?」

クロッカス「先程、ラブーンはウエストブルーにのみ生息する種だと言つたな」

ティア「はい」

クロッカス「ある日、私がいつもの様に灯台守をしていると、氣のいい海賊どもがリヴァース・マウンテンを下ってきた。そしつ、その船を追う様に小さなクジラが一頭、それがラブーンだ」

クロッカス「ウエストブルーではラブーンと共に旅をしていたらしが、今回の航海は危険極まる」とウエストブルーに置いてきたはずだった

クロッカス「本来アイランドクジラは仲間と群れをなして泳ぐ動物だが、ラブーンにとつての仲間はその仲間達だったのだ。船は故障して岬に数ヶ月停泊していたから、私も彼らとは随分仲良くなつていた」

クロッカス「そして、出発の日、私は船長にこいつ頼まれた『こいつをここで2・3年預かってくれないか。必ず世界を一周しこへ戻る』と。ラブーンもそれを理解し、私達は待つた。この場所ですつとな」

アト「でも、あの大きさだと……」

クロッカス「そう、彼らは逃げ出したのだ、このグランドラインから……もう50年も前の話になる」

ティア「可愛そつな話だわ……」

アト「ラブーンは知ってるんですか?」

クロッカス「言つたさ、包み隠さず全部な……だが聞かん。それ以来ラブーンはリヴァース・マウンテンに向かつて吠えはじめ、レッドラインに自分の体をぶつけ始めたのだ。まるで、今にも彼らはあの壁の向こうから帰つて来るんだと主張するかの様に……その後も

何度も海賊達のことを伝えようとしたが、ラブーンは事実を決して受け入れようとしない

アト「あの頭の傷はその……」

クロッカス「そう、あんな大きな傷を作り続ければ間違い無くラブーンは死ぬ所だった」

ティア「そして、ラブーンの恩人がやつて來たんですね」

クロッカス「そう。ラブーンは彼らに裏切られ、待つ意味を無くした。ラブーンにとって最も恐い事は待つ意味を無くす事、私の言葉を拒み続ける理由だ。先日やつて來た恩人……海賊達の船長は何とも不思議な空気をもつ男だった。いきなりラブーンの頭に自分達の海賊船のメインマストを突き刺したのだ」

アト「えっ！？」

ティア「それじゃ、悪化させただけじゃ！？」

クロッカス「その後だ、頭にメインマストを刺されて怒ったラブーンが彼を押し潰してしまったのだが、彼は反撃し、ラブーンといきなりケンカを始めてしまったが、途中で彼が言つた言葉がラブーンを救つたのだ」

アト「一体何と？」

クロッカス「引き分けだ！！俺は強いだろうが！！おれとお前の勝負はまだついてないから、おれ達はまた戦わなきゃならないんだ！！お前の仲間は死んだけど、おれはお前のライバルだ。おれ達がグランドラインを一周したら、またお前に会いに来るから、そしたらまたケンカしよう!!」

アト「素敵な話ね……」

クロッカス「その後、ラブーンの頭に彼らの海賊旗のマークを描き『戦いの約束』と名付け、頭をぶつけてマークを消さない様にと約束してくれた。彼らがラブーンに再び待つ意味を与えてくれたの

だ

ティア「あの海賊旗が……」

クロッカス「その後はピタリとリヴァース・マウンテンに向かつて叫ぶ事も、レッドラインに頭をぶつける事も止めた。しかし、癖になってしまったんだね、ああやつて頭を出して直立する事は今も続いている」

アト「その海賊達の名前は一体何で言つんですか？」

クロッカス「麦藁一味、船長の名はルフイと言つた」

ティア「麦藁の一味、知ってるよ。初頭金額が異例の3000万ベリーで話題の海賊だ」

アト「ふふ、世間のお騒がせ者は悪いのばかりでも無いのね」

クロツカス「彼らは、ただ純粹に海賊王を目指すだけ、一般人に害は与えはしないだろ?」

アト「ふふ、面白いわね」

（）

その後、ティアとアトはラブーンとしばらく接した後に、クロツカスの家に泊まり、ここからグランドラインを進むにあたって7つの航路を選ぶことが出来る事、麦藁の一昧がどの航路を選んだか、最終的にたどり着く島がラフテルである事等の説明を聞き、一夜を過ごした。

（）

クロッカス「もひ、出るのか？」

アト「ええ、久しぶりに人とお話を出来て楽しかったわ、ありがとうございますね、クロッカスさん」

ティア「いろいろ説明してくれてありがとうございました」

クロッカス「いや、私も楽しかった。それより、ログポースの進路はどこにしたのだ？」

アト「最初はウイスキーピークを指してたけど、フリッシュ島に決めたわ」

クロッカス「麦藁の一味とは違つ航路を行くのか」

ティア「はい、彼らの冒険は新聞で楽しみにしておきます」

クロツカス「そうか、なら行ってこい」

アト「ええ、またいつか会いましょう」

ティア「それでは」

クロツカスに手を振り、フリッシュ島田指して双子岬を出発した  
2人の背中にラブーンの声が最後に聞こえた。

アト「ふふ、かわいいクジラだったわね」

ティア「また、クロツカスさんとラブーンに会いに来たいね」

8話 双子岬（後書き）

変化に気付く方はいらっしゃるでしょうか…  
（ - ” - . ）

フリッシュ島は僕のオリジナルな島です

## 9話 ハコシシロ島（前編）

記念！

PV1万HITです！！

ニーク2000HITです！！

いや～、まさかこんなに早く1万行けると思いませんでした！

何か企画やってみたいとも思つんですが、残念ながらそれほどの知名度が無いのが現状（-\_-）

いつか人気になれたらします！

皆さん、本当にこんな拙い文章を読んでくれてありがとうございます！

後、今回から一気にオリジナル要素が強くなります、嫌いな人は嫌いかも……（-\_-）

ティア「ここがフリッシュ島か」

アト「大きい木ね~」

2人が双子岬を出発して5日経過したお昼頃の事、たつた今フリッシュ島と思われる島に着陸した所で、辺りをキヨロキヨロと見渡している。

島の1／3くらいの面積を日陰にしてしまつ程に枝が広がった木が立つてゐる。その木で出来た日陰の部分と日向のちょうど境に石の塀が建てられており、内側に王宮が、外側に一般人の生活区とで分けられている。生活区の町並みは、石造りの建物が並び、噴水が至る所に設置していて、常に水を噴出している。

ティア「凄く綺麗な町並みは良いんだけど、暑いな……」

アト「ええ、少し体調が変だわ……暑くて倒れそう」

ティア「見て、アト……」

アト「うわ……」

ティアが視線の先にある広場に建っていた大きな体温計に指を指し、アトへ見るよう促す。

アト「61・2度!？」

ティア「あちこちの噴水が常に水を出してる理由が分かった気がするよ……」

「アト」「何で皆普通にしていらっしゃるのかしら……」

「随分参つどる見たいやな?」

「お前達今來たばかりだな?」

すると、2人の同じ年ぐらいの男達がティアとアトに話し掛けて  
來た。

アト「貴方達は?」

「俺はフルチだ!」

「俺はワインフリー！ 島長の息子だ！」

ティア「僕はティア、こつちはアト、双子なんだ。よろしくね」

アトも挨拶がわりに軽く微笑みかける。

プルチ「ほ……随分ヒルックスのええ双子もおつたもんや」

ワインフリー「本当だな……羨ましい！」

ティア「まあね」

プルチ・ワインフリー「アッサリ認めた！？」

アト「だつて、認めなきや皆に失礼でしょ？ 周りの人より少しほ  
容姿が良いなんて自覚してるわ、こういう時の謙遜は嫌われるもの  
よ？」

プルチ「…………その通りですね」

ウインフリー「いもつともです…………」

アト「ふふ、貴方達かわいいわね」

プルチ「か、かわ…………」

ウインフリー「い……？」

ティア「2人と居るとたのしさうだね」

アト「そうね、そついえば2人は何で声を掛けてくれたの?」

プルチ「せやつた!」

ウインフリー「いやな、この島は馴れない奴がフラフラしてるとすぐ熱中症で倒れちまつんだ。それに、金はあるか?」

ティア「あるよ、正直余ってるぐらー」「……」

プルチ「なら話は早いわ、服を変え!」

アト「服?」

ウインフリー「ああ、この島は夏島で、しかも今は夏だ。普通の服なんか着てらんないぜ?まあ、冬でも40度行くけど……」

ティア「何が違うの?」

プルチ「冷水草って知つとるか?」

アト「いえ、聞いたこと無いわ」

プルチ「冷水草ってのは、この島の特産物なんやけども、あのでかい木あるだろ?」

ティア「うん」

プルチ「モンキーポッドって言つんだが、あの木を囲む様に湖が広がつていて、そこにしか冷水草は生えないんだ。その冷水草の成分は何をしても10度以上に上がらないって変わった性質を持つって、その冷水草を混ぜた水もまたその性質を持つんや」

アト「へえ、面白い草ね……」

ウインフリー「それで、これ見て？」

ウインフリーがジッパーをおろし、服の内側を見せて来た。

ティア「服の中を水が通つてゐる」

ウインフリー「さう、服の内側に冷水草を混ぜた水を通わせて、俺達は何とか暑さに耐えてるってわけだ」

アト「なるほど、それで着てるものが暑苦しくても関係無いのね？」

プルチ「せや、むしろ変に肌なんてだしたら日焼けするわ、病氣になるわで大変なんや」

ティア「それで、あの木陰を全て王宮がしめたるの？」

プルチ「……ああ」

ワインフリー「……」

アト「…………めんなさい、何かマズイ事言つちやつたかしら…………」

プルチ「い、いや！ 気にせんぐれ、あなたは悪く無い！ いつ  
ちの話ぢ……」

ワインフリー「つてか悪い！ 曙によな、服屋紹介するからついて  
来いよ！」

アト「え、ええ」

ティア「よろしくね……」

（）

ブルチ「ここや！」

アト「へえ、中々大きいわね」

ウインフリー「この辺では一番大きいからな、大概の物は揃つてゐる  
ぜ！」

ティア「それじあ、行こうかアト」

アト「ええ」

プルチ「…………」

ワインフリー「…………」

プルチ「あいつらホンマに双子か？ 手え繫いで行きやがった」

ワインフリー「何か、限りなく夫婦に近い恋人つて感じだね…………羨  
ましい！」

プルチ「うわ、服の選びっこ何かやつとる…………段々腹たつてきたわ」

ワインフリー「嫉妬は醜いぞプルチ…………」

プルチ「やかましー！」

ワインフリー「…………？ 2人共選び終わった見たいだね。手を振つ

てる

プルチ「行くか」

（））

アト「私これにしたわ」

ウインフリー「うん、凄く似合つてるよ」

ティア「僕はどう?」

プルチ「お前の服のセンスって可愛いな……女の子か?」

ティア「違つよー。ただ、たまに言われる……」

ウイーンフロー「うそ、着てる服はメンズなのに何で可愛くなるんだろ、どかに可愛い要素があるんだろうな……」

ブルチ「まあ、ええか。会計行こつか」

〜〜〜

店員「えー、36000ベリーが御一つ、24000ベリーが御一つ、15000ベリーが御一つ、29000ベリーが御一つ、26000ベリーが御一つ、18000ベリーが御一つで合計296000ベリーでござります」

アト「何で……」

プルチ「何でや……」

アト「何で296000ベリーもあるの？　合計は148000ベリーのはずよ？」

プルチ「（何でその額を躊躇い無く会計に持つていけたんや……）

店員「えへ、もしかしてこの島にいらしたばかりでしょうか？」

アト「ええ、さつ毛着いたばかりよ」

店員「なるほど、そうでしたか……実は、この島の税率なんですが、100%なのです」

プルチ「…………」

アト「え…？ そんなに…？」

店員「はい、ですので全て表示価格の2倍になってしまします」

アト「やつだつたの……あ、恥こわ。はー」

ウインフリー「えええええ～！…！… 何でポンって出せるんだよ  
！？」

ティア「皿つたでしょ？ 余るへりあるわ」

ウインフリー「余りすぎだら、何で子供がそんな額持つてるんだよ

「……」

ティア「僕達ね、賞金稼ぎやつてることだ

プルチ「（賞金稼ぎ……）」

アト「ただいま、わあ、出ましょ？」

プルチ「……せやな」

~~~~~

ティア「暑く無い……」

アト「この服気持ちいいわ……」

ウインフロー「だろー！」

アト「にしても、税率が100%つて高すぎないかしら?」

ティア「そうだね、初めて聞いたよ100%なんて……」

ウインフリー「あ…………旨腹減らないか!」

アト「そうね、気付けばもう昼なのね……どこか紹介してくれるのかしら?」

ウインフリー「ああ!　つまい店紹介してや

男「海賊だ〜〜!!　港に海賊が出た〜〜!!」

プルチ「またか!??」

アト「また?」

ウインフリー「ここはグランドラインに入つて最初にたどり着く事になる島の一つだから海賊が来るのは日常茶飯事なのさ……」

ティア「僕達も行こう。」

アト「ええ！」

（）

バーン

ティア「銃声！？ 海賊はどうだー！？」

ティア「どうだー！」

ウインフリー「あつちだ！」

アト「あれは……『白眼はくがん』のジユーム』」

プルチ「白眼のジユーム？ 強いんか？」

ティア「懸賞金5800万ベリー、残虐で有名な海賊だよ、殺しに躊躇う事は無い！ 急がなきやー 女の子が狙われてる！」

ウインフリー「え！？ おい！ 行っちゃった、大丈夫なのか！？」

プルチ「5800万ベリー……」

（）

ジユーム「何だお前等は……邪魔すんなら殺すぞ？　」いつがおれの事じろじろ見てきて腹立つから消す所だ、どけ！」

女の子「…………」

目尻に涙を溜めて恐怖で動けない女の子の前に2人が踊り出たのだ

アト「どこで見たら？　か弱い女の子一人退けるくらい簡単でしょ？」

ジユーム「何！？　お前おれが誰だか分かつて言つてるんだろうな！」

ティア「分かつてるよ？　白田しあわのジユームでしょ？」

ザワザワ

後ろの海賊達も何やら騒いでいる。

ウインフリー「おいおい！ 大丈夫なんだろうな！？」

ジユーム「てめえ…… もう許さねえ！ 死ね！」

ティアとアトの挑発にまんまと引っ掛かりジユームが持っていたサーベルでティアに斬り掛かって来た。

キーン

ティア「……鉄塊」

ジユーム「な、何!? サーベルが折れた!? お前、悪魔の実の能力者か!?」

ティア「違うよ?」

ブルチ「な、何やあれ……!?!?」

ジユーム「じゃあ、ビリしたってんだー!」

ティア「力んだ」

ジユーム「ふ、ふざけんなー!!」

すると、ジユームの右腕がバズーカになり、ティアに向けて狙いを定めた。

ジユーム「おれは『バズバズの実』を食べたバズーカ人間！ 体中をバズーカに出来る！ これで死ねやー！」

ティア「わあ……」

ヒュウ

ジユームがティア目掛けバズーカを放とうとした瞬間何ががジユームのもとへ凄い早さで接近した

アト「酷いわね……私の事は忘れちゃったの？」

『剃』で近付いたアトが右腕のバズーカをジユームの顔に方向転換させた

ジユーム「や、やめろー? それは……」

ドカーン!!

ティア「ジャストミート」

周りの見物客達が面白いくらいに固まっているのが分かる。フルチにワインフリーも唖然として口をパクパクとさせてはいるが、声になつていない

アト「うふふ、もう大丈夫よ? ママの所へ帰りなさい?」

女の子「あ……ありがとう！バイバイ、お兄ちゃん！お姉ちゃん！」

ジユームに怯えていた女の子だが、最後には手を振つて元気よく駆けて行つた

ティア「良かつた、銃声が聞こえた時は間に合わなかつたと思ったけど……」

アト「あれは威嚇射撃だつた見たいね……」

ジユーム「う、うう……くそつ、こんな所で捕まつてたまるか！」

自分のバズーカを諸に顔面に直撃し、倒れていたジユームだつたが、執念深いのだろう、捕まりたく無い一心で再び起き上がつた

ティア「しぶといなあ～」

アト「繩にかけてもバズーカ打てるからね、氣絶させるしかないわ
ね……」

ティアが気絶させようとジュームに近づくと、何とジュームが体中をバズーカにして、周りの人達を無差別に襲おうとした

ジマー、ハムサウス――――――

ティア「マズイ！」

ティアがジューmを氣絶させる為に首を叩いた瞬間……

バーン

ティア「え……？」

アト「……」

ウインフリー「……」

プルチ「……」

プルチとウインフリーが銃でジューmをいぬいていた……

9話 ハコシシロ島（後書き）

はい、2人の初『六式』です！

『白銀のジーラム』グランデラインの入口で5800万ベリー、「最弱の海イーストブルー」で3000万が出て来るのだが、どこか違う海ならこのくらい出でてもおかしくなこと思います。

まあ、1Jの程度ならまだ余裕ですね……

(^__^・)

正直後悔してます……強くし過ぎた（笑）

10話 パルチ（前書き）

やはり、完全オリジナルの臺とかやつてると話のつじつまがあつて
いるかとか、色々と恐くなりますが……（ - ” - - ）

心臓に悪い……

10話 プルチ

プルチ・ワインフリー「……怖かつた～～！～！」

……

ワインフリー「……

プルチ「……

ティア「……

アト「……

ブルチ「うわー、人撃つちまつた！」

ワインフリー「何か、何か気持ち悪いー。うわ、何か気持ち悪いー！」

ティア「（せつかく少しカツコイイかもって思ったのに、勿体ない
……）」

アト「クスクス……」

その後、急所は外れていたらしい、ティアとアトがジューームは生きている事を確認し、ブルチ・ワインフリーと共に懸賞金を受け取りに行つた。

ティア「ほら、服のお金なんてはした金でしょ？」

ワインフリー 「本当に良いのか？ ジュームの懸賞金は山分けで…

「…

アト 「良いも何も、とどめは貴方達でしょう？」

プルチ 「でも、これは……1450万もあるでっ？」

ティア 「僕達の船には1億以上あるよ」

プルチ 「……」

ワインフリー 「……」

プルチ・ワインフリー 「……頂きます」

ティア「それによろしく...」

アト「ふふ……やつぱり可憐いわ」

ワインフリー「もうだ、家に来ねえ? 宿代浮くぜ?」

ティア「ここの?」

プルチ「全然OKやー。」

ワインフリー「何でお前が言つただよー まあ、気にすんな、俺達
だって暇しないし」

プルチ「おれも泊まつてええか?」

ウインフリー「ああ、全然気にすんな、ダメー！」

ブルチ「分かつた。行くわ」

ウインフリー「……あいよ

（～）

アト「大きい家ねえ」

ウインフリー「言つただろ？ われの親父はこの島の長だつて

ティア「いや～、思つてたよりも大きいから少し驚いたな…」

（～）

プルチ「ハハハ、まあええ、入れ入れ！」

ウインフリー「だから何でお前が言つんだよー、まあ、言つ通りだ、
入れ入れ！」

アト「ふふ、お邪魔するわね」

ティア「お邪魔します」

（）

ウインフリー「親父～！　帰つたぞ～！」

親父「おお、帰つたか、お帰り。ん？　今日の客は見慣れないな、
新しい友達かな？」

ティア「始めてまして、ティアです」

アト「アトです。今田この島に着いた時に2人と知り合いました」

親父「なるほど、ようこそフリッシュ島へ、あまり大きくはないが、とても良い島だよ。是非楽しんでくれ」

ティア「はい、今日はお世話になります」

親父「よし、立ち話もなんだ、入ってくれ」

アト「はい、お邪魔します」

（）

親父「そつこいえば、自己紹介がまだだつたね、私はセドン、フリッ
シユ島の島長であり、自警団の団長だ」

ティア「自警団？」の島は軍隊を持たないのですか？」「

セドン「……」

ウイーンフロー「……」

プルチ「……」

アト「（王国が絡むとやけに口を詰まらせるわね、何かしら……）」「

セドン「……軍隊は持っている。だが、一般人を守る為に動いてく

れないのだ、故に自警団が必要になつてゐる

ティア「国王を守る為だけ」……ですか？」

セドン「さう、だが、もう一つある。急に国王がモンキー・ポッドの頂上を目指して軍隊の半分の活動をそちらに集中させたのだ……」

アト「何故？」

セドン「それが分からぬのだ、いきなり、何の前触れも無しに……」

ティア「何があるんでしょうか……？」

セドン「分からぬが、モンキー・ポッドの頂上を目指し初めてからは沢山の死者が出でいる……」

アト「ただの木登りがそんなに危険なのかしら？」

セドン「確かに、いかにモンキー・ポッドが大きいと言えどただの木登りに過ぎない……が、モンキー・ポッドには『守護鳥ゲニウス』がいるのだ」

ティア「守護鳥？」

セドン「普段は大人しくモンキー・ポッドの中で生活しているが、モンキー・ポッドを登る者が現れると必ずゲニウスは襲つて来るのだ。まるでモンキー・ポッドの頂上に誰も近づけないようにしているかの様に、何かを守るかの様に」

ティア「雛がいるのでは？」

セドン「守護鳥に雛は存在しない……500年前からあの固体しか観測されていないのだ」

アト「そんなに長い間生き続けているのですか！？」

セドン「私も小さい頃からゲニウスを見ているが、何も変化が見られない。それどころか私の祖父も同じ事を言っていたのだ、『何も変わらない』と」

ティア「しかし、単なる繩張り意識という事は考えられないのですか？」

セドン「その可能性は低いと思つ。ゲニウスも時折街に降りてきて市民と接しているのだ」

アト「え……？」

セドン「500年以上もこの島で生活しているのだ。ゲニウス程に理性的な生物なら人間と触れ合う様になつても何も不思議ではない

アト「誰も怯えないのですか？」

セドン「小さい頃からこなからな、気付けば生活に盛り込まれていたよ」

ティア「そうですね、そんなゲニウスが無駄に人を襲う事は考えにくい……」

アト「でも、そつなると一番に不可解なのは国王ね、そこまでしても欲しい物がモンキー・ポッドにあるのかしら……」

セドン「分からぬ。だが、いつまでもこんな好き勝手はさせられない……。君達、服を買った時の値段に驚いただろ？ 税率100%というのも、国王がモンキー・ポッドを目指してからいきなり跳ね上がったものだ。国王は集まつた金の大半をモンキー・ポッドに登る為の軍資金として使用しているだろ？ 更に、いくら軍資金が入るつと人材には限りがある。そこで、国王は男女問わずに徴兵制を開始させた」

アト「酷い事をするわ……」

セドン「国王も昔はまだマジだった。良い国王とは言えなかつたかもしれないが、人を無駄に殺す事まではしなかつた」

ティア「国王を止めようと動いた事は無いのですか？」

セドン「一度だけある。国王を討ち取ろうと自警団を集結させて立ち向かつたのだが、国王は身を守る為に軍隊をつけるだけでは飽きたらず、選りすぐりの傭兵を3人雇っていたのだ。彼らは3人共悪魔の実の能力者を身につけていて全く歯が立たなかつた。結局、私達は尊い犠牲を出しだけだつたのだ……」

アト「それで今は黙つて従うしか出来い…………」

セドン「不甲斐無くてしょうがない…………。自警団を名乗つておきながら一般人の平和な生活も守れやしないのだ…………」

ティア「…………いや、悪魔の実を相手に生身の人間が相手するのは無

理があります。仕方の無いことですよ」

セドン「ならば、ずっと国王の身勝手を無視し、兵に連れていかれ死ぬのを待つていいと言つのか!! …… すまない、驚かせたね、気にしないでくれ」

ウイーンフロー「……」

プルチ「……」

ティアとアートが目を合わせ、少しの間だけ考えていたようだが、すぐに結論は出た様で、すぐに微笑みあい、セドンに声をかける

ティア「今日の港での海賊騒ぎを聞きましたか?」

セドン「え? ああ、聞いたも何も私が向かうはずだったのだ。それが、私が到着した頃には既に、被害者無しで解決していたんだ。」

アト「あの騒ぎを解決したのは私達です
「

セドン「何!? 信じられない! 白眼のジュークを子供二人で捕まえただと! ?」

ティア「信じてもらえないのは分かっていました。証拠をお見せします。プルチ・ワインフリー、お金を」

ワインフリー「あ、ああ!」

プルチ「分かった!」

ドサツ ドサツ

セドン「いや、これで……」

アト「5800万ベリー。白眼のジュークの懸賞金です」

セドンは雖然として声を出せない。お金が本物かどうかを確認するためにつつぱらパラと中身を見ている

セドン「（信じられない、5800万ベリーの賞金首を倒したというのか……しかも、服に争つた様な後が一切見当たらない……それに早く、それ程一方的に討ち取つたのか！？……彼らが味方についてくれればあの国王を倒せる可能性が……。いや、無関係な彼らを醜い争いに巻き込む訳にはいかない。それに、彼らはまだ年端もないかない子供なのだ……）」

ティア「お手伝いしまじょひー」

セドン「…………え？」

アト「止めても無駄ですよ？ 私達だけで行っちゃいますから！」

セドン「し、しかし！」

ウインフリー「親父！ …… プルチ、良いのか？」

プルチ「かまわん。おれだつてずっと我慢してきた。あいつは今止めるしかない、最後のチャンスや……」

ウインフリー「プルチ……。分かつた！ おれも戦うぞ親父！」

セドン「ウインフリー！？」

ウインフリー「おれだつてずっと見てきたんだ！ 一人で辛そうにしているプルチを、一人で背負う必要の無い責任を感じて生きて来た

んだ！ おれだって戦いたい。行かさせてくれよー！」

セダン「ワインフリー……分かった！ お前もいつまでも子供じゃ
ないよな……一緒に戦うぞ！ ただ、約束してくれ。マズイと思つ
たら絶対に逃げるんだ」

ワインフリー「分かった」

ティア「あの……ブルチが何があるんですか？」

ワインフリー「本当なら最後まで言わないつもりだったんだけどな
……良いよな？」

ブルチ「ああ……」

ワインフリー「ブルチは国王の息子、つまりは王子だ……」

ティア「え？」

アト「王子……。国王の話が絡む度に様子が変わるのはそういう事だったのね……」

プルチ「悪いな、かくして……。あまり話したい事じゃなくてな
…………」

ティア「いや、隠したい事なんて普通はあるもんだよ。気にしない
で」

プルチ「サンキューな

アト「それで、貴方も参加するの？」

プルチ「もちろんや！ あこつは絶対におれが止める

ティア「分かった」

セドン「君達には本当に感謝する！これから、自警団の団員を集めて作戦会議を始める。準備にも時間がかかるだろう。作戦決行までに最低でも5日は掛かると思う。それまで君達は体を休めて準備をしていてくれ！」

ティア「分かりました」

アト「ええ」

ウインフリー「分かった！」

プルチ「……」

その後は、意外にも綺麗に片付いたウインフリーの部屋でこれから事を話し合い、そのまま深い眠りについた

~~~~~

「依頼していた物を持ってきたぞ……」

「良くやった。これをあこいで食べさせれば無駄に金を使う必要は無くなる……。へへへ

「親とは思えない発言だな……」

「なに、あいつなんて利用するためだけに産んだだけ、愛情何て微塵も感じないな……」

「ふんつ、……あの女は殺すのか?」

「いや、まだ利用価値がある。殺すにはまだ惜しいのでな、今は牢屋で黙らせておる……」

「まあ良一。これからもひひこを頼むが……」

「ああ、あてこじてこのN……へへへ……」

## 10話 プルチ（後書き）

オリジナルだと本当に自信を持ってない……いや、今までだつて自信があつた訳では……いや、でも皆さんに自信の無いものを提供して いたという訳では……いや、でも……ごめんなさい

11話　トロス　オプラ（前書き）

人生マッタリ…………これが一番やね（

）

## 11話 トロス オプラ

ティア「にしてもさ、何で王子がこんな自由に出来るの？」

プルチ「あ？ ああ、いくら王子ってつたって、親父が放任主義やからな……。まあ、おれの事何がどうでも良いってのが本音やわつけどな」

アト「それでも、勝手に友達の家に泊まつても大丈夫なの？」

ウインフリー「こいつ、前は一週間ずっと泊まつて行つたぜ？」

ティア「凄いね……」

プルチ「ま、流石に王子の中では軽く騒ぎになつてたけどな……」

アト「街の皆は貴方が王子って知ってるの？」

プルチ「ああ、皆知つとるで？」

ティア「それにしても皆フレンズリーだね」

プルチ「おれが皆に言つとるからな、『普通の庶民として接しろ』  
って。何か苦手なんや。敬れる感じがどうも……。まあ、皆も最初  
は躊躇いもあつたみたいやけど、今はもう馴れたもんや、街にいる  
ときのおれはただの庶民と何ら変わらんで？」

アト「ふふ、貴方らしさわね」

前回でワインフリーの家に泊まり、現在は起床して身の周りの準備を終え、ワインフリーの部屋でマッタリと話をしていた。

ティア「でも、本当に良いの？ お父さんと戦つて……？」

プルチ「ああ、全然ええよ?」

ティア「(軽いな)……」

プルチ「親父つてつたつて、一緒にいたのは食事ぐらいやしな……。街の皆の方が一緒にいた時間は長いで?」

ウインフリー「そうだな、言われてみると、お前つてほとんど街にいるな……」

プルチ「だから正直、親父よりも街の皆の方がおれにとつては大事なんだ」

ティア「そつか……。そついえば、プルチって何で関西弁が中途半端に混ざつてるの?」

プルチ「話の方向が急に変わったな……。それはな、一時期おれが漫才にはまつとつて、ワインフリーとコンビ組んだ時の癖がまだ残つとるだけや」

ティア「ジッパ!!?」

プルチ「ジッパ!!?」

アト「ボケ?」

ワインフリー「ボケ?」

ティア「何となく納得だや……」

アト「えっと、貴方は1回王宮に帰るのかしら」

プルチ「ああ、今日は帰るで？ 最後に顔くじは見てないでな」

アト「やつ……」

ワインフリー「そうだ、おれ思ってた事あるんだけど、まだ少し口数あるからそれまでおれ達を鍛えてくれないか？」

ティア「え？」

プルチ「おれも考えてはおったで？ お前達は間違いなくそんじやそこらの海賊何かよりもずっと強い！ 鍛えて貰うことはもうないや」

アト「まあ、貴方達も戦つものね、全くかまわないわよ。」

ワインフリー「ありがとうな！ だけど、とつあえずは朝飯だ！ 食べたらすぐにつめるぞ！」

プルチ「えと、おれは王宮で食つてくるわ。少し準備もあるし、」  
「これからもじめじめへ泣くつて事は一応伝えんとな

ティア「分かつた。そんじゃ、また後でだね」

プルチ「ああ。それじゃ、早速戻るわ、また後でな」

アト「ええ、それじゃね」

プルチ「帰つたでー！」

執事「おお～、お帰りなさいませ。またワインフローの家に行ってたのですか？」

ブルチ「ああ、帰ってきて早々なんやけど、朝飯だけ食べたらすぐ  
にまたでるから。すぐには帰って来ないから」

執事「承知しました。お食事の用意はすぐに出来ますので、テーブ  
ルに着いてお待ち下せー」

ブルチ「おうー。」

執事「（ブルチ様、お許し下せー……）」

（――）

ブルチ「帰つたでー！」

国王「おお、帰ったかプルチ。さあ、座れ座れ

女王「お帰りプルチ」

プルチ「ああ」

国王「またワインフリーの所に行つてたのか?」

プルチ「ああ。ただ、朝飯食べたらまたじょりく行つてくるわ

女王「あら、そうなの?」

プルチ「ああ、一週間くらうだと想ひなげな

国王「そつか、遊ぶのも良いが、程々にな？」

がちやつ

執事「お食事をお持ひしました」

国王「並べる」

力チャ カチャ

執事が豪華な料理を並べ終え、『どいつぞいゆつくつ』と書いて出ていく。おいしそうな臭いが立ち込め、3人がスプーンに手をとる

国王「（むかし、今日の食事も上手いな）

ブルチ「（……マズイー、なんやこのHグ過ぎる味はー？ 吐きや  
うや……）」

ブルチがメインディッシュの横に添えられていた真っ白なフルーツを口にした瞬間口中に信じられない程に強いエグ味がやって来て吐き出せりと呟つたが、驚きのあまりつい飲み込んでしまった。

ドクン ドクン

ブルチ「（なんや、心臓が有り得ないくらいドックンドックン言つ  
とる……）」

国王「（くくく、飲み込んだか……）」

女王「大丈夫？ 顔色が冴えないわよ？」

ブルチ「ああ、大丈夫や……」

（）

ウインフリー「何やつてんだ？ あいつ……」

ティア「もう戻すぎだね……」

アト「何かあつたのかしら……」

ウインフリー「ブルチ……」

王室+

プルチ「何や？ 出掛ける前に少し話があるつて？」

国王「……」

プルチ「（何や？ 黙りこくつて……）」

国王「……」

プルチ「……うつー？ やめつ

パン

プルチ「.....」

国王「~~~~~、早く起きろよ.....」  
プルチ『君』「

ドサツ

プルチ「（な、何や、痛くない.....？.....？ 雪、何でこんなと  
こに雪があるんや？ .....んなー、体が雪になつとるのかー？）」

国王「自然系 悪魔の実」

プルチ「悪魔の実ー？ 父さんまさか、何か知つとるのかー？」

国王「~~~~~、知つてるも何も、お前をそんにしたのはおれだ」

プルチ「さっき悪魔の実って言つたよな！？　おれは何の実を食つたんや！？」

国王「くくく、大丈夫だ、変な実じやない……むしろ喜ぶべきものだ。お前が食べたのは自然系 悪魔の実 ユキユキの実だ」

プルチ「ユキユキの実！？　……まさか！　あの時食べたクソましいフルーツか！」

国王「そうだ、察しが良いな。その悪魔の実は、体から自由に雪を発生させる事が可能になるうえ、ありとあらゆる攻撃を無効化される……ただし、例外はあるがな」

プルチ「何でおれにそんな物を食わしたんや」

国王「くくく、お前から聞いてくれるか、おい！　入れる！」

プルチ「……？」

がちゅ

プルチ「……んなー、母さんー?」

女王「プルチ……」

「お連れしましたー』『トロロス王』ー。」

トロロス王「へへへへ」苦労

プルチ「な、何で母さんが櫻なんかに閉じ込められてんだー。」

トロス「くくく、『オプラ』を閉じ込めたのは人質だ」

プルチ「人質やとー？　どういつ事やー？」

トロス「おれが少し前からモンキー・ポッズの頂上を押していく事は知ってるな？」

プルチ「当然だ」

トロス「モンキー・ポッズの頂上には、『ある物』が眠っている。おれはそれが欲しいだけだ」

プルチ「こんな事をしてまで欲しい物なのか父さんー？」

トロス「くくく、それさえあれば何もいらないと断言出来るくらい欲しい物だな」

プルチ「分かつたで……おれにこの力を『えてモンキー・ポッドを登らせる気なんやなー?』

トロス「くくく、相変わらず鋭いな、そつだ。ロギアの能力さえあればあの忌ま忌ましい『鳥』に殺される事はまず無くなる。このまま無駄に兵力を失う訳にはいかないからな、痛すぎる出費だったが、悪魔の実オークションで手に入れたユキユキの実をお前に食わせて行かせる事にしたのさ」

プルチ「まさか、あの高すぎる税率は悪魔の実を買つためだつたのか!?」

トロス「そり、悪魔の実オークションは、出展する実を1年前には公開する。ロギア系の名前が出るのを一体何十年待つたか事か……。いくら小さじと言えども、1つの国が1年もかければロギア系の実を落札する額は十分に集まるものだ」

プルチ「ふんっ! 自分で食べなかつたのはゲニウスに殺される可能性は0では無いからな……死ぬのが怖かつたからやろ?」

トロス「くくく、何とでも言え、おれには余りにも大きな問題だ。手段を選んでる暇は無い。それで、行くのか？まあ、お前なら行かないって言つた瞬間どつなるか分かつてるよな？」

力チャリ

オプラ女王「ひつー？」

プルチ「やめろ！ 母さんに拳銃を向けるな！」

トロス「違う違う、オプラから拳銃を退けて貰いたい時は『僕が行きます』だろ？」

オプラ女王「プルチ！ 絶対に行つてはなりません！ 私は大丈夫です！ トロスの思い通りにしてはなりません！」

トロス「へへへ、どうしたんだ？」

プルチ「……アホか？ われに力を『えたのはお前やぞ、『トロス』。おれが母さんを守つて、先にお前を倒せば良い話しやー。」

トロス「…………。へへへ、やれるものならやつて見ないと

プルチ「ああ！ 何も言えなくなるへりこにギタギタにしたるー！ おらあああああーー！」

トロスに目掛けて、プルチが腕から雪を放出した

ドサッ

「……」

「…………」

「…………」

ブルチ「くつ…………」

トロス「くくく、アホはお前じやないのか？  
反抗してくる事は分かってるんだよ」  
能力を『えた時点で、

オプラ「ブルチ…………」

ブルチ「何や…………力が入らん！？」

トロス「悔~~楼~~石の手錠は嵌めたな？」

「ああ」

トロス「くくく、『苦勞だつたな、下がつていいぞ』『デル』『ブバ

ル』『バンダ』」

『デル』『分かつた……』

『ブバル』『承知』

『バンダ』『……』

3人はすたすと王室を出て行つた

ブルチ「ちい！ 監視がいたのか！」

トロス「くくく、まあ、これで何て言えば良いかがハッキリしただ  
る? プルチ君?」

プルチ「……くつ! ……おれが行つてくれる」

## 11話　トロス　オプラ（後書き）

まあ、全然予想できる範囲内だったでしょうな……（^\_^;）

## 12話 フロッグス・レボルート（前書き）

今回、何か文章がばらついた感じがして何回か直しましたが、まだばらついた感じが無くならない……（ - ” - ; ）

もしも100万円で文章力とアイデアを得られるならば、私はフカフカのベッドを買います（ ）

## 12話 フロッグス・レボルート

セドン「何? プルチが帰つて来ない?」

ワインフリー「あ、朝飯食べたらすぐに帰つて来るって話しだつたんだけど、もうすぐで口が傾くぜー?」

セドン「タイミングが良すぎると、作戦が悟られたか……?」

ティア「もしさうだとしたら……」

アト「作戦や準備なんて言つてられないわね……」

セドン「すぐに出発しなければいけないかもしないな……」

ウインフリー「プルチ……」

モンキー・ポッド+

プルチ「いつも見とるけど、これ登るとなると更に大きく見えるな  
……」

父親が何を企んでいるかは今だに見えて来ないが、あんな強攻策  
をとる奴の事だ、口クな事では無いだろうと諦め、モンキー・ポッド  
の頂上を見据える

プルチ「さあ、登るか……」

雪をモンキー・ポッドの側面に固定して、自分の登る道を確保する

「（何となく）の力の使い勝手が分かつてきたわ。手に入れ  
た方法が方法やから、素直に喜べんが、正直便利なもんやわ……」

自分の作った道を歩き、ゆっくつとモンキー・ポッドを登っていく

「はあ～、ゲニウスと戦うんか、嫌やわ～……」

十カインフロー家+

セドン「出発しよう、プルチに何かがある前に助けてあげなければ  
……」

ティア「でも、もしも思い違いだつた場合は?」

セドン「例え思い違いでも、国王を討つチャンスだ。そのまま国王を囮捕る」

アト「分かりました」

ウインフロー「もつと出るのか?」

セドン「いや、急遽突撃の旨を団員に連絡しなければいけない。私は少し遅れるが、君達は先に行つてくれ、私達もすぐに向かう」

ティア「分かりました。じゃ、行こう!」

ウインフロー「ああ!」

セドン「健闘を祈る、皆……」

（）

アト「……！？ あれを見て」

ウインフリー「あれは！？ ゲニウス！？」

ティア「あれがゲニウス！？」

ウインフリー「ああ、もう戦つてる見たいだ！ ティア、アト、急  
ぐぞー？ 王宮はもうすぐだ！」

アト「ええ！」

モンキー・ポッド

ブルチ「ふう、思ったより早いやないかい、ゲーヴス……」

「へ、お前も守らんとアカンのやうなことだな、おれも守るものがんねん。力づくやけど通して貰うでー!?」

ゲニウス「ジヤヤヤヤヤヤー！」

王室

トロス「（ゲニウス……）」

執事「…………」

（～）

ウインフリー「よしー。モンキー・ポッドはこの壙の奥だ！」

ティア「うん！」

十？？？十

「ディモル様、本日中には手に入るかと……」

「ディモル」「ジユフフフフ」……そつか、今から向かおひ。『苦勞だつた……』

「はっ！ それでは」

「ふー……ふー

「これでおれも……」

+ウインフロー+

「ウインフロー」「おこ、アレを廻せよ……」

バンダ「無理だな……」

ウインフリー「だのうと思つたよ……雇われた3人の傭兵の内の1人つてのはお前の事何だろ?」

バンダ「何故そう思つ?……?」

ウインフリー「何か雑魚じゃない雰囲気がふんふんするから」

ティア「(何で適當な?)」

バンダ「ふん、面白くな、咄嗟の勘は生存率を跳ね上げる……」

ウインフリー「んで、何でおれ達に気付いた」

バンダ「監視役がない訳が無いだろ？　お前達はずっと前から仮付かれている」

ティア「まあ、当然よね……」

バンダ「目的は何だ？　事によつては戦わなければいけなくなる……」

ウインフロー「フルチ奪還！」

バンダ「やうか、残念だ……やるしかないな」

ウインフロー「おれはやだ！　お前には絶対に瞬殺される雰囲気が  
ふんふんする！　ティア・アトどっちを行つてくれないか！」

アト「私が戦うわ」

バンダ「ほう、強いな……」

アト「あら、貴方にも『咄嗟の勘』はある見たいね」

バンダ「よく言ひ……」

アト「2人共行つて、時間が無いわよ?」

ウインフリー「サンキュー! 気をつけろよ!」

ティア「また後でね!」

アト「ええ、また後で」

バンダ「ふつ、お気楽だな……」

アト「あら心外、これでも大真面目なのよ?」

バンダ「そつか、悪かつたな……」

+セドン+

セドン「よし、集まりは1～3と言つた所か……」

セドンの目の前には集まつた団員達がきおつけで整列している

セドン「皆! 今日は急な収集に応じてくれて感謝している。先程も連絡した通り、これから王宮を攻め立て、『プルチ奪還』及び『トロス国王の拘束』が最終目的になる! 我々に与えられた役目は、軍隊をティア・アト・ウインフリーの元へ辿り着かせぬ様食い止め

る事、急速やかに行動する事、「...」

主室

トロス「...」

コンコン

トロス「...」入れ

がち  
や

執事「失礼致します」

トロス「ああ、『ペディ』か……何だ？」

ペディ執事「トロス様…………本当に、ようしかつたのですか？」

トロス「…………何の事だ？」

ペディ「何故わざわざフルチ様に押し付けなければいけなかつたのですか……？」

トロス「あいつはおれが利用する為だけに産んだ奴だ。使い捨てるには一番良い人材だろ？」

ペディ「しかし、先程からトロス様がどこか辛そうに見えますが……」

…」

トロス「……氣のせいだ」

ペディ「しかし、トロ

トロス「もう止めろ！ 止めてくれ……ペディ……」

ペディ「トロス様……」

トロス「ブルチ……」

十ティア十

ウインフリー「またか……」

ブル「貴様等か、プルチを奪還しに来たという侵入者は」

ティア「何でそれを？」

ブル「城門で軍隊と自警団が騒ぎを起しあじめた所だ。『プルチ奪還』だの、『トロス拘束』だと騒ぐ馬鹿がいたからな」

ウインフリー「せうか、自警団はもつ到着してたか……」

ブル「ああ、余り話すことは好きじゃないんだ、とつとと始めてとつとと終わらせやつ」

ティア「ウインフリー！　『イツは僕が相手するから君は早くプルチの元へ！』

ウインフリー「悪い、任せた！　氣をつけろよー！　じゃあー！」

「ブバル「全く、別れたか、面倒な事を……」

ティア「さあ、僕も早くウインフリーを追わなきゃね。とつとつ始めてとつとつ終わらせようよ」「ん？」

「ブバル「貴様……」

「？？？」

「ディモル「ジユフフフ、着いたな……」

「フォセカ「熱いな……」

「お待ちしていました、ディモル様にフォセカ様……」

「ディモル、おお、デルか！　早くおれを『物』の在りかへ案内しろ」

「デル、はい、ただ今。ただ、お約束はお忘れ無く……」

「フォセカ、分かつてゐる……もしも『物』が本物であつた場合は以前を我等が組織『フロッグス・レボルート』の幹部の座を『与える』

## 12話 フロッグス・レボルート（後書き）

( ) 一番使う顔文字です  
? 一番使う絵文字です

## 13話 バンダ（前書き）

今日は少し短いです

(・・)

## 13話 バンダ

「……お前達はプルチを救い出すと言つたな？」

アト「ええ、言つたわ？」

「……」  
「どうかしたのかしら？」

アト「どうかしたのかしら？」

「いや、確認したかつただけだ……。さあ、おれも仕事を果たさなければな、行くぞ！」

「アトに急接近して、膝蹴りを仕掛けた後、輝赤でバンダに切り掛かるが、そ

れをギリギリで避けられてしまつた。

バンダ「速いな……」

冷や汗を腕で拭い、想像以上の動きで、つい口元に出してしまつ

アト「あら、褒めてくれるの?」

バンダ「ああ、ジュークを倒すだけの事はある…………」

アト「私達の事を知つてるの?」

頭では分かつていながらも、あえて聞いてみる事にした

「知らない方がおかしいだろ。あれだけの事をすれば一日も経つと嘘の耳に入る……」

アト「ま、そうよね」

「バンダ」（手をぬいた状態では、とてもじゃないが敵わないな……）

「一切顔に出てはいけないが、内心穏やかではないバンダも、次の瞬間に頭の中は綺麗に整理された

「バンダ」（殺す氣で行かなければやられる）

アト「（雰囲気が変わった。何かしてくるわね……）」

言い知れぬ雰囲気に警戒を強めたアトだが、次に起こる初めての経験について驚きを表にしてしまった

バンダの体がぼこぼこと膨張し、更に毛でミッシリと被われて行く

バンダ「クマクマの実 モデル『グリズリー』……」

体格は人間のそれと大差は無いが、体中が毛で被われ、顔は顎を残して他は熊そのもの。更に爪が野太くなり、腕も少し長くなつた様だ

アト「ゾオン系、初めて見たわ……」

「バンダ、ふむ、ならば、私の動きにつけては来れまいな……」

「さうが早いか、バンダが地面を強く蹴つた

アト「…………？」

キーン

「バンダ「ほう…………」

「バンダの爪を輝赤で何とか受け止めたアト

アト「思ったよりも早く驚いたわ…………」

軽く焦りはしたが、いつものポーカーフェイスを崩さずにバンダ

へ声を掛けた

バンダ「傷ついたよ、まさか無傷で止められたとはな……」

「ひらも相変わらず無表情で言つので、心理は簡単に知ることは難しい

アト「あら、傷ついたわ？ あれで私を倒そうとしてたなんて」

悪戯っ子の様に言つアトに、バンダも腹立たしい感情は沸かないが、やはりまだ幼い一面がチラチラと見える事がバンダに躊躇いを無意識で生んでいる

バンダ「ふん、相変わらずの減らず口だな

軽く呆れた様に帰すバンダにアトはクスクスと笑っている

アト「ええ、たまに言われるわ。大人にね」

「バンダ「ふん、やんちや娘め……」

「バッダもアトとの会話をほんの少しだが楽しんでいる様だ。顔付きがちょっとだけ柔らかくなっている

……せせせせせせせせせせ

ふと遠くから聞こえたゲニウスの鳴き声で、2人の間を流れたほんのさやかな時間が吹き飛んで行ってしまった

アト「早く迎えに行つてあげなきゃね……」「

「 バンダ「 そつだな、私も仕事を忘れていた様だ……。さて、行くぞ！」

アトの懷に素早く潜り込み、爪でアトを裂こうと振り下ろすが、輝赤で受け止められた

バンダ「 何！？」

アト「 少しだけ、危なかつたわ……」

流石のバンダも驚きが顔に出てしまつた。人獣型であるバンダの一撃をアトが受け止めたのだ。無理も無い

「 バンダ「 (何だと！？ 1撃目の小手調べとは違う！ 本気だったはず！ 能力者ではない、しかも女の子に受け止められたのか！？)

アト「行くわよ？」

不適な微笑みでアトが告げる

バンダ「（……消えた！？）」

アトが剃り刀でバンダの前から姿を消した

バンダ「（ビ、ビードー！？）」

バンダは分かりやすくキヨロキヨロとしている。やはり先程の出来事での動揺は後を引いている様で、自分でも良い対処方法が見つからず、ただ不安を和らげる為だけにアトを探す事に夢中になっている

アト「（分かりやすく拳銃不審ね……）」

アトはと面つど、『円歩』を使いバンダの頭上で浮遊していた

スタッフ

バンダ「そ、そこか！？」

アトがバンダの後方の地面に降り立った音をあえて大きく出して  
自分の居場所を示した

アト「剃」

バンダ「ま、また消え……」

しかし、再び剃によつて姿を消してしまつたアトにバンダは『完全に遊ばれている事』を自覚し、恐怖を感じる様になつた

アト「（ゾオン系は純粹に体が強化されるつて聞いたわ。相手に攻撃を気付かる前に当てなきゃ多分倒せない……）」

アトも別に遊んでいる訳では無い。強化されたバンダを1撃で倒すには自分の攻撃を認知されない状態で決めるしかないと判断したための『剃での搅乱』だ。大体今はプルチ奪還の為に遊んでいる暇は無い。さつきお喋りしていたが……

「バンダ」「フルーツ……ムニエル……ステーキ……」

バンダも冷静を保とつと、頭の中で好きな食べ物を考えている。  
もちろん注意は散漫にならない様にしてはいるが

無面だった。アトが地面に足を付けた瞬間は……

アト「剃」

ズバツ ズドツ

バンダ「んぐ……ー?」

じりり

アト「早く行かなきやね……。ちょっとひ、熊わん」

背後からバンダの背中を輝赤で斬りつけた後、後頭部を棒の部分で撲つたのだ。

バンダはなす術も無く無抵抗に倒れてしまった。死んではいない。氣絶しているだけだが、その恐怖の混じつた表情を見てアトは消え入りそな程に小さな声で『ごめんなさい』と言った

アト「貴方が『輝赤』何て名前をつけられた訳が分かったわ……」

『輝赤』を見て語りかける様に話し出す

アト「貴方自身が少し発光しているから、人を斬った時にいた血が輝いて見えるのね……」

本当に、本当に綺麗な赤の輝きを放つ『輝赤』を見てアトは少し  
だけ微笑みを見せた後、モンキー・ポッドに向けて歩きだした……

## 13話 バンダ（後書き）

どうでじょつか？

一心は文章を改善したつもりなのですが……

自分でいやマイチ分からぬのが難しい（・・”・・・）

ちなみに、これからも少し短いのは続くと思います

14話 ブバル（前書き）

風邪を引いた……

( - ; )

頭が痛い、喉が痛い……腰が痛い( - “ - ; )

## 14話 ブバル

ティア+

ティア「僕は急いでるから、行くよー。」

ブバル「やれるのならやるが良いぞー。」

ティアが剃刀でブバルの腹を『影』で斬りつけようとしたが、軽く  
かわされ、掌で『影』を触つてきた

ブバル「サイズを使うとは、珍しいものだな……」

ティア「うん、オーダーメイドさ。……んー?」

ブバル「やつと気付いたか……」

ティア「『影』が動かない……？」

ティアが『影』を再び振るうとしたが、全く動かない。別に握っている訳では無い、ただ掌で触れているだけなのだ

ティアが少し動搖しているのをブバルが確認すると、ニヤリと笑つて見せた

ティア「そいいえば、能力者だったね……」

ブバル「ふふふ、知っていたか。どんな能力かは知らない見たいだがな」

ティア「まあ、何となくの検討はついてるけどねえ」

少しだけ得意気な顔でブバルに言つ

ブバル「別段難しい能力ではないからな、ばれるのはいつも時間の問題だ」

ティア「もう少し観察しないと特定は出来ないね。とりあえず『くつづける』事は出来る見たいだね」

ブバル「ふふふ、どの程度で分かるかな」

からかう様な、馬鹿にした様な態度で言つ

ティア「すぐに解明してあげるよ」

言つた後、ブバルの頭の右横を本氣で蹴つた

ブバル「ふほつ！？ んぐつ…………ハアハア…………。何で強い蹴りだ……！  
……意識が飛ぶかと思ったぞ…………！」

ティア「やつぱり…………」

ティアの右のすねがブバルの頭にくつついてしまっている。ブバルはふふふと笑い、ティアはティアで予想通りと笑顔を見せている

ブバル「ふふふ、笑っているが、そんな状態で何が出来るんだ？」

ティア「殴る」

ブバル「ぶへつ！…………う…………くつ！ 普通に殴るとは流石に思わなかつた…………！？」

ティアはブバルの顔面をおもいつきし左で殴つた。右足を持つて行かれている以上右で殴つても力を溜め難いからだ。案の定左もブルの顔面にくつついてしまっているが、ティアがただで転ぶ訳がない

ブル「貴様、目が……！」

ティア「もしかして、こんな事された事無い？　だとしても、自分で気付けない何て、凄く頭悪いの？」

ティアは殴つた左で目をすりぼりと隠してしまっていた

ティア「見えない恐怖は人を一気に臆病にする……さあ、次は何をしようかなあ」

脅す様に、挑発する様に軽い口調でブルに言つ

ブバル「（じうする、目を潰されても何も出来ぬ……。だが、コイツを自由に解放しては私が不利になる……）」

正直な所、ブバルは恐怖を感じて固まっているが、先程のダメージはかなりテカイので、もし解放した場合に機動力を活かした戦いをされればついていく自信はない

ティア「よ～し、じゃ、テコパンにしておつ」

ブバル「（トコパンだとー？ ハッタリだな……コイツ、何をする気だ？）」

バチーン！

ブバル「うぐー！？」

「ト『パン』しました。残った右手で思いつきと。ただ、一瞬で『パン』と言つても、『指銃』修得者の『パン』だ。威力は普通の『パン』とは別次元の物。

ティア「おー 離れた」

ブバル「（くそ、衝撃でつい放してしまつた……）」

ティア「…………ん？」

トイヒと解放されたティアだが、歩きだそつと足を上げようとしたが、上がらない

ティア「足が離れない…………。やつか、自身の体じゃなくともくつける事が出来るのか…………」

ブバル「（よし、はまつてくれたな…………）」

すると、ブバルが懐から拳銃を出し、両足がくつついで動けないティアに目掛け、発砲した

ブバル「元々、私の戦い方は相手の動きを封じて、遠距離から安全に攻撃を仕掛ける物だ。近距離戦は専門外」

パン

カキーン

ブバル「何！？」

ティア「痛……」

鉄塊で拳銃の弾を弾いてしまった。ブバルの驚きは普通ではない。それはそうだ。生身の人間を撃つて聞こえた音が『カキーン』なのだ。驚かない方が無理と言うもの

ブバル「貴、貴様！ 能力者か！？」

ティア「違うよ？」

ブバル「な、ならばどうしたと言つの

ティア「嵐脚」

ブバル「ぐあつ……何をし

ティア「嵐脚」

じやつ

ティア「ゴメンね。説明するの面倒臭いし、何よりそんな時間は無いんだ」

履いていた靴を脱ぎ、自由になつた右足で嵐脚を繰り返した。攻撃がやって来るとは思いもしなかつたブルは嵐脚を諸に喰らい、2撃目で完全に意識を放してしまつた

ティア「（怖い力だった……相手がもう少し賢かつたら凄く厄介だつたかもしれないな）」

ディモル「つたぐ。つむさくてしようがないぜ……」

フォセオ「仕方ないぞ、海賊である以上静かに暮らす事は求めるな  
…………」

「…………」  
デル「どう致しますか?」

3人の目の前には自警団が集まっている。港に海賊が現れたと、  
戦闘指揮中のセドンの携帯電伝虫に連絡が入ったので、城門前にま  
だ集まれなかつた残りの自警団に『港の海賊を向かい討て』指令を  
だしたのだ。

ディモル「面倒臭い…………とつととちまつて行くよー!」

フォセオ「そうだな、どっちこじる、早いか遅いかの問題だ」

デル「そうですね」

自警団も3人を向かい討とうにきり立つている。『いいは通さん

!』だの『覚悟しろ!』だのと叫んでいる。

ディモル「全く……。行くぜええ！」

## 14話 ブバル（後書き）

ペタペタの実  
粘着人間になる

自身の触れた部分を粘着テープの様な、強い粘着力を与えてしまう。もちろんどこにも作用させる事が出来るため、相手を貼付けて、行動を制限することが出来る。

賢い奴が使つたらかなり強い力だと思います。賢い奴だったら  
^\_-^;)

ブバルはムツツリ馬鹿です（笑）

## 15話 共闘（前書き）

今までで一番短いですね  
(・・)

セドン+

プルプルプルプルプルプルプルプルプル

セドン「もしもし、セドンだ。何かあつ

血警団「セ、セドンやんー 避難して下さいー とても敵いません  
！ 」から全滅しか『おらあ！ 連絡なんか取つてんじゃねえぞ、  
面倒くせえーー！』

グサツ

ぐわああああああああーーー！

セドン「え、どうしたんだー？ 反応しない。おこー。」

懸念に顔を掛けたが、セドンの耳に響くのは電虫の回り声から  
聞こえる悲惨な叫び声と、残酷な怒声のみ

セドン「まかーー。あらひの部隊は全滅かー？ どうする、このま  
までは街を救う事が……」

†H室†

バーン！

兵隊「トロス王！ 緊急事態です！」

王室のドアを荒々しく開け放ち、緊急事態だと告げる兵隊に一瞬は怒鳴りうとしたトロスだが、余りに切羽詰まつた顔なので、一先ずは抑え、素直に用件を聞く事にした

トロス「何だ。何があつた」

兵隊「海賊がやつて来て、現在街を進撃中です！」

トロス「何だと？ 誰だ！？ 賞金首か？」

兵隊「『ディモル』と『フオセカ』と『デル』の3名ですー。」

トロス「何！？ 『ディモル』と『フオセカ』だと！？ 間違いはないのか！」

兵隊「はい！ 間違いありません！」

トロス「くつ……！『テル』は『フロックス・レボルート』のスパイだつたのか！？」

しばらぐ考えた様子を見せ、兵隊に命令を下した

トロス「軍隊はティモルとフォセ力を止めるのだ！」

兵隊「し、しかし！自警団の反乱によつてほとんどの戦力をそちらに捨ててしまつていますが！？」

トロス「自警団にも街へ向かう様に伝えろ！いくら俺を討ちたいと言つていようが、奴らの実力を知れば優先事項が『俺を討つ事』ではないぐりこ馬鹿でも分かるはず」

兵隊「はつ！」

しかし、駆け足で戻ろうとした兵隊をトロスが止めた

トロス「これを持って行け」

トロスが引き出しから出した2枚の紙を兵隊に渡す

兵隊「いや、それは!?

モンキー ポッド

ブルチ「うああああああああああああああ！」

ゲーワス「……………」

ブルチが自分の右腕を雪に変え、ゲニウスを包み込んでしまうが、

やはり得たばかりの能力だ。細かい動きや、単純にパワーが足りない。雪に包まれたゲニウスだが、すぐに雪を壊してプルチ目掛けて飛んでくる

じゃあ

ゲニウスが口にくわえようとしたのを何とか避けたが、プルチが足場にしている雪の足場がほとんど崩れ落ちてしまった

プルチ「おわ！？ しまつ……ー？」

足場が崩れ落ちた為にバランスを崩して真っ逆さまに落ちてしまつた

プルチ「くそ！？ そのままやと下の湖に落ちるー らあああー！」

何とか落ちまこと腕を雪にして、モンキーポッドにやっとしがみ

ついでに

モンキー・ポッドにしがみついたプルチへ更に追い討ちを仕掛けて来たゲニウスに今度は完全に振り落とされてしまった

ブルチ「くそつ！ まだまだや！ 届けえええーーー！」

ザパン！

十城門前十

セドン「何だ……？」

今さつきまで激しく戦っていた軍隊の皆がパッと戦意を見せなくなつたのだ

セドンが状況を理解出来ないでいる中、軍の兵隊が一人セドンのもとへやって来た

兵隊「血警団長セドン…トロス国王より、今すぐ市街の海賊共を我等軍隊と共に向かい討との命令が出てこる…」

セドン「（攻撃を止めたのはその為か…？ それにしても何故急に国民を守る様に…）」

兵隊「それと、これはトロス国王より預かった物だ…」

先程トロス国王から預かつた2枚の紙をセドンに渡す

セドン「あ、まさか……。今島を襲つてこるのはマイシン等だと言つのかー?」

『静寂のティモル』

460,000,000ベリー

『日々のフォセカ』

370,000,000ベリー

『暗黙のデル』

92,000,000ベリー

## 15話 共闘（後書き）

異名を考えるのが一番辛いよ（一・）

「ねえなれこ（・・・）

更新が遅れました。

ただ今、ストーリーを軽く変更している最中でありますし、見直すのに時間をくつてしましました。次の更新にも軽く時間が必要する予定ですので、また間が空いてしまうと思われます

街十

『ディモル』「つたく何だつてんだよ。おれはただ静かに過ぐしたいだけだつてのによ……」

『フォセカ』「静かに過ぐせなくなつたのはお前が海賊を始めたからだ、自業自得もいいところだな……」

『ディモル』「んなこたあ、分かつてんだよ。だが、こんなもん見たら愚痴りたぐるのも同情出来るだろ?」

『フォセカ』「分からんでもないな……」

『ディモル』『フォセカ』『デル』の3人は、先程立ち塞がった自警団を片付け終わり、しばらく歩いてそろそろ王宮だと言つ所ま

で來ていたのだが、今日の前には軍隊と自警団が新たに3人の前に立ち塞がっているのだ。もちろん、その中セドンの姿も見える

ディモル「つたく面倒くせえな……」

フオセカ「全くだ……」

†モンキー・ポッド†

ウインフリー「ハア……ハア……やつと着いた」

やつとモンキー・ポッドに到着したウインフリーだが、先程からゲニウスの姿が見えないので、プルチに何かあったか、無事でつべんに登り、既にここにはいないかのどちらかなのだが、ウインフリーの希望をボロボロに打ち砕く光景を目にしてしまった

ワインフリー「プルチ！？」

湖に沈んだプルチである。ワインフリーは即座にプルチのもとへ駆け付け、地面に寝かせた

ワインフリー「どうしたんだよー？ 溺れる様な深さじゃないだろ  
ー！」

確かにワインフリーの  
体で濡れているのではなくてその辺りまでと、腕だけである

プルチもビリビリ落ちてから時間はほとんど経っていない  
意識はハツキリとあった

プルチ「ハア……ハア……助かったわ……サンキューな、ワインフ  
リー……」

ワインフリー「よかつた……本当によかつた……何があったんだ！」

？」

プルチ「ゲニウスに上から落とされた。湖に落ちた時に頭を強く擊つて動けんかつただけや……」

体が雪だから大概の打撃は通用しないが、現在プルチの体は水を吸つて固まつてしまつている為に、落ちた瞬間の衝撃を受けてしまつたのだ。ただ、常人のそれよりは衝撃を和らげている為に、軽い脳震盪程度ですんではいるのだが

「ワインフリー」「どうしてお前がモンキー・ポッドを登つてんだよ！？ 今までたただの兵隊達だつたじやないかよ！ 何で王子の、息子のお前何だよ！？」

悲痛な叫びで、田尻に涙を貯めながらも必死にプルチに聞いてくる

プルチ「父さんさ、おれに悪魔の実を食べさせてモンキー・ポッドの下でつぺんまで登りせよつとしてたんや……」

ウインフリー「悪魔の実だと…? 何を食べたんだ!」

プルチ「ユキユキの実、体が雪になるみたいや。雪だからなんやろな……体が少し固まって動きにくい」

ウインフリー「ゴメン、不謹慎だけど、羨ましいな……それ」

端から聞いたら『何言つてんだコイツ』と言われてしまつかも知れない事だが、この2人の仲なら全然あり、プルチも驚く様子無しに

プルチ「やろ?」

と返す

こんな言い合ひをした後、どちらとも無く笑い出して2人の空気は少し和んだ

プルチ「そついや、あの恋人兄妹はどうした?」

いつの間にか出来上がってしまった変なあだ名だが、ワインフリーも迷う事無しにティアとアトだと分かり、すぐに答える

ワインフリー「あいつ等は今戦ってる最中だ。ここまで来るのに国王の傭兵達が来て、2人が相手をしてくれたんだ」

プルチ「そうか……」

はっくしょん!

プルチ「お前、湖に入つてすっかり体冷えてんじゃねえか!/?とにかく、どこかで着替えろ! おれの部屋から服を持ってきて良いから」

ワインフリー「そうだな、この湖なら洒落にならねえな、分かった  
……ってか、お前の分は？」

プルチ「ああ、多分雪だからだな、全く寒くねえから良いわ」

ワインフリー「寒くねえのか！？……益々羨ましいなお前！まあ、良いわ。寒く無いって言つたつてお前もべしゃべしゃだから2着持つて来るわ」

プルチ「気をつけろよ。いくらお前が王宮の顔なじみだからって、今は何があるか分からねえぞ」

ワインフリー「分かつてゐる。誰にも見つからないぐらゐの気持ちで行つてくるぜ」

プルチ「おれは大丈夫だ。おれを殺したりする理由が全く見つからんからな、むしろ保護されるかもしれない」

ウインフリー「分かった！ んじゃ、ひとつ走り行ってくるー。」

プルチ「じゃあな」

ウインフリーは王宮のある方向へ走つて行つた。残されたプルチはそのまま横たわつて仲間を待つ事にした

プルチ「（大丈夫だよな、ティア・アト……？ 心なしか、少しだけ体が動く様になつたな、これなら誰か来た時は普通に動ける様になつとるやろ……）」

十城門十

ディモル「つたぐ、やつと着いたぜ……」

フォセカ「途中で随分と邪魔されたからな……」

デル「全くです。おかげで無駄に時間をくつてしましましたね……」

ディモル「ああ、じゃあお邪魔するか、懐かしいフリッシュ・ショウ富く  
……」

フォセカ「もう、そろそろ20年も経つのだな……」

ディモル「つたぐ、時間が経つのは早過ぎるもんだな……。このま  
まじや、おれが静かに過ごせる様になる前にじじいになつて死んじ  
まうぜ！ ジュフフフフ！」

フォセカ「静かに過ごす前に『殺される』何て事は考えないのか？

ディモル「ジユフフフフ！ つたく、有り得ねえ事言い出しあがる！ おれ様が殺される訳ねえだろ！ ジユフフフフ！」

フォセカ「ふつ、 そうだな」

足取りは軽く、 城門を開け放ち、 3人が王宮へと踏み込んだ所を見ていた者がいた。

ペディ執事「ついに来たか……」

† プルチ †

プルチ「乾いたんやろか？ かなり体が動く様になつたな……」

1人残ったプルチは、腕を回したり、首を回したりしてこう呟いていた

「プルチ、にしても、水吸うと体が固まつてまうんか……。ま、溶けないと、少し動きにくい気がする程度なもんやからええか」

「プルチが1人で自分の能力について考えているときなり近くに2人分の足音が聞こえた

しゅたつ

「ティア「あ、プルチ！ 無事で良かつた」

「アト「…………」」

突然の登場に中々驚いているプルチだが、とりあえず2人にかすり傷さえ見つからぬ事で安堵する

プルチ「おお、お前等か！ 無事そうで何よつや！」

ティア「プルチ今までどうしてたの？」

プルチ「ああ、モンキー・ポッドに登つとつたんやけど、ゲニウスに落とされてたんだ」

アト「よく大丈夫だったわね……」

プルチ「実はな、さつきおれ悪魔の実を食わされたんや」

ティア「悪魔の実…？ ……能力は？」

プルチ「これだ」

プルチが腕を雪に変え、ティアに攻撃をした。当然ティアはかなり驚きはしたがすぐさま雪を避けようとしてその場から移動する。だが、それ以上に驚いていたのはプルチだった

プルチ「…………」

ティア「凄い！ 口ギア系の実を食べたのー？」

プルチ「……あ、ああ。そりゃ、ユキユキの実って父さんは言つと  
つた」

アト「どうかしたの？ 何か浮かない顔してると

アト「どうかしたの？ 何か浮かない顔してると

ブルチ「いや、何でも無い（成る程、これならもしかするとグニウスを倒せるかも知れんな……）」

1-6話 お披露目（後書き）

プルチの閃き

? ? キラーン ? ?

17話 20年（前書き）

今回から過去に入りますや（・・・）

王宮十

「デイモル、つたぐ懷かしいぜ、中身は全く変わらねえな……」

「……」  
「フォセカ」「ふむ、やはつ20年経つてもそつ変わるものではないな

「デル」「やうですか。世もいじめのままだったのか……」

「デイモルとフォセカは王宮内服の全く代わり映えのしない様子に懐かしんでいるが、傭兵としてここ2〜3年の間にやつて来たデルにはあまり感じる物は無い様だ

ディモルとフォセカが王宮内服をジロジロと見ていると、目の前にある大きな階段の上から足音が2人分聞こえたので、3人はそちらを見た

ディモル「まさか、お前はトロスか？」

トロス「久しぶりだな。ディモル、フォセカ……貴様はフロックス・デボルートのスパイだっんだな？ デル……」

デル「スパイ何てたいそれた物でも無いが、同じ様なもんだな……」

ディモル「つたぐ、すっかり大人だねえ……『トロス君』？」

トロス「貴様等も20年で大出世した見たいじゃないか……少なくとも幹部辺りにはいるのか？」

トロスは『ティモルとフォセカのデルからの対応を見て、2人の職位を何となく予想した

フォセカ「ふむ、惜しいな……。残念ながらハズレ、『大幹部』だ」

トロス「ふむ。なら『ボロニア』は『最高幹部』か?」

ティモル「当たりだ。つたく、相変わらず懐かしい名前だな『ボロニア』か……」

またもや懐かしんでいる『ティモル』にトロスが質問をする

トロス「もう共には行動してないのだな?」

フォセカ「ふむ、当時はおれ達が『幹部候補』でボロニア様が『最

下級幹部『だつたからな……。おれ達に作戦指揮をとつていたのが  
ボロニア様だつただけの話だ……』

トロス「そつか……。で、今日ここにやつて来た理由は何だ？ 貴  
様等がこんな小さな島に来る理由は無いはずだ」

ディモル「ジユフフフフ！ その事だがな……『忘れ物』を取り  
に来たんだ。20年前のな……」

トロス「な、何！？ ……何の事だ？」

なにやら心当たりがある様だ。一瞬だけ慌てた様子を見せるが、  
悟られてはいけないと、すぐに平静を装つも、哀しくもディモルと  
フォセカの目を騙す事は出来なかつた

ディモル「ジユフフフフ！… つたく、ぢづやらあの様子だと本  
当らしいぜ！ デルの最下級幹部への昇進は確実だな」

フォセカ「全く、盲点だった……」

ディモル「つたぐ、本当だぜ……おかげでフロックス・レボルートの計画が20年も遅れちまた。なあ、あるんだろ？『あの実が』……」

にたぐ、とトロスに問い合わせるディモルにトロスは何も言えなかつた。

トロス「（ダメだ……）」まで特定されていては場所も特定されていらばずだ。……頼む……フルチよ、早くモンキー・ポッドを登つて私に渡してくれ……」

†? ? ? †

「ただいまー！」

「おお、お帰りになられましたか。トロス様」

トロス「おお！ 久しづり、ペティ！」

今は過去……約20年前のフリッシュュ島。当時でトロスはまだやんちゃ坊主の16歳、ペティが執事になつて3年。まだ新米37歳の時代

ペティ「また街で遊んでいらしたのですか？ 1月も……」

トロス「そうだ！ ずっと友達の家にいた！」

ペディ「そうでしたか、後で御礼に何か届けさせて頂く事にしました  
よ」

トロス「そつだ、父さんは王室にいるか？」

ペディ「ええ、『アルトロ様』は王室にいらっしゃいますよ。」

トロス「分かった。ありがとうございますー。それじゃ

ペディ「いえいえ」

ペディに軽く手を振り王室に走っていくトロスを見てペディは微笑んでいた

（）

「父ちゃん！ 今帰りました～！」

アルトロ「おお、帰ったかトロス」

トロス「久しぶりだな父さん、1月ぶり！」

アルトロ「ん？ そうか、もう一ヶ月経つのか？ 久しぶりトロス」

トロスの放任主義はプルチがどうでも良いとかでは無く、この父親の呑気さから来たものである。現に1ヶ月経過しているにも関わらずトロスの事は頭に一切あらず、今帰ってきてトロスを思い出したのだ。しかし、トロスを愛していない訳ではなく、出来る限りの愛情は注いでいて、トロス自身も自覚している為に1ヶ月経過して忘れ

られていても、こつもの事と軽く流せるのだ。

トロス「帰つてきてしまつただけど、明日また出掛けんから」

アルトロ「おお、そうか。 くれぐれも怪我はしない様にな

トロス「あいよ」

アルトロ「もう少しでティナーの時間だから、どこかで適当に休んでなさい」

トロス「ああ、自分の部屋にいるよ

アルトロ「分かった」

軽くアルト口に手を振り、自分の部屋へ行くトロスを見てアルト口は『1ヶ月か……』何てぼやいていた。

十港十

住民「海賊だ〜〜〜！」

この頃は大海賊時代が幕をあけてまだほとんど時間が時間が経過していない為、海賊が現れる頻度が劇的に高まり、住民にも馴れてしまった者と、馴れる事の出来ない者とが混在している混乱の時代である。

ある者は「また海賊か……」と冷静に対処し、またある者はギャーギャーと騒いでたらめに逃げ惑う者がいる。

海賊達も住民を襲うつもりが初めから無くとも、ここまで騒がれ

ればあまりの煩さに殺意が湧いてしまい、逃げ惑う適当な住民を殺してしまつ為、無差別の殺傷事件というのも最近じやよく耳にする言葉となつてしまつた

今回も例外では無く、海賊船からおりた2人の男達はイライラとしていた

「つたく、ここまで煩くされちゃ殺意も湧くつて事に住民の奴らは気付かないのかね……」

「仕方ないだろ。パニック状態の人間は理屈ではないのだ……」

プルプルプル

ここで、片方の男が懐に入れていた携帯電伝虫がなつた

「ディモル・フォセカ……くれぐれも」」でも騒ぎを起すなよ。」

「ディモル、つたく、でも騒がしいたらありやしないぜ？」これ  
…ボロニア様

ディモル

当時19歳

懸賞金

78,000,000ベリー

ボロニアア「『でも』も『糞』もあるか。ソソで騒ぎを起させば一気に  
に面倒になる」

「フォセカ、もつて騒ぎを起させるがな……」

フォセカ

当時19歳

懸賞金

65,000,000ベレー

ボロニア「実害を出すのと、向こうをただ慌てさせのんじじゃ天地の差だ」

ディモル「つたぐ、分かりやしたよ……」

ディモルは左手に構えかけていた拳銃をしまい、ボロニアの言つ事を黙つて聞く事にした

フォセカ「このまま王宮に向かえば良いんですね……？」

ボロニア「そうだ。しくじるなよ？」の国の王『アルトロ』は我々の計画に必要不可欠の存在だからな……」

17話 20年（後書き）

一つの島でじいじまで長く暮らすとは想にもしなかつたや……（^\_^；

前回から時間が空いてしまいましたね……

今から直証つとります

私情により、次の更新までまた少し間が空いてしまいます（ - - ;

)

十城門十

プシュウ　　プシュウ

ドサツ　　ドサツ

ディモル「つたぐ、王宮を守る門番がこんな簡単にオネンネしちまつて良いのかよ……」

フォセカ「おかげで楽にすんだから良かつたじやないか……」

半ば呆れた様に呟くディモル。

現在2人は王宮に入る為、門番に吹き矢で即効性睡眠薬を撃ち込んだ所である。

普段なら王宮に一般人もほぼ自由に入り出来るのだが、何せフリツ・シユ島に海賊が入り込んだと噂が立っている今はそう簡単に人を入れる訳も無く、ディモルとフオセカが『さつき入島したから国王に挨拶をしたい』などと門番に言つても、『今は無理だ！　後にしろ！』の一点張り

ならば、門番を眠らせようと簡単に答えが出たのだ。何故『即効性睡眠薬仕込みの吹き矢』を持っていたかと言つて、この展開が予想出来ていたからとしか言いようがない

ディモル「さて、フリツ・シユ王宮にお邪魔させて頂きますか……」

フオセカ「ちょうど食事時だからな、面倒だ……」

城門を開け、軽く『お邪魔します』と囁きながら王宮に入つて行く2人

見られた。明らかに怪しいと言うか、初めて見る顔だな何て思つているのが手に取る様に分かりやすい顔で見られた

ディモル「つたぐ、流石に歓迎はして貰えないよね～」

フォセカ「当然だ……」

軽く話しかけてると、2人に執事が近づいて来た

ペディ「えへ、本日はフリツシュ王宮に何かご用でも？」

フォセカ「先程この島にやつて来まして、是非アルトロ国王に一度お目にかかりたいと思いまして……」

正直流れる空気はかなり変なものだった。この2人がどこと無く特殊な雰囲気を放っているのだ。普段やって来る一般人とは明らかに違うのだが、門番がこの2人を通したのならば大丈夫とは完全に思わず、半信半疑の状態でとりあえずは国王のもとへ通す事にした。当然ペディが目を光らせた状態ではあるが……

ペディ「……なるほど。そういう事でしたか、ビリゼモ「チラく」

ディモル「ありがとうございます（完全に怪しまれてるな……）」

その後、ペディ先導でアルトロのもとへ向かつた。目の前にあつた大きな階段を上ると、アルトロを描いた大きな油絵が飾つており、『意外とハンサムな王だな……』等と2人は考え、絵を見つめた

ペディ「……おや? どうされましたか?」

フオセカ「いえ、素晴らしい絵なのでつい見取れてしまいました…」

ペディ「ああ、この絵はある国で高名な『ジヨット』と書いた画家の方に依頼して描いていただいた物で、『』やっています。アルトロ様も大事にされているのですよ?」

ディモル「『ジヨット』……聞いた事あるな……」

ペディ「ほお、ご存知でしたか。ですが、何も不思議な事では無いのかも知れませんね……彼の絵は世の芸術に革命を起こしたと言われる程の物ですからね」

飾つてあった絵画について話していると、気付けばアルトロがい

ると言つ部屋の扉の前に到着していた。

ペディ「アルトロ様は」の広間にいらつしゃいます

言い終えた後、すぐに扉をゆっくりと開くと、非常に広い空間が広がっていて、真ん中にはレッドカーペットが敷かれており、その奥に視線をやると、大きく豪華な椅子にドッカリと座っているアルトロがいた

ペディ「アルトロ様、アルトロ様にお会いしたいと言つお客人をお連れしました」

アルトロ「ご苦労様、2人共よくフリッシュ島に来てくれたね」

ディモル「お初お目に掛かります。ディモルと申します」

フォセカ「私はフォセカと申します」

アルトロ「そうかそうか、よろしくね」

『何てまあ国王らしくない国王だ』何て考えていると、一つのくだらない疑問が浮かんだので、直接聞いてみる事にした

ディモル「ところで、こんな大きな広間に一人椅子に座つていらつしやいますが……一体何を?」

アルトロ「ああ、この椅子が一番柔らかくて貯持れ良こし、凄く落ち着くんだ」

ディモル「(つたぐ、めひやへひや単純じやないか……)」

何か理由があるのかと思つて聞きはしたが、あまりに単純な理由に呆れてしまった

フォセカ「それはそりと、アルトロ王。本田私達が参上させていた  
だいた理由は実を言いますと、もう一つござります」

フォセカの言い出した言葉を聞き、アルトロは『ん？ 何だい？』  
何て優しい言葉を、ペディには『何だ、挨拶だけじゃ無いのか』等と  
頭をよぎり、ほんの少し警戒体制に入り、ディモルに関して言えば、  
やつとか何て顔をしている

ディモル「我々に是非ご協力願いたいのです。……『アルトロ』」

アルトロ「……えつー？」

ペディ「……！」

力チャリ

ディモルが懐から拳銃を出してアルトロに向かた

アルトロ「な、何を……！？」

アルトロは驚きで固まつてしまつていて。ペディはアルトロの身を守りたいが、自分が動けばディモルが発砲してしまう可能性がある為にうごけないでいる

ディモル「つたく、ここまで來るのに面倒だつたぜ……。別段大変な事は無かつたがな」

アルトロ「さ、協力とは何の事だ……？」

ディモル「自分で分かつてんんだり? アルトロ国王様?」

アルトロ「無理だよ……」んな口は来ると思っていたから以前から決めていたんだ……」

フォセカ「何をだ……?」

アルトロ「自殺するよ」

カチヤリ

何とアルトロが懐から拳銃を取り出し、自分の頭にあて、引き金

に指をかけた……が、ディモルがにたゞと不適な笑みを浮かべた

アルトロ「何を笑ってる……？」

ディモル「ジユフフフフ！ つたく、正義感の強いこって……だが、残念だな、お前が引き金を引く事は出来ない」

アルトロ「どうこう事だ……？」

ディモル「ジユフフフフ！ こいつ言えば分かるか？」ト・ロ・ス・君』

アルトロ「何！？ まさか、お前！」

ペティ「ト、トロス様！？」

ディモル「ジユフフフフフ！ つたく、良いねえ、察しが良くて  
！ そう、トロス王子に監視をつけた。もし、お前が引き金を引け  
ば……BAN！ ってなー？」

アルトロ「くつ……！ 分かつた……協力する……」

ペティ「アルトロ様……」

ディモル「ジユフフフフフ！ よし、成立だ！ これからはその  
『ミエミヒの実』の力を我々の為に使え！ ジュフフフフフ！」

『吹き矢』

何か凄くひかれます(笑)  
フレンドパークの吹き矢が気持ち良さそうだからでしょうか(^ー^)

## 1-9話 塞（前書き）

やはつこの時期はあまり携帯をいじれませんね……（^—^・）

多年明け後なら安定して投稿出来ると思こますので、今は『』勘弁してください?

ディモル「ジユフフフフ！ こんなにアッサリ行くとは思わなか  
つたぜ」

ディモル「強い正義感も息子がかかれば形無しだな……」

現在「」はディモルとフォセカが乗ってきた船の上

ディモル「ジユフフフフ！ これで俺達の組織が大きな躍進を遂  
げたぜ」

フォセカ「『ミヒミヒ』の実』か……」

## 十ノ実十

この実を食べると、悪魔の実の場所を感じ取る事が出来るようになる（距離は馴れ等によつて伸びす事が可能）。

アルトロの場合は島に入るだけで、悪魔の実の存在を感じ取る事が出来る（場所の特定は、アルトロを中心に半径3Km内に悪魔の実が入ると可能になる）。

更には、その悪魔の実を食べる事によつて得られる力も知る事が出来る。

~~~~~

ディモル「ジユフフフフ！ 悪魔の実の確保は最重要事項の一つ。アルトロの存在は誰もが喉から両手が出る程欲しいからな……。おれ達で確保出来て良かつたぜ……」

アルトロ「私は一体何をやっているんだ……」

ペディ「アルトロ様……あの場合は致し方ありません。トロス様の命を握られでは……」

アルトロは王宮に残っていた。ディモルもフォセカもアルトロをフロックス・レボルートに勧誘しに来たが、例え小さいとは言え、一国の王がある日を境に突然消えた何て話題になる様な馬鹿はしたくないのである。アルトロがいなくなつても何ら不思議な事が無い様な状態にまで環境を整えるまでアルトロを連れ出す事は出来ないのだ。

ペディ「アルトロ様、海軍に連絡をしましょ」

アルトロ「し、しかし……」の島にあった電伝虫は全て奴らに捕ら
れてしまつた

そう、ディモルとフォセカはアルトロが助けを呼べない様に連絡
の手段を絶つっていたのだ。

ペディ「近くの海軍支部へ兵を派遣致しましょ」

アルトロ「だが、海も奴等に見張られてゐるだらう。一体どうせつ
て……」

ペディ「鳥です。鳥に文を運んで貰いましょう」

アルトロ「なるほど、すっかり忘れてたな、その方法は……。よし、
私は文を書いてくる。ペディは文を運ばせる鳥の準備をしていく
れるか?」

ペディ「承知致しました」

~~~~~

アルトロ「ふむ、この時間帯ならいつかは見つけられる事はないだ  
ろ？」

現在は、辺りも真っ暗で、何かを見ようとすれば目を細めてしまつだらう程の夜である

ペディ「鳥も黒を選びました。余程の事が無ければ必ず海軍まで文  
を届けてくれるでしょう」

アルトロ「ふむ、なり、早速飛ばさうよ

ペディ「承知致しました」

バサバサ

ペディが両掌で包んでいた黒い鳥を天に向けて高く掲げた。軽く  
2～3羽ばたいた後に、ペディの腕の重みは無くなり、腕を降ろした

アルトロ「無事にたどり着いてくれよ……」

ペディ「アルトロ様、風が出てきました。お部屋へ戻りましょう」

アルトロ「うん」

十船十

ディモル「ジユフフフフフ！ やつぱりな……」

パン

ドサツ

フォセカ「やはり、応援を呼ばうとするか……」

ディモルとフォセカの目の前には、撃ち落とされ、既に息絶えた  
黒い鳥が無惨に倒れていた

ディモル「ジユフフフフ！ つたく、いくら夜に紛れようつたつておれの『田』は胡麻かせないぜ？ ジユフフフフ！」

フォセカ「おい！ 誰でも良い！ 1人来い……！」

フォセカが適当な船員を1人呼び出した。

船員「はい！ 何でしうか船長？」

フォセカ「この鳥を城門の前に置いてこい……」

船員「分かりやした。すぐに行つてきやす」

黒い鳥を適当な袋に詰め、一言のメッセージを付けて、船員が船を降り、王宮の方向へ歩いて行く

ディモル「ジユフフフフフ！ つたぐ、やる事がエグいねえ～」

十日富十

アルトロ「……

ペティ「こんな……」

『次は無い』

黒い鳥を飛ばした翌朝の事。城門前の掃除に出たメイドが何か袋を見つけ、執事であるペディにその袋を渡した。ペディは嫌な予感を感じ、すぐにアルトロのいる王室へ向かってその袋の中身と共に見た所である

袋に詰められた無惨な死体に白で書かれた簡潔な文字が、2人に信じ難い現実を突き付ける

アルトロ「まさか、あの暗闇で正確にこの鳥を撃ち抜いたのか！？」

ペディ「彼等の力は我々が思う以上なのでしょうか……」

自分の推した案がここまでアッサリと破られたペディは何とも言えない顔をしている

アルトロ「私は彼等の言つ事を聞くしか無いのか……？」

海軍に応援も呼べない。一つの海賊を相手にする力もあると言え  
ばあるが、正直な所、ディモルとフォセカには何故か軍隊を総動員さ  
せても勝てる様子が全く想像出来ない不吉さがある。それに、下手  
に盾突いてトロスや島を襲われればそれこそ本末転倒である

ペディ「アルトロ様……」

これから2人は打開策が思い付かず、何も身動きが取れないまま、  
悪戯に日数を過ごしてしまつ事になる

19話 塞（後書き）

今回の話は少し焦った感じが出てる気がします。（^\_^;）

少し……いや~……かなり……か?

えと、『めんなさい』。

私は学生でありますし、更に冬休み中でありますし、更に宿題がたつ  
ふつと出でていまして、更に宿題がまだ全然終わっていない訳で……？

つまり、翻訳すると……宿題に専念するので、しばらく更新出来ません？

量、多かつたんですね今回……

十五室十

アルトロ「ペディ、私は島を捨てる……」

ペディ「……」

黒い鳥に海軍宛ての文章を届けて貰う事に失敗してから、5日が経過していた

身動きが取れずにただ燻つていたが、2人の頭にはいつも最悪な2択が浮かんでいた

『この島を取るか』

ディモルとフォセカの素性は一切判明しないが、これだけは言える。悪魔の実を大量に、確実に確保出来る上、その実の能力を事前に知ることが出来る為、強力な悪魔の実だけを厳選して能力を手に入れる様になる時点で、その『海賊団』又は『組織』は著しく拡大化する。

そして、拡大化した者達が考える事はたかが知れている。

まず間違いなく世界に多大な悪影響を及ぼすだろう。

そこで、アルトロの考えていた『自殺』だが、これを実行に移したならば、ディモルとフォセカは逆上してこのフリツシユ島を襲撃してしまう可能性が多大にある。間違いなくトロスも殺されるだろう。

余りに重過ぎる2択にがんじ絡め状態だったが、たった今アルト

口がどちらかを選択したのだ。

アルトロ「ペディ、『トロス』を頼んだよ？ それと、トロスに渡したい物があるから、代わりにそれを渡してくれないか？」

ペディ「……はっ！ 承知致しました……」

アルトロの言葉の意味する所を察したペディは絶え絶えとした返事になってしまっているが、凜々しく、力強い言葉を返す

「最期にトロスに会わないのか？」と、質問したい気持ちも湧きはしたが、会えば決心が鈍ると判断しての事だと呟つのは予想が出来たので、口には出わず、胸にしまい込んだ

アルトロ「ありがとうね、ペディ……」

（）

十後田十

トロス「ただいま～！ 皆久しぶりだな～！」

元気に声を上げ、約10日ぶりに帰ってきたトロスに、メイドは皆複雑な表情で挨拶をする。

トロス「（……なんだ？ 皆何か表情が固いな……？）」

トロスがちょっとした違和感を感じ、困惑していると、1回の階段横にあるペティの私室から、ペティがトロスのもとへやって来た。

ペティ「お帰りなさいませ、トロス様」

トロス「久しぶり、ペティ。何か皆少し変なんだけど、何かあつたのか……？」

無邪気に聞いて来るトロスにペティも躊躇いを隠す事は出来ないが、ペティはトロスを王室へ行く様に促した

ペティ「トロス様、私と共に王室へいらっしゃって下さいませんか?」

トロス「ん?　ん、ああ……」

ペティ「では、参りましょ!」

アルトロの自殺の件を、メイド達には、ペティが直々に伝えた。  
『不慮の事故』として。

ディモルとフォセカから圧力を掛けられている事と、アルトロの『ミヒミヒの実』の能力を有する事実を知っているのは、ペティとアルトロのみ。説明するにしても、どこから噂が流れて島民に伝わってしまう事はあまり望ましくない事。

それなら、無難な話にすり替えて皆に知らせてしまった方が、騒ぎは小さいだろ?と予測して、王宮の者には既に知らせているのだ。

ただ、当然ながら、わざわざディモルとフォセカにアルトロの死を伝える様な馬鹿はするはずも無く、まだ王宮内部のみの者にしか、知ることは許していない。もしも、誰かが他言した場合は死刑とまで言つて、情報が漏れる事を防いでいるが、正直な所島民にしられるのは時間の問題だろ?と思つし、ディモルとフォセカが察するのは更に早いだろ?。なにせ、中々小刻みにやつて来るのだから。

～～～

トロス「……う、嘘だろ……？」

ペディ「残念ながら、事実でござります……」

王室にやつて来たトロスにペディはアルトロからの手紙を渡したのだ。しかし、手紙と言つには余りに短く、更に、書かれていた内容は『ゴメン』『おどろいたよね?』等、あまり内容があるとは思えない事ばかりが書かれていた。

トロス「どういう事だよ……？　こんな手紙を残したってことは、自殺なのかー？」

まさか、メイド達から感じる違和感の正体がここまで自分にショックを与える物とは想像も出来なかつたトロスだが、父親が自分に

残した物はこれだけかと、辺りをキョロキョロと見渡している。

ペティ「トロス様、口チラを……」

ペティがトロスに紙を渡した。

トロス「これは、海図か……？」

ペティ「はい、ですが……ただの海図ではありません

トロス「何かメモが書いてあるな……」

アルトロが残した物は海図だった。しかし、海図と呼ぶにはあまりに杜撰な作りで、寸法も糞も無い、悪戯書きの様な物だったが、

アルトロのメモによつて、これの価値

は跳ね上がつた。

トロス「このメモつてもしかして、悪魔の実の名前か……？」

ペディ「はい、アルトロ様が発見された悪魔の実の場所を示した海図でござります」

トロス「父さんが発見した……？　1個や2個じゃないぞ！？　こんなにバンバン見つかるもんじゃ無いだろ！？　悪魔の実つてのは！？」

疑問に思つのも仕方ない話で、示された悪魔の実は10個近くもあつたのだ。言われるだろうと予想していたペディは、アルトロのミヒミヒの実の能力と、自殺しなければいけなくなつたきさつをトロスに説明する。

～～～

ペディの説明の最中、かなり驚いた様子を見せていたトロスだが、黙つて聞いていた。

トロス「……」

突然のアルトロの死に、まだ実感が沸いていなかつたトロスだったが、ペディの説明を聞き、急激にアルトロの死を感じたのだろう。ペディの話が終わる頃には、声も出さずに目尻から涙が伝つていた。

ペディ「トロス様……」

トロスの涙を見て、何とも言い難い嫌な気持ちになつたペディが、

つい声を掛けるが、何も言える事は見つからずに2人を沈黙が包んだ。

トロス「ペティおれは部屋に戻る……」

沈黙を破ったのはトロスの声で、言い終わらない内に扉へ歩きだしていたトロスに、ペティは黙つて頭を下げて見送っていた

## 20話 遺（後書き）

まづい……頭の中で構想していた『話』が、書いてる内に自然と  
変わつて行つて全くの別物になつてきている？

まあ、これはこれで面白そうな感じはしますが……

## 2-1話 海図（前書き）

お久しぶりです。  
やっと普通に投稿出来る様になりました  
(^\_-^;)

十船十

ディモル「何？ 演説でアルトロが出てこなかつた？ つたく、や  
つぱしな……」

報告を終えた船員はディモルに「下がつて良いぜ？」と言われ、  
敬礼して自分の定位位置に戻つて行つた。

アルトロは何の用事も無くても用に2度は民衆の前で演説を行つ  
ていたのだ。正直な所無駄話が多くを占めていたのだが、そんな王  
だからこそ人気は高かつた。

「フォセカ「アルトロの代わりにトロスがねえ……」

「ディモル「死んだな……」

「ディモルはこうなる事は予想していた。最高の一例として

「ディモル「ジユフフフフフフ！ これで敵対する勢力の拡大は無いな」

「フロックス・レボルート」の勢力はかなりの物なのだろう。フロックス・レボルートの勢力拡大よりも敵対する勢力拡大を防ぐのがどちらかと言えば2人の目的だったのだ。

「ディモル「恐らくだがなあ」、アルトロは自身が発見した悪魔の実を記した何かを残したはず。今からそいつを頂きに行くぜ？ 無きや無いで慣れようぜ」

フォセカ「何か当たりの実があれば良いがな……」

2人して重い腰を上げ「あ～、怠い……」なんて咳きながら王宮へ歩きだした。

王宮+

ペティ「先程の演説でアルトロ様が御出席ならなかつた事で、奴らには感ずかれた事でしょう。早ければ今すぐここにでもここにやって来るかもしません」

トロス「ああ……そうだな。まあ、おれは逃げるから、ペティもついて来てくれ

ペディ「承知致しました」

トロス「ティモルとフォセ力を迎撃ちたい気持ちは十分にあるけど、今のおれじゃ海賊相手に戦う力なんか全く無い。あいつ等に復讐するのは今じゃない」

とりあえず、今トロスの頭の大半を占める思考は、間接的とは言え、父親を殺された事に対する復讐がほとんどだ

ほんと交流の無かつた父親だったが、いざいなくなってしまふとその存在の大きさに気付かれるものだと今更になつて考えていた

しかし、頭は冷静に働いている。逃げると言つたは良いが、彼等に見つからずに隠れる事など出来る自信は到底ない。

島を出ることは出来ない。文を届ける為の黒い鳥が射殺されるほどガッチリと監視されているからだ。かと云つて島の中で逃げ回つてはいつかは必ず見付かる。当然戦うなんてのは論外だ。

トロス「（ビリヤー良いのかね）。八方塞がりだ……」

頭に手の甲を当て、悩むトロスだが、困った物で解決策はサッパリと浮かばない。半分無意識にペディヘッドをやるが、同じく悩んでいる様子。期待通りの答えは望めそうにない

だからといって諦めは出来ない。父親の復讐を決意したトロスは厳しい表情で爪噛んでいた。

トロス「 つ痛！」

指先に感じる鋭い痛みと共に鉄に似た味が口の中に広がる。知らぬ間に時間は経っていたらしい。親指の爪は短くなり、肉を食いちぎってしまった様だ。自分に爪を噛む癖は無いと思っていたが、どうやら本当に悩んでいる時は口元に指が行くらしいと、どうでもいい事ばかりが頭をよぎる。

頭を働かせる事に疲れたのかも知れない。どんどんと投げやりな思考になつていき、いつそ真正面から歯向かつて顔に傷一つ付けて殺されようかなんて危な過ぎる物が最終的に頭に残つた。

いけない いけない と頭を軽く叩いて正気に戻ろうとするが、そんなことで簡単に頭が冴えるなら苦労はしない。結局は軽い頭痛を残して腕を降ろした脱力感と同時に床に座り込みそうになるのを、少し体に力を込めて防いだり、再び立ち尽くすだけになつてしまつた。

ペディ「トロス様……ゲニウスに助けを求めましょ」

トロス「ゲニウスに!?

心底驚いた様だ。目を張り、固まっている。

トロス「でも、どうやってゲニウスに助けを…？」

当然ゲニウスが自分達を助ける義理は無い。利益も無いし、自分達を助けたいと考える程の交流も無い。第一ゲニウスは守護鳥と呼ばれる程度には特別で人語を理解してもいるようだが、それでも鳥は鳥だ。どうしても自分達の助けになってくれるとは考え難い。

ペディ「奴らにモンキー・ポッドを攻撃させるのです」

トロス「それは……！？」

軽く盲点だった。ゲニウスに直接守つてもらわなくとも、ディモルとフォセカをモンキー・ポッドに害を与える存在だと認識させれば、それはもうゲニウスを味方につけたも同然の話。真っ暗だった世界に1つの眩しい光が真っすぐと注した様な気になるが、あくまでか細い光、少しでも不手際があれば簡単に再び暗闇の世界に戻って仕

舞うだらつ事は百も承知、多少緩む頬とは正反対にガツチリと引き締まる『氣』をひしひしと感じていた。そうと決まればトロスはすぐさまモンキー・ポッドの元へ向かうとペティに伝えた。

ペティもすぐさま頭を下げ、最低限の準備をするから10分だけ時間をくれとトロスに伝え、私室の方向へ走つて行つた。

トロスも多少出来た時間に何かをしようと思ったは良いが、正直な所することが無いため、結局はアルトロの残した手紙と海図を眺める事にした。

#### †モンキー・ポッド†

あれから2人は準備を終えてモンキー・ポッドの回りを囲む湖の辺りへ来ていた。

太陽の陽射しのほとんどをカットしてしまつ程にびっしりと枝を広げているために、モンキー・ポッドの真下は暗めになつてゐるが、

流石に多少の木漏れ日は注しているため、湖に反射した光がキラキラと輝き、2人の目を軽く刺激している。

本当に綺麗な光景なのだが、今の2人の状況下ではそんな事を考える余裕は無い。2人の目に入るのはただ悠然と立ち続ける立派な大木のみである。

トロス「にしても、本当に来るのか？　あいつらは……ただ来るつて思い込んでるだけの気もしてきたぜ……」

確かにそうだ。ディモルとフォセカが来るというのは2人のただの推測なのだ。ディモルとフォセカに何か動きがあったと確認したわけでは無いのだ。

ペディ「来なければ来ないで助かつたと思いましょう」

トロス「そうだな」

ペディの言う通りだと心から思った。やはり奴らの事を憎む気持ちも十分本物なのだが、怯えている気持ちも十分に本物なのだと少し思つた。これを実感した時にトロスは来ないで欲しいといつ気持ちが初めて沸いて来たのだが

プスッ！

トロスとペディの間を縫う様に何かが飛んでいき、モンキー・ポッドに小さな穴が空いた。

トロス「な、何だ！？」

ペディが即座にモンキー・ポッドに穴を空けた物を確認する。

ペティ「弾です。拳銃の……」

トロス「弾……あいつ等か！？」

トロスが焦つて周りをキヨロキヨロと見渡すが誰もいない。

「ジユフフフフフフ！ つたく、拳銃とは違うな……俺はスナイパーだ」

「スナイパーとは少し言い難いがな……」

2人は焦つて声のした方を見た。

トロス「あいつらか!? ディモルとフオセカつてのは! ? なん  
でだ! さつき見渡した時はいなかつたぞ! ?」

そう。モンキー・ポッズと湖ぐらいしか見当たらない開けた場所だから数秒目を離したからといってそんなにポンと現れる事など出来る物ではない

「デイモル「ジユフフフフフフ！ つたく、そんな怖い顔するなつて。おれ達はただ欲しい物があるだけ何だから！」

何でかはわからない。わからないけど2人はすぐに察した。  
モルとフォセカは『海図』を狙つていると  
**ディ**



## 2-1話 海図（後書き）

後書きで書くこといつも迷います( ^ \_ ^ ; )

無いと寂しい気がするので、空けたくは無いのですが、何分書くことが……

## 22話 新（前書き）

少し前にある小説を買いました。

やはり、文章の力をつけるなら小説を読んで参考にするのが一番に決まってる！

って感じで読んで見ましたが……いやー、自分の文章の拙さを改めて寒感させられました（^\_^;）

「デイモル『ジユフフフフフフ！』つたく、お前達は嘘をつけないタイプだな？ はっきり出てるぜ？」顔に『あります』ってな

「ふんつ、ディモルに隠し事を出来ると思わない方がいい。こいつは異常だ」

適当な発言ではない。普段の会話では全く表情を変えないフォセ力だが、今までの嫌な思いででも頭に浮かんだのだろう。眉が密かにぴくぴくとしているのが何とか確認出来た。余程見透かされるのだろう。

トロス「……おれ達に何の様だ?」

聞く必要性も無いが、この質問はいつこうシチューションでの定石つてものだ。深いことは考えずにただ単に聞いてみた。

ディモルはトロスの質問に氣怠そうにしながらも答える事はした。

ディモル「つたく、分かつてんだろ……？ 死んだお前の親父がか残したはずだよな？ 悪魔の実のありかを記した『何か』をな……。戴きに来たぜ？ その何かをな……」

やはり、事前にばれていた事を察知していたからであろう。驚きはしたもの、大きな物では無かった。一切表情は変えずに「まかす事にした。ただ、ごまかせるとは端から思っていない。とりあえず決まり文句として『何の事だ？』と言つてやつた。

ディモル「ジユフフフフフフ！ つたく、嘘はいけないな……。  
『それ』さえ渡せばお前達に害は加えないから、な？ こつちに渡せつてば」「

不吉に笑いながら言つた「ディモルは何か悍ましい雰囲気を醸し出していた。しかし、これは本音である。船上では暴れよう等と言つたものの、正直それをやつてしまつとリスクしかないのだ。ここを去る時点でフリッショ島の監視は解かれる。つまりを言つと、海軍に連絡し放題である。ディモルとフォセカも別に海軍に追われる自体は慣れているし、返り討ちにすることも難しくは無い。だが、フロックス・レボルートの存在を海軍に感づかれて仕舞うのが怖いのだ。確かに非常に大きな組織であるのだが、表立った活動自体は何もしていない為、海軍もフロックス・レボルートのしつぽを見つけたは良いが、本体の確認に手を掛けている状態なのである。それを自分達が原因で、海軍にフロックス・レボルートの存在を確かな物にして仕舞うのは避けたい自体である。つまりは、手出ししないのではなく、出来ないので。今2人が捕まると、フロックス・レボルートの存在を裏付ける証拠がダッブリなのだ。

トロス「親父の仇にわざわざプレゼントする馬鹿がどこのいるんだよー? 絶対にお前等には渡さないからな!」

ディモル「あー、吠えんなよ鬱陶しい……。つたく、ま、お前の言う通りだわな、わざわざおれ等何かにプレゼントしてくれる訳がない。だ・か・ら・く、こっちだつて素敵な条件を出したじやないかよ。『何もない』ってな……」

又もや不吉な笑みで語りかけるティモル。トロスはこの笑みが苦手らしい。この笑みを見る度に体中の肌がゾワリと震えるのを感じていた。

トロス「確かに素敵な条件だけどな、信憑性の無い言葉は信じらんねえな……」

冷静を装つて毅然としてはいるが、内面はとてつと蛇に睨まれた蛙状態である。しかし、これは致し方ない事だろう。逆に言うなら、今まで平和に暮らしていた子供がいきなり海賊の前で形だけとは言え、堂々としている事こそが異常な事態であるだらう。

「ディモル「つたぐ、面倒だな。用心深い奴ってのは……ま、いつか~。2人なら殺しちゃつても……な?」

トロス「…………!？」

ディモルの言葉にトロスとペティは体の震えを禁じ得なかつた。まるで、万の蜘蛛が一斉に体中をはいざり回つたかのような悍ましい寒気が2人を襲つた後は何も出来なかつた。情けなくも、2人共腰を抜かし、地べたに尻をくつづけてしまつたのだ。立とうとも膝のは笑いは止まらない。

ディモル「ジユフフフフフフ！ つたく、ちょこっとびびらした  
らこの様だぜ？ 情けないね～」

フォセカ「無理を言つな、並の海賊もお前の言葉にこの様になる奴  
は珍しくないだろつ……」

ディモル「ジユフフフフフフ！ まあな、そろそろイジメも止め  
にして楽にしてやるか。殺しても適当に隠してやりや失踪で済むだ  
ろ」

改めて2人の顔を見たディモルは一呼吸おいて懐から拳銃を取り出した。ディモルが引き金に指を当て、2人へ向けた時にトロスは

つい目を閉じて最後を覚悟した

「ぐぎやあああああああ！」

ディモル「な、何だあいつ！　うおー？」

フォセカ「な、ディモル！」

目をつぶっていたため何が起きたか最初は分からなかつたが、すぐに分かつた。聞こえていた音・声が何からはつせられているかを理解したのだ。その瞬間から体を蝕んだ恐怖は和らぎ、代わりにほんの少しの安堵が訪れると、自然に固く閉じられた瞼を見開いていた。

トロス「ゲニウス！」

目に映った光景を軽く説明すると、ゲニウスに襲われ慌てふためいている『ティモル』と、その『ティモル』の手から放り出され、ちょうど宙を舞っている拳銃に、啞然としたフォセカに、今だ固まっているペディ。

恐らくゲニウスに2人を助けているという考えは無いだろう。『ティモル』が再び拳銃を出した為、完全に『モンキー・ポッド』へ害を為す者として認識したから排除する。それのみであろう。

ただ、ゲニウスが与えてくれたこの最大のチャンスを逃すことは出来ない。

先程宙を舞つた拳銃のもとヘトロスが走つた。

トロス「っしゃあー！」

トロスが拳銃を手にした瞬間、フォセカはトロスに気付いた様だ。腰に挿した刀を抜き、トロス目掛け走つて来た。

フォセカのやらんとしている事を察したペディは、フォセカ目掛け体ごとぶつけに行つた。トロスはそれを尻目にまだゲニウスに襲われているティモルに照準を合わせようと拳銃を震えた腕で構える。

「何だこの鳥はー?」

ゲニウスの爪に引っ搔かれ体中の服は破れ生傷だらけになつてい  
る。普段のティモルならここまで一方的にやられる事は無いのだろ  
うが、なにせ唐突過ぎた。半ばパニックに陥りかけているため、拳  
銃を構えたトロスに気付くのが一瞬遅れた。

「(……ー? しまつー あいつ、何構えてやがるー)」

ゲニウスに襲われている事は田もくれず、トロスに向かつて走つて来るディモルにビビりながらも、引き金にかけた指に力を込めるが、ついディモルの恐怖に一瞬だけ飲み込まれてしまつた間に、あまりにも大きな問題を頭から放り出してしまつていた。

フォセカ「うおおおおおおおおお…！」

トロス「なー？」

そう、ペティに突つ込まれ、一瞬だけ体制を崩したフォセカだったが、すぐに腕で払い、トロスに突つ込んで来ていた。

トロス「（しまつた！　まずい！　早く撃たなきやー）」

フォセカ「うおおおおおおおお…！」

パン

ズバツ！

22話 新(後書き)

うへん……もっと文章に説得力や分かりやすさが欲しい（^—^；

)

## 23話　再会（おおはなわ）

せんの少しだけ文章の書き方を教えました。

多分、前よりは見やすくなったんじゃないかなあ……？

十五回十

トロス「…………白いなあ～…………」

ペティ「おおー！　お皿覚めになられましたか！　良かつた…………」

トロス「…………ペティ？　」「は、ベッド…………？」  
医務室か  
？」

トロスは今ベッドに横になつており、真つ白い天井を見上げる形になつてゐる。

トロス「ペティ…………どうなつたんだ？　あの後は…………？」

トロスがペティの方向に首だけを傾けて尋ねる。

ペティは向いていた林檎の手を止め、ほんの少し固まつた後、再び林檎を回しだした。

ペディ「あの後、トロス様の放った拳銃の弾は見事デイモルの腹部に命中しました。弾によつて怯んだデイモルは襲われていたゲニウスによつて致命傷とも言える傷を負い、この島を去りました。ゲニウスは彼等の船を追つて行つたみたいですね……」

トロスが無我夢中で放つた弾は、デイモルの右腹部をえぐり、一瞬の隙を生んだ。その隙にゲニウスがデイモルの体を爪で串刺しにした。急所は外れていたが、そんなことは関係無いと、溢れる血が警告していた。すぐに治療をしないと出血多量で死に陥つて仕舞うのは、素人目にも明らかだつたから。

トロス「そつか……それで、おれがフォセカに斬られたんだな……」

……

ペディ「申し訳ございません……私が不甲斐無いばかりに……」

トロス「気にすんな、命があるだけ儲けもんだ」

拳を握りしめ、頭を下げるペディにトロスは手をヒラヒラと振つて言葉を返す。少しでもペディに掛かる心の負担を軽減するために、語調は低くも明るくもせず、面倒臭そうな・適当な感じで答えてやり、違う話題を振つた。

トロス「んで、おれはどんなくらい寝てたんだ?」

ペディ「3日間です」

トロス「3日…? もしかして、危なかつた? おれ……?」

田を丸くして尋ねる。まさか、日を跨いでるのは思っていなかつた様だ。

ペディ「はい。一時は覚悟までしました……」

トロス「…………そっか…………あの後、あいつらは何もしないで帰つたのか?」

少し自分達が生きてる事に疑問を覚えたトロスがペディに聞く。

ペディ「はい。ティモルの命を優先したのでしょうか。私達など田もくればに帰つて行きました」

トロス「おれ達を殺す暇が無いほどだったのか?」

ペディ「はい。複数ヶ所から流れ出ていました。あの勢いなら船に戻つても助かるかどうかは分かりません」

トロス「なら…… もう、安心していいのか?」

ペディ「恐らくは大丈夫です。この島ではすでに大々的に指名手配しておりますので、医者に訪ねても治療は受けられないでしょう」

トロスは自分の発した言葉に少し驚いていたが、すぐに納得する。

トロス（なんだよ……復讐の失敗なんかより、自分が助かつた事の嬉しさの方が圧倒的に強いんじやないか……）

自分の本音に気付いて自嘲氣味に笑うトロスにペディは疑問符を浮かべたが、触れない方が良いと判断し、そつとしておくことにした。

トロス（だが、必ず復讐は果たすぞ……今のおれじゃ何も出来ない。準備が必要だ……）

十船十

ディモル「……つたく、酔つたぜ……」

フォセカ「3日前の怪我から随分と船酔いになりやすくなつたな……」

「……」

「うおつ！？」  
「かけるな！？」

滝の様に流れ出るティモルのゲ

デイモル「はあ……はあ」

「つたく、大丈夫何だろうなあ」……怖くなつてきたぜ……

「フォセカ「ん」、動物の爪や牙なんかには細菌が大量に住み着いているらしいが……あたつたか……？」

「？」  
デイモル「つたく、洒落なんねえぜ……何だ、病氣か？ おれは

軽くうんざりとした表情を浮かべながら言つテイモルだが、フォセ力は割と真面目な顔になつてゐる。

「まだ決まつた訳じや無いが、用心した方が良い。内面の崩壊は知らず知らずに進むものだ……」

「デイモル「つたく、とりあえずは…………毎日牛乳か…………？」

}{}

王宮

デイモル「つたく、大変だつたんだぜ？あの後ゲーウスから感染したばい菌にやられて4年も活動出来なかつたんだ」

「フォセカ」「その間のディモルはゲ  
臭くて仕方なかつた……」

トロス「ふん、人の父親殺しといてそんなもんで大変なんて言われても同情は出来ないな」

表情に怒りは見えないが、腹の中は煮え繰り返っているトロス。20年ぶりの仇に再開したのだから内心は穏やかなはずがない。

自分の息子も復讐の道具として扱つて仕舞つほど、深い恨みなのだ。それでも、ただ力任せの方法を取らなかつたのは、直に対峙して知つたディモルの圧倒的な恐怖と、僅かの理性によるものだろう。

ディモル「ジユフフフフフフー つたく、連れないと、トロス君！ これでもまだ船酔いしやすいのは治つちゃいないんだぜー？」

一種の癖なのだろう。相変わらず、「にたー」と言つ嫌な笑顔を浮かべながら声をかける。

フオセカ「一時期に比べると随分とマシにはなつたがな……」

ディモル「ジユフフフフフフー あの頃は吐きすぎで死ぬかと思つたぜ！」

〔冗談にしては軽く重い話をするディモルに対し、フオセカが少しだけ顔を引き締め、トロスに言つた。〕

フオセカ「そういえば、『テルから聞いたぞ？ お前の息子』『プルチ』が今モンキー・ポッドを登つていると……」

ディモル「ジユフフフフフフー これじゃあ、場所を聞かなくて教えてくれてるようなもんだな！ 例の実はモンキー・ポッドの

上にあるんだよなあ～？

トロスは諦めた様な顔を浮かべ、横に並んだペティは黙つて、  
モルのにやけ顔を見ていた。

### トロスは諦めた様な顔を浮かべ、横に並んだペティは黙つて、 モルのにやけ顔を見ていた。

「……………」

フルチ「…………戻つて来てやつたで、なあ、ゲーウス？ 次は負けん  
ぞ、覚悟じいぢや～。ゆきと策はあるからなあ…………」

「……………」

濡れ髪のカリブー

個人的には凄く気に入っています。何なら仲間になつてほしいと思う程に。ただ、この話をすると十中八九「え〜！？ やだ」何て言われるので、多分少数派ですね( ^\_^ ; )

( ^\_\_^ ) . . . . .

「うああ！」

ゲー ウス 「グ ギヤ ヤヤ ヤヤ ヤヤ ヤヤ ! ! ! ! !

「ちい！」  
流石に雪ぶつかけるだけならダメージは小さいか

プルチがモンキー・ポッド登りを再開し、約半分を少し越した所で、頭上からゲニウスの鳴き声が聞こえた。何だと思い、上を見上げると、ゲニウスが襲つて来ていたので、応戦中である。

「喰らえ！」

プルチが腕から真っ白な雪をゲニウスに向けて放つた。雪は綺麗にゲニウスに直撃し、雪だるまの様に丸めて固めてしまった。

頭と足のみを残し、雪に埋もれてしまつてゐる為、真っ逆さまに墜ちていくゲニウスだが、落下の途中に雪を割つて再びプルチに向かつて来るのを先程繰り返してゐるのだ。

プルチ「ちい！ やっぱし、やうかいか！ 面倒や」

言い終わると、何とプルチは自分の服をズタズタに引き裂いた。

プルチ「はあ～、疲れた。丈夫なんも今ばっかしは有り難みも無いわ……うし、準備完了や！」

服を破き終わったプルチは、切れ端からピロピロと垂れ下がつている透明のチャーブを引っこ抜き、肩にかけた。

ふと下を覗くと、ゲニウスが凄い速度でコチラに向かつて来ていたが、まだ少し余裕は持てる程度の距離はあった。

確認し終わったプルチは、肩にかけていたチューブの端っこを口に持つて行き、噛みちぎつて中に入っていた水を自分の体にかけた。

プルチ「ああ～、青臭……」

冷水草の混じつた水の為、多少青臭い味がする。体に水をかけて、

動き難くなつた体に嫌気がさしながらも、再び下を確認してみると、今すぐに対処しなければならない程にゲニウスは接近していた。

ゲニウス「グギヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ…！」

プルチ「ちい！ らああ！」

自分の方向に向かつて飛んで来るゲニウスに対してプルチは再び雪を放つた。しかし、もうそれは見飽きたと言わんばかりの馴れた動きで軽くかわされた。

プルチ「だらあ糞つ！ かわされたか！」

雪をかわしたゲニウスは、即座にプルチの真正面にやつて来て、その大きな爪で、雪の足場を破壊してしまった。

大きくバランスを崩したプルチだが、流石に2回目だ。すぐに、新しい足場をモンキー・ポッドを作り、即座にゲニウスへ反撃する。

プルチ「ホワイト・ブロー！」

自分の右腕を雪で巨大化させた後、ゲニウスを握り潰しにかかりた。

えつ？ 誰かさんと技の名前が被つてる？

ノーコメン

二二

自身の爪で雪の足場を壊したばかりのゲニウスに、今のプルチの攻撃をかわすだけの余裕は無かつた。

ゲー ウス 「グ ギヤ ヤヤヤヤヤヤヤヤ ! ! ! ! ! ! ! ! !」

雪で巨大化されたプルチの右腕は簡単にゲニウスの体を覆い隠し、またも体を丸めてしまった。

真つ逆さまに墜ちていく最中、ゲニウスは再び雪を割つての脱出を試みたが、今度はびくともしなかつた。『何故だ！？』何て思いながらもがきつづけるが、無情にも下に見える湖は拡大し続けていく。

墜ちていくゲニウスをモンキー・ポッドから眺めていたプルチが、まるでゲニウスに語りかけるかの様に、独り言を囁いていた。

『さらば』 多分方言なので、聞き覚えは無いと思いますので、

## 説明をば

『さら雪』 簡潔に言つてしまえば、パウダースノーワーつて奴です。

含む水分量が少なく、非常にサラサラとしており、コキダマを作ろうと手で固めても、上手く固まらずに、簡単に崩れてしまいます。

ブルチ「だが、おれの体は水をぶっかけた時、そのまま水を吸つて、

『べた雪』になるらしい……」

『べた雪』 これも諸に方言でしょう。パウダースノーよりも含む水分量が多く、べたべたとしている訳では無いですが、少しジメツとしていて、すぐに固まります。さら雪は蹴り上げると、小さな粒が舞い上がりますが、べた雪は蹴り上げると、固まつた雪玉の状態で舞い上がります。

下手な説明でごめんなさい（――）

ブルチ「べた雪状態のおれのインパクトは舐めたらあかんで？ サラ雪状態とは話にならん」

落下していくゲニウスを見て、もう大丈夫だと判断したのか、今度はモンキー・ポッドのてつぺんを見上げた。木漏れ日が丁度ブルチの目を刺激したために、軽く驚いてしまつたが、今までよりもずっと近くに光が見える事が、終わりの近さを表している様で内心ホッとしていた。

アト「フルチが『王宮に行つてくれ』って言つてたのは何の事なんかしら……」

ティア「かもね、ワインフリーが心配だからとも言つてたし……」

現在ティアとアトは城門で息を潜めていた。何故なら、2人の目の前では、海賊と思わしき者達が、フリツシユ島の王と思われる者との執事で何やら話をしていたのだ。

アト「全く隠す氣は無い見たいね。城門を全開のままなんて……」

ティア「よっぽど自信があるのかなあ……」

ティモルとフォセカから言わすと、正直自信ビビリの1つではなく、ここに来るまでに散々暴れ散らしているだけに、隠すと言つ発想自体がどこかへ飛んでしまっているのだ。それに、自分達の相手になる様な猛者がこのグランド・ラインの最初の島の1つであるフリツシユ島にいるはずが無いという考え方もあるが。

アト「でも、強いわね……」

ティア「そりだね、下手したらもう気付かれてるかも……」

ティモル「ジユフフフフフフーーったく、もひじやねえよ。端から氣付いてるっての！」

ティア「えつ！？」

アト「嘘つー？　聞こえてたのー？」

突然大声を出しはじめたディモルにトロスとペディは驚き、混乱している。フォセカは気付いていた様で、やれやれと言つ顔を隠さずに、あからさまに作つた。

ティアとアトも初めこそ驚いたが、すぐに影と輝赤を構え、臨戦体制をとつた。

ディモル「ほお～。サイズか、面白いモン使ってんなあ～」

フォセカ「……雑魚ではないな……」

下見をする様に2人を観察するディモルとフォセカに2人は何か氣味悪い物を感じ、少し怯んでしまう。

ディモル「ジユフフフフフフー　可愛いねえ～！　怯むな怯むな

2人は見透かされている事にそこまで驚かなかつた。ディモルとフォセカには今まで稽古を付けてもらつていた者達に近い凄みを感じるのだ。

ティアとアトは何も言わず、一瞬だけ目を合わせると、再び2人に視線を戻す。

相変わらず「ディモルはニヤニヤして何を考えているかもイマイチ掴めない。フォセカは顔一つ変えずに2人を見ている。

「ディモル、ジユフフフフフフ！ まあ、良いや。おれ達の話を聞かれた可能性がある時点で、お前等はヤラにゃいけねえなあ！」

やはり逃げられないかと頭で溜息をついた2人の姿をどこまでもニヤついた目で見てくるディモルが、背中に背負っていた長銃を構え、フォセカは腰に据えた刀を左手に持ち、2人に言った。

「ディモル、ジユフフフフフフ！ さあ……生き残れるかなあ？」

## 24話 邂逅（後書き）

個人的にティモルは凄く気に入っています  
（・・）

25話 開始（前書き）

テスト……今日で2日目で後3日……何やつてるんだろ僕は（  
-  
-  
-  
”

「デル、ディモルさん、おれも加勢しましょうか？」

「ディモル、いや、お前はモンキー・ポッドに迎え。やることは分かるだろお～？」

「デル、……なるほど、分かりました。それでは、言つてきますや」  
今まで黙つて話を聞いていたデルが痺れを切らし、自分のすべき事を聞いた。

いや、すべき事自体は分かっていたが、一応ディモルの耳を通してから実行に移そうとしての事である。

「デル、それじゃ、行つきます」

「ディモル、おう。期待してるぜ？」

ディモルの言葉を聞き終わると、デルはすぐに王宮から出て行き、モンキー・ポッドの方向へ走つて行つた。

デルが行つた事を尻目に確認すると、ディモルは右手に持つていた長銃をティアに向けた。

ティアは、銃口と睨めっこして動かないでいるが、けして余裕をかましている訳ではなく、隙が見当たらないのである。

動いた瞬間に体を貫かれる様な予感が、ティアの体をガチガチに固め、更に、額から汗を噴き出させている。

ディモ「ジュフフフフフフ！ つたく、お利口だなあ。下手に動いたら眉間に撃ち込んでやるうと思ったのによお～」

ティア「何で貴方程の実力者がこんなグランドラインの始まりの島何かに？」

ディモル「ジュフフフフフフ！ つたく、それはお互い様だぜ？ お前は何もんだ？ 纏ってるオーラ、雰囲気がそこらの雑魚とは明らかに違うぜ？」

ある程度の実力者同士ならば、対峙しただけで、力量は分かると言つが、まさにそれ、ディモルとティアはお互いを吟味しあつていた。

ディモル「ジュフフフフフフ！ 強い、本当に強い……が、残念ながら、おれにや遠く及ばねえなあ～」

勝ち誇った様に笑つた後、ティアも悟つていた事実を述べた。

ティア（マズイ、まさか！」んなのと、こきなつやね！」なぬひと思わなかつた……）

ティアの頭の中では逃げる事も考えたが、セドンやプルチ、ウインフリーとの約束を思い出し、すぐに無しと判断した。

それに、例え『剃』を駆使し、この場から離れたとしても、何故か逃げられる気がしなかつた。

いろいろと策を考えたが、結局は全てが行き止まりで、芳しい物は浮かび上がらずに、悶々としている。ディモルから声がかかつた。

「ディモル「ジユフフフフフフ！ つたく、駄目駄目よ。今お前が策を模索したつて生き残る事は不可能。それなら、醜く抵抗して美しく散らうぜえ～？」

ティア「嫌ですね。まだ、やり残した事も沢山ありますし」

「ディモル「ジユフフフフフフ！ つたく そうかい。んじや、がんばりなあ～。ほれ、行くぞお～！」

テイア「！」

「ディモルが引き金を引き、ティアに向けて弾丸を飛ばしてきた。

見聞色の霸氣により、弾が飛んで来る事を予測したティアは、発

砲される前に反応し、銃口の軌道上から避けた。

「モル！」  
「逃がすかっ！」

「アイテ」「？」

発砲された弾はティアの頬を霞め、王宮の壁にめり込んだ。

ティア（とんでもない……！？）

「ディモル「ジユフフフフフフ！！」つたく、見聞色の霸氣か！まさかお前見たいな餓鬼が使うとはなあー！　おれが打つ前に反応しやがった！」

ティア（この人、僕が反応したのを見て、軌道を修正した！  
かわせていない。あっちが外したんだ……） 僕は

ディモルが引き金を引く直前にティアが反応し、それを確認した  
ディモルがティアの頬を震める様に軌道を修正させた。

デイモルの、化け物の様な反応速度と、機械の様な性格性に、テ  
ニアは遊ばれ、絶望した。

ティア（見聞色の霸氣は当てにしちゃいけないな……。見えた未来は、余りに実力の開いた者同士だと、簡単に捩曲げられちゃうみた

いだ……）

ディモル「ジユフフフフフフー、さあー、どうする。この実力差を……」

### モンキー・ポッド+

ブルチ「まさか、これが父さんの持つて来いつて言つてたもんか？」

ゲニウスの迎撃を終えたブルチは、登る事だけに集中出来たせいか、先程よりもずっと速いペースで登る事が出来た。

お蔭様で、早々とモンキー・ポッドのつぶんに到着した。

丁度モンキー・ポッドを真上から見た時の中央部分に、枝が収束した場所があり、半径1m程度の広さで円形に広がった場所が出来ていた。

ブルチがここに到着した時、自然に出来るには、不自然過ぎる場所にかなり驚き、固まってしまっていたが、その中央部分にあった物が目に入った瞬間、すぐに硬直を解き、それを手に取った。

形は林檎の様であるが、渦の様な模様がビッシリと描かれていって、上からひょっこりと伸びたヘタは、クルクルと捻れている。

色は鮮やかな水色で、良く晴れたフリッショ島の青空に似ている。

ブルチ「まさか、悪魔の実か！？」

＋モンキー・ポッド下＋

デル「よし、後は待ち伏せして奪いあげるだけだ」

バンダ「それにしても、驚きだな、まさか本当にゲーウスを倒すなんてな……」

ブバル「ふむ、湖に沈んでいるな……」

ブルチに雪で丸められ、真っ逆さまに落としたゲーウスは湖に沈んでいた。

体中の雪はそのままに。

バンダ「ふむ、それにしても、随分と厄介な力を手に入ってくれた物だ……」

デル「まあ、この手錠があれば十分糸口はあるから、問題は無いだろ」

指で海楼石の手錠をクルクルとさせながら言つ。

当然手袋ははめている。

ブバル「だが、油断は出来ぬな……」

少しだけ場を引き締める様に、バンダが言つと、デルが軽く呆れた様に言つた。

デル「にしても、お前等は案外役立たずな……。相手に傷一つ付けれずにおねんねかよ……」

バンダ「……言葉も無い……」

ブバル「……すまぬ……」

団星を突かれた2人は、何も反論出来ず、素直に謝るしか出来なかつた。

ワインフリー「どうなってるんだ……」

自分の着替えを済ましたワインフリーは、プルチの分の着替えを片手に、そそくさと出ていくつもりだったが、目の前では戦闘を広げるティア、ディモル、アト、フォセカがいた。

ワインフリー「どうする……。あんな修羅場なんか潜り抜けられねえよ……」

ワインフリーがオドオドしている為に、背後から近づいていた足音に気付くことは出来なかった

## 25話 開始（後書き）

まあ、良い気分転換になりましたや（^ー^；）

## 26話 想定範囲外（前書き）

3月の初めに携帯電話を替えました（ 、 、 、 ）ノ

パケット料金の関係で、小説の続きを書く事が出来ませんでしたが、これからは投稿出来ますんで、今後とも宜しくお願いしますm（—

—） m

えと、先に言つておきますね……

酷い出来です（ 、 、 、 ）

「ディモル「ジユーフフフフフフ！」　つたぐ、思つたよりもやるなあ  
〜。よ〜し、少し樂しくなつて來たぞ！？」　どうする？　この  
実力差を？　どうせ、目的のブツが届くまで少し時間があるんだ。  
暇潰しに付き合えや」

ティア「良いんですか？　直ぐに僕を殺さなくて？　意外と僕  
が粘つて貴方を苦戦させるかもしませんよ？」

軽く挑発的な口調で、言い放つ。

別に、策略があつたわけでは無く、余りにも自分をクズに見ら  
れたから少し反抗したかつただけである。

「ディモル「ジユーフフフフフフ！」　良いね。苦戦させてくれよ。お  
前みたいなルー・キーがおれにどれだけヤレるか見てみてえ」

ティア「その、目的のブツって言つのも僕達が奪っちゃいますよ？」

ティアの言葉に一瞬だけピクッと反応したディモルだが、アゴ  
に左手を当て少しだけ考えている様子を見せた。

「ディモル「あ」……良いぜ？」

ティア「え！？」

余りに予想外な答えが帰つて来て、素つ頓狂な声を出して仕舞つたが、直ぐに冷静を取り戻してディモルの答を待つ。

隣で、アトと交戦していたフォセカもディモルの言葉の真意を図り兼ねている様で、チラチラとディモルの方向へ視線を飛ばしている。

しかし、どこか納得した様な所もあったのだろう。

一度大きな溜息をつき、ビニカ「やれやれ」と言いたそうに肩を落胆させていた。

ディモル「いやな、出世し過ぎちまつたんだ。おれ等……」

ティア「……出世？」

「これだけじゃ、ディモルの言いたい事が分からぬのだらう。

眉間に深いシワを作り、ディモルに視線を戻し続ける。

ディモル「おれたちや戦う事が大好きでねえ。元々フロックス・レボルートに入ったのだって、ハイレベルな戦闘を味わえると思つ

たからだ

ティア「フロックス・レボルート?」

知らないワードに困惑するティアだが、そんなこと知らんとでも言つかの様に無視して、説明を続ける。

ディモル「当然、おれとフォセカはかなりの戦績を上げて、直ぐにおれ達は出世して行つた。様々な指令の元での暗殺、潜入も新鮮で楽しんだもんだつた。が……。大幹部になつてからは別だ。おれ達は、グランド・ライン始まりの海を拠点に、ただの下つ端管理仕事がメインになつちまいやがつた。正直、死ぬ程つまらねえ……」

ディモルは説明をしている間、どこか表情が淋しそうになつているのが見て取れたが、ティアはあえてツッコミはせず、黙つて聞いていた。

フォセカ（ふつ、静かに過ごしたいだの抜かす癖にな……）

ディモル「そこでだ、お前に目的のブツを奪われ、更におれ達は組織を裏切る。……これで、おれ達にフロックス・レボルートからの刺客がタップリとやって来ると思わねえか?」

ティア「な!? そんな事をしたら、僕達がそのフロックス・レボルートって言つのに狙われるじゃ無いですか!?」

当然の反応。

しかし、ティアもこの後言われる事の想像はついてる。

体を強張らせた。

ディモル「ジユフフフフフ！　その様子は、気付いたな？  
つたく、感の良い奴は好きだぜえ～？　おう、受け取らなきゃ殺  
す」

にたぐつとした笑顔を作り、ティアに銃を向けて来た。

ティアも迷つたが、元々選択肢が無いに等しい。

命あつての人生、諦めたように「受け取るよ」と答えた。

ディモル「ジユフフフフフ！　つたく、賢い選択だ！　感謝  
するぜえ～？」

ティア「賢い選択も何も、殺されるんじゃ受け取るしか無いじゃ無  
いですか……」

呆れたようご、ジト目で言い返す。

「ディモル「ジユフフフフフ！」 まあな！ つたく、だが、おれから少しサービスをしてやる。これでフヨアつて事にしやがれ」

ティア「……何ですか？」

期待の心は一切込めずに、ボソッと呟いた

「ディモル「3度だけ、お前の言つ事を聞いてやる」

左手の指を3本立て、ティアに見せつける。

ティア「3度……言つ事を……？」

「ディモル「ジユフフフフフ！」 つたく、そうだ！ 意外と俺は義理堅いんだぜえ～？ たまに……」

ティア（……突拍子もない事を言い出す人だなあ～）

ティアが困惑しているのを見て、ディモルが笑いながら、ティアに言った。

「ディモル「ジユフフフフフ！」 つたく、今すぐじや無くて良いぜ？ おれ達に電伝虫で伝えりや良い」

ティア「それ、本気で行つてます?」

ディモル「大真面だ! わざ今まで、敵だったから信じられねえか?」

ティア「それはまあ……はい」

ディモル「つたぐ、元をただしゃおれ達は別に戦う理由なんぞねえんだぜ?」

ディモルの言つたこの一言に、ティアも思い出した。

別に、2人が戦う必要はなかつた事を。

観念した様に、ディモルに漏らした。

ティア「……そうですね。意外に話すと面白そうな人ですし、信じます」

ディモル「ジユフフフフフ! お利口ちやんだ」

相変わらずのにやけ面に、ティアも軽くウンザリした様に溜息を付いた。



## 26話 想定範囲外（後書き）

やはり、じつにこのサイトに登録した時のメモは大事にするべきですね……

昨日まで、メモが見つからず、ログインできないと書いた歯痒い思いをしましたが……

何とかなるもんですね（ ； ）

## 27話 帰還（前書き）

文章の書き方を変えて見ました（（（（：。。）））））

戻せと叫ぶ声がありましたら、すぐに戻します（（（（：。。））））

何かもう、最近どう文章を書けば良いのかが全く分かりません（（（（・。。））））

いや書くぞーーと、ケータイを握りしめても、気付けば、歸れんの投稿小説を見ています（（（（；。。）））））

……もつ、わかんない（ーーーー）

もともと、分からぬのですがね……

ティア

先程、僕との戦いでディモルさんがイキナリ、「3回まで言ひ事を聞いてやる」何て事を言い出した。

正直な事を言ひてしまつと、ディモルさんの強さは異常だ。

稽古をつけてもらひっていた、世界最高峰の力を持つ人々を思い出す程に……

闘つたと言つても、ほんの2~3分程度会話をし、銃弾が1発飛んだだけだけどね。

でも、たつたの2~3分だけでハッキリと自覚しちゃつたんだからしあうがない。

そんな人に、今回は引くと、更には3回までは言ひ事を聞くといつ破格の条件で見逃して貰える事になつた。

ただ、良い事ばかりでは無く、ディモルさんとフオセカさんの従来の目的の品である物を僕達を持って行けと良いだした。

勿論、そうなると僕とアトは、ディモルさんの所属していた組

織に狙われてしまつであろう事は簡単に想像がついた。

けれども、こんな所で殺されて終わつてしまつのなら、お先が暗くなつてもそちらに掛けるべきと思ったから、ディモルさんの要求をのんだ。

今でも、ディモルさんは満足そうにやけている。

癖なんだらうね、このにやけるの。

最初は恐怖してたものだけど、スッカリ何も感じなくなつた。

慣れつて凄いね。

「ジユフフフフフフ！… んじゃ、今日はもう引くわ！ 頑張つて、デルから物を奪つてくれ！ ジュフフフフフフ…」

「デルつて、さつきまで一緒に居た人ですか？」

「ああ～。そうだ、一つ忠告しておこう。デルには気を付けた方がいい

「強いんですか？」

「ああ～。おれとフォセカは、組織に…… フロックス・レボルトに入りたての頃は、かなり強かつたからな、期待のエースとして、すげ～勢いで出世して行つた。デルが、それだ。間違いなく、経験を積めばおれ達クラスの実力になる！」

相変わらずのにやけフェイスで、ティアに言った。

それを聞いたティアは、不安にかられ、ディモルに聞いた。

「…………僕達と比べると、どうですか？」

「ジユフフフフフフ……！　つたく、そうだなあ……お前の方が強い！　だがあ、大差は無い。しかも、あいつはお前を殺す気でやるぜ？　感じた所、お前は海軍と少し絡んでるな？　そんな持つて、殺しをした事は無い…………だな？」

「確かにそうですね。殺し何かは生涯したく無いですし」

「ジユフフフフフフ……！　殺す氣のある奴と、殺す氣の無い奴との差は、想像以上に大きいぜえー？　こんな当然の話、言わねなくとも分かってるだろ？がなあ～…………」

「いえ、復習は大事ですから」

軽く微笑んで、返事をした

すると、ディモルさんは半ば呆れた様に笑いながら「つたく、お利口さんめ」何て言つていた。

隣では、自分達を置いてけぼりに進む話に耳を傾けながら、ジト目を送っていた2人に気付いて、頭の中で申し訳ない様な気持ちになつたので、軽く苦笑いを送つておいた……「ごめん、アト

その後は、フォセカさんがティモルさんに軽く小言を言つていた様だけど、ディモルさんに上手く丸め込まれて、何も言えなくなつたり、何時の間にか居なくなつて、トロス国王に呆れていたりと、短い間だがやんわりとした時間が流れていた。

最後には、「じゃあな！」と、片手をあげて船へ戻つていった。

「何なのかしら……あの、ディモルって人は……」

「なんて言うか、激しい人達だね……」

2人して、ディモルさん達の事を笑い合つて、本音を漏らして仕舞うと、ホントにホツとしてゐる。

だつて、あの2人が居なくなつて気が抜けたのか、膝が凄く笑つてるんだもん……訂正します。

爆笑です……。

「……忘れちゃつてたけど、ワインフリーって何処に居るのかしら？」

2人のイレギュラーによつて、完全に忘れていたが、ティアとアトの本来の目的は、ワインフリーの安全確認。

「…………やうだね、取り敢えず」の中を隈なく探しと見よつか

「やうだね

フルチ

まっさか、父さんの欲しがつてたもんが悪魔の実だなんて、思  
いもよらんかつた。

コキコキの実を自分で喰わずに、おれに喰わしたのはハハハ  
事やつたんか…………。

…………にしても、どうしよな。

今、モンキー・ポッドの中間辺りまで降りとるやけども、見  
え取るんよねえ、人影が3つ……。

あつきらかに、恋人兄弟とワインフリーの3人では無い事は確  
かや……

となると、父さんからのありがた~いお迎えって事になるんや  
うね……

う~ん、本当にありがたい

にしても、どうしよ……あいつ等に1回だけ抑え込まれとるけ  
ど、海楼石を持つとる見たいやしな~。

助けが来るまで待つかなあ……戦略的待機？

実際、あいつ等に抑えこまれた時は全く気付けなかつたしなあ  
」。

父さんの事で冷静じやなかつた事もあるんやうけども、多分  
あれよりも強いし、3体1だし……うん、待つとるー

……向こうがおれに気付いてるのに、向かつて来ないのが薄氣  
味悪いけどな……。

デル

おれ達を警戒してんだうなあ……

一気にブルチの降りる速度が下がつちまつた。

別に、下で待つてるのは、怠いだけで理由は無いんだけどなあ  
」

まあ、正直な所、地の利で言つなら下の方が良いけども、ぶつ  
ちやけどつちでも勝てるだらうから関係ねい

ただ、さつきからバルが「早く降りるのだ！」って、連呼  
してるのが鬱陶しいから、早くして欲しいけどな……

何だらうな、何でキャラクターって最初に予定してた風になつ

てくれないんだろうな……バルは少し賢い奴だった筈なんだけ  
どな……気付けば馬鹿だ。

……シンマイ

アト

「ワインフリーは見つかった?」

「見つからない……ビリヤケタんだから、ワインフリー……」

あれから、20分位かしら……この高殿の中を隈なく探したの  
だけど、ワインフリーは見つかなかつたわ……

「取り敢えず、プルチの所に戻つて見る?」

「やうね。もしかしたら、すれ違つてるかも……」

その後は、すぐに王座を出てモンキー・ポッドに向かっている  
最中なんだけど、ワインフリーは何所に居るのかしら……

ワインフリー

「これは……」

うひひひうう…………！

い、いてえ…………！！

目の前には焼かれた街、刺されて、撃たれて、今すぐ生き絶えてもおかしく無い程の怪我を負った人達が転がる、地獄絵図が広がっていた……

27話 帰還（後書き）

何かもう「ゴメンなさい」（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

話も殆ど進んでませんね（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

本当に、「ゴメンなさい」（ ）（ ）（ ）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1864p/>

ONE PIECE ~紛れ込んだ双子~

2011年7月23日19時47分発行